魔剣の君

Knight bug

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔剣の君

【Ｎコード】
Ｎ６４３７Ｖ

【作者名】
Ｋｎｉｇｈｔ　ｂｕｇ

【あらすじ】
ワシは、御年９８才の老人だ。
そんな老人が、曾孫の命と引き換えに異世界へ転生した。
世界も、常識もそして性別、年齢までもまるで違う所で、新しく楽しく自由に行きて行く筈だったのに。有り難迷惑な成人の儀とやらを行う事で、城へ家族一緒に強制引っ越し。
希有な銀の双眸に金の巻き毛と言うのが気に入った王子様達からのアプローチ、そして大天使をペットにする筋金入りの根性。

おじいちゃんは、何処へ？

ワシは、御年９８才の老人だ。
息子達は、それぞれに独立して結婚し嫁を貰い、孫もいるし、曾孫も出来た。
人生を謳歌したワシには、何も失う物など無いと思っておった。
ワシは、長男の夫婦と一緒に住んでいる。
まだ矍鑠（かくしゃく）としているワシは、自分の事は自分で何もかもやっておった。ボケたくは無いからな。
そんなワシの唯一の楽しみは、曾孫のファートムと毎日自宅庭で、シャボン玉を吹いたりして、遊んでいる事だった。
曾孫のファートムは、今年で5才となる。
こんなに、眼に入れても痛く無いほど可愛い曾孫が出来るとは、思っても見なかった。
じゃが、ある日それは叶わぬ夢になってしまう。
ある冬の事じゃった。
ワシが毎日の日課となっている庭掃除と散歩を終わらせ家に帰り着くと、台所でファートムの母親が泣いておった。

「アンナどの。何故泣いておるんじゃ？ファートムはどうしたのじゃ？」

すると、アンナは嗚咽を堪え切れなくワシに抱きつく様に、ただ泣いておった。
アンナの話に寄ると、ファートムは、今朝元気に家を出て行ったのだが、幼稚園の遠足途中の幼児の列に、いきなり突っ込んで来た酒帯運転のバイクに跳ねられ、病院に担ぎ込まれたのだと言うとアンナは泣き出した。
そして嗚咽を上げながら、可愛いファートムは未だ意識不明の重体

と言っていた。
ワシは、驚いてファートムが入院している病院へとアンナさんと一緒に向った。
ワシの目には、ＩＣＵの中で色々な装置につなげられた管で何とか生命維持を続けているファートムの体がベッドの上に横たわっていた。
ワシは、神に祈った。
どうか、ワシの命をあの子に授けて下され。ワシの願いを聞いて下され。
皺が寄った血管が浮き出ている両手を擦りながら合掌するとワシは神への祈りに入っていた。
いきなり目の前が白く光ったかと思うと、ワシの体は病院の廊下で倒れておった。それを見た看護士、医師、そしてアンナさん達が大慌てでワシの倒れた入れ物と化した体に縋り付いて泣いていた。
医師は、ワシの脈を計って見ている。そして、首を横に振った。
その情景を見て、ワシは自分の隣に立っているであろう神様に礼を言った。

「どうか、神様！ワシの可愛い曾孫を助けて下され。どのような裁きでもワシは受けます。例え、他の世界へ飛ばされてもワシは文句は言いません。ファートムが無事に天寿を全う出来るのであれば・・・。」

神様は、ワシの皺が寄って小粒のようにしか見えない目を見ると、コクリと頷いて下さった。
ワシの中から魂が取り出されるとそれは、二つの眩い球となり一つはファートムの中へと消えて行った。そして一つは、白い花畑の扉の向こうへと消えて行った。
ワシの意識は、まだファートムが横たわっている病室の中に居った。
ワシは、ファートムに近づくと声をかけた。目を覚ましたファート

ムには、まだワシがぼんやりだが見えているらしい。

「大ジージ？どうしたの？」

ワシは、ファートムにこれから旅に出る事になったと告げた。
ファートムは泣いていたが、ワシはファートムに出来る事は、ワシの魂の一部をお前に渡す事だと言い残すと霞の如くワシの体は、徐々に薄くなって行った。
完全に消える前に、ワシはファートムに「アンナさん・・・お前の母さんをこれ以上泣かせてはならぬ。分かったな、ファートム」そう告げると、ファートムは黙って頷いていた。
ワシは、最後の力で、ファートムを抱き締めると光の粒となって消えたのだった。
ワシの意識は、花畑の壁にあった扉の向こうに飛ばされて行った。
ファートムよ。どうか末永く元気で暮らせ。

医師達は、ファートムが奇跡的に意識を取り戻した事に驚いていた。
アンナは、我が息子を抱き締めていた。
ファートムは何が何だか分からずに「大ジージがね、僕に大ジージーの魂の一部を上げるって言っていたよ。それから、大ジージったら遠い所に旅に出るんだって。僕にお母さんを泣かせちゃダメだって言っていた」そう言うと、アンナは目を見開いて泣いていた。

「大おじいちゃま・・・！」

両手を顔に覆って泣いている母さんを見てファートムは病室の天井を見上げた。
バイバイ。大ジージ。元気でね。

おじいちゃんは、何処へ？（後書き）

新しくこう言う風なファンタジックな物を書き始めました。色々と手探りで書いております。誤字脱字があると思いますので、ご了承下さい。

大ジージの旅立ち　ファートムｓｉｄｅ

目が覚めた僕の側には、母さんがいた。
そしてお医者さんもいた。
みんな、みんな僕を見てとても驚いていたよ。

「ねぇ。ママ？大ジージは？」

僕がそう聞くと皆固まってしまった。
母さんは、僕の言葉を聞いてハンカチで目頭を押さえていた。

「僕ね。大ジージと約束したんだ。母さんを泣かせたりしないって。だから、泣かないで。母さん」

そう言うと母さんは、ワァッと泣いて僕に抱きついて来た。
僕は、一体何があったのか分からず、そのまま母さんに抱きつかれていた。
その日の夕方には、僕は父さんともジージとも会えた。
ジージ達は、僕に大ジージの事を話さない様にしていたけど、僕は話したんだ。

「ジージ！父さん。あのね、大ジージが僕に・・・・たむしーって言うのをくれたんだ。そんでね、大ジージが遠い所に旅に出るって言っていたよ。いつ帰って来るのかな？」

僕が大ジージと話した事を皆に言ったんだ。すると皆、泣き出してしまった。
バーバも母さんもジージ達も・・・。
それから、三日後だった僕が大ジージと最後のお別れをしたのは。

まるで眠っているみたいな優しい顔だった。
僕は、大ジージが煙となって空へ上って行くのを母さん達と一緒に手を繋いでみていた。
父さん達から僕の命は、大ジージから譲り受けた大切な命だから、大事に生きるんだと言われ、訳も分からず僕は、「うん！僕、だって大ジージと約束したんだ。母さんを泣かせたりしないって。」そんな僕の言葉を聞いた親戚の叔父さん叔母さん達は、一斉にハンカチで目頭を押さえて肩や背中を震わせて泣いていた。
僕は、大ジージが別の世界で頑張っているって信じてる。
この宇宙（そら）の何処かで。
だから、大ジージ見ててね。
僕、頑張るから。
僕は、青空に上って行く煙に向って、精一杯手を振った。

あれから、１２年の月日が経った。
今、俺がこの家でジッチャン達と一緒に笑って過ごせるのは、自分の命と引き換えに俺を助けてくれた大ジージのお陰だ。
俺は、それまで大ジージの本当の名前を知らなかった。
ある日、ジッチャン達に大ジージの名前って何だっけ？と聞いた事があった。
すると全員黙りこくってしまったのだ。
何でも大ジージってば、自分の名前を呼ばれるのが恥ずかしかったらしく、あまり本名を皆に呼ばせないでいたらしい。俺達の名字がダルクと言うのだが、俺は、どうしても大ジージの名前が知りたくて市役所に行ったり、後は倉の中にある書物をみたりして調べてみた。
すると、大ジージの名前は、サー＝ジャン＝ヌー＝ダルクと言う名前だった。
俺達の家は、元々爵位を持っていた家らしい。でも、なんで皆隠していたのかな。

何となく分かる、俺が覚えている大ジージは、４才の俺と一緒になって箸にマカロニサラダのマカロニを通すのを競争したりして、母さんに一緒に怒られたりしてた。
夏は、一緒にスイカのタネを飛ばしやっこして、勢い余って大バアバの顔に2人が飛ばしたスイカのタネが当たって、大目玉を食らった事もあった。
大ジージが、俺に体操の練習とか言って塀の上に上らせて、隣の柿の実を取らせていた事もあったし。それも後で母さんから、怒られた。
冬季オリンピックのアイススケートの放送をテレビで見ていて、大ジージが「あんな短いスカートで、寒そうだね。毛布でも持って行って、ムギュってしてあげたいね。」と言っていたから俺も素直に、「そうだよね。寒そう。僕も一緒にムギュってするよ。」なんて言っていた。
大ジージは、とても面白い人だった。
まだ大バアバが生きていた頃、大バアバが昼寝をしていて、あまりにもイビキが煩かったので、俺と大ジージは大笑いしていた。その時、大ジージは、鼻をかんでいたティッシュを丸めると、ポーンと大バアバの大きく開いた口の中へ入れたのだった。
もちろん、口に使用済みの鼻紙を入れられた大バアバは、すぐに起きて俺と大ジージは、こってりと大バアバに絞られた。
次から次に楽しい大ジージとの思い出が蘇って来る。
あれも楽しかったな。
大ジージが、毎朝の日課である庭掃除をした後で、汗を掻いたからってポケットから出した白い物・・・・・・・。それは、自分の大きなパンツだった。これには、俺もビックリしたが、大ジージは「体から出る物は、汗も尿も全ては自分の体から出るものなんだ。それにこれは綺麗に洗ってあるから大丈夫だ。」と言って、俺の額のあせも拭こうとしてた事もあった。
勿体ないといつも言って、牛乳も少し残ったら、水で薄めて飲む面

白い人だった。

「大ジージ・・・会いたいよ・・・」

俺は溢れ出て来る涙を拭っていた。

俺に命をくれた大ジージは、今何処で何をやっているのだろうか・・・。

俺はウトウトと眠りの島へ行く為の筏に乗って、深い眠りへと旅立って行った。

大ジージの旅立ち　ファートムｓｉｄｅ（後書き）

次からは、大ジージが出て来ます。

大ジージの旅　転生（改）

ワシは、９８才既婚者で、息子は３人、孫は１２人、曾孫は１人の幸せ者だ。
今ワシは、神様と一緒に白いこの道をテクテクと歩いておる。
まるで、雲の上を歩いているようじゃ。

　ワシは、神様に頼んでワシの魂の一部を曾孫のファートムに渡して欲しいと頼み、ファートムは奇跡的にも一命を取り留め、あの事故の後僅か二日間で退院した。
葬式の最中、ワシはずっとファートムの側におった。
ファートムは、母親のアンナさんが泣いておるのを一生懸命慰めておった。
あの子は、真直ぐで優しい子に育つ。
ワシは、そう核心すると神様と一緒に斎場の煙と共に天上界へと上って行った。
　その後ワシは、神様からの提案でワシに他の世界を見て来て欲しいと言われた。ワシは、自分の願いを叶えてもらったのだから、神様の願いなら聞くと言って、二つ返事で神様の依頼を受けた。
神様から、そこは人間界では無くて、異世界だからと言われたのを覚えている。

　真っ暗闇の中、ワシは目を覚ました。
手を動かすとまるで水の中に自分が浮かんでいるようで、皺皺になっている手足が見える。
真っ白い世界は、柔らかくそして優しい。ワシは、外から聞こえる声に耳を傾けた。

「赤ちゃん、早く出て来ると良いわね」

「ええ。今か今かと、待っているのよ」

そうか、ワシは転生して、今度は赤子となってこの母体の中にいるのだな・・・。しばらくすると、ワシの天井から声が聞こえた。＜もうすぐ、時間となります。シートベルトとなるものに絡まない様にしっかりと手足でへその緒を押さえて下さい～＞

そのアナウンスが消えた後、ワシがいるこの水が入った袋が急に地震を起こし始めた。

「も、もしや・・・・産気づいたのでは・・・」

上下左右にワシの体が揺れ、ワシの意識の中にワシの母親となる人の感情が潜入して来る。

（私の赤ちゃん！もう少しで病院だから・・・頑張って・・・）

どうやら、この母親は出産自体初めてのようじゃ・・・・。

ワシは、母親の意識を使って部屋の周りを見渡した。綺麗に片付けられた家の中は、生前大ジージが住んでいた日本の家とは、全く違う物だった。

父親の写真は、あるんじゃな。後、この母親に落ち着いて貰わないと・・・。

誰かに連絡する様に母親の頭の中にワシの思考を潜入させた。

じゃが、ここの家の中には、何故か電話が無い事にワシは気がついた。

一体どうやって、連絡を取るんじゃろうか？

ふと思ったワシは、この母親の行動を見守る事にした。心無しか、この母親は緊張の面持ちで、先ほどから鏡の前をうろうろと歩いている。漸く彼女は決心したらしく、髪を縛ると大きく深呼吸をし始めた。

「赤ちゃん。母様を助けて。母様に力を頂戴」

母親は、大きな鏡の前に立つと其処に手を起き、念じた。すると鏡の表面に浮き出たのは、よく孫達と見ていた知った某アニメの魔法陣とか言う者じゃった。

ほ、本当に、魔法陣ってあるんじゃな・・・。

すると母親は、この魔法陣の中に入って行った。

お腹の中のワシにも分かる様に、魔法陣の中に入る時、まるで柔らかいシルクの布で全身を包まれたようなそんなフワッとした感じがした。

そんな奇妙な感じから、一転してワシの体を弾き飛ばす様に水が出口に向って押し寄せて行く。

ワシは、驚きながらも、濁流と化した水に揉まれながら、狭い出口へと押しやられ、気がついたら眩しい世界に居た。

ワシを綺麗に水で洗って、母親に渡している医師。そしてワシの事を愛おしそうに見つめるこの世界のワシの母親になるであろう、その人をワシは見て「宜しく」と言った。

じゃが、ワシの声は、赤子特有の「ホギャー」と言う泣き声になっていた。

暫く、ワシのこの年寄りの思考を押さえて行く事にする為、ワシの思考を眠らせる事にした。

ワシの名はこの世界でも、何故かジャンヌと呼ばれておった。

あれほど嫌がっていた名前だったが、何か意味があるのだろう。母親と呼ばれる人は、ワシにジョセフィーヌを縮めてジャンヌと言う風にしたのと言っておった。

この世界のワシの名は、ジョセフィーヌ　シュスラード　フォング　ミハエル　トスポートルと何だか長ったらしい名前なのだ。一体これでは、どれがワシの名前なのか名字なのか分かりやしないじゃないか。

そう思っていたが、どうやらワシはこの世界で貴族とか言われる人達の家に産まれたらしい。その貴族とやら、娘には、母方の祖母と父方の祖母の名前を付ける事に決まっており、それがフォングとミハエルと言う事だった。シェスラードと言うのは、この世界の宗教の上の神様に使える天使の名前だそうだ。

と言う事は、普通で言うならば、ワシの名はジャンヌ＝トスポートルで良い訳じゃな。

ようやく自分の名前を覚えた頃には、ワシはもう既に４才となっておった。

やはりこんなに長い名を覚えるのには、時間がかかる。

　ワシは、自分がただの子供の様に、この世界の幼稚園へ行って少しずつ子供らしく振る舞って行った。

この辺は、日本と一緒なのだな・・・。不思議に思いながらも幼稚園では幅広く色々な子供達と遊ぶ事にしていた。

じゃが、この様な教育機関に子供を預けられるのは、貴族か王族、または商家もしくは豪農と言った所謂金持ちだけだったようだ。

大ジージの旅　転生（改）（後書き）

大ジージは、ジャンヌの意識の中に存在すると言う形で、これからも出て来ます。

蒼い魔石　（改）

　此処は、サシュルート王国にある男爵家。
　ジャンヌの成長を目を細めて見ている自分の両親達。
彼らは、ジャンヌが転生前の記憶を持っている事を知らない。
母親ジャックリーン、輝く金髪が巻き毛でしかも縦ロールにキッチリと巻かれている。その所為か髪が縺れやすくブラシで髪を梳かれる度に、鳴きそうになる。
　幼い頃、一緒にプールで母親と遊んだ時に、髪の毛が水に濡れて真直ぐになった事があった。
ジャンヌの髪もジャックリーン譲りの金髪に天然縦ロールが入っている。
母親のジャックリーンの肌は白くきめ細やかでまるで陶磁器の様な肌をしている。
瞳は、薄い藤色がとても綺麗だ。
ジャンヌはいつも母親の事を「母様」と呼んでいる。

「おはよう。母様」

　ジャックリーンは、体が弱く夫と結婚して１０年目にようやく念願の娘に恵まれたのだ。
今朝はジャックリーンの体の具合が良いのか、日当りの良いテラスで朝の紅茶を飲んでいる。
ジャンヌの父親は、同じ貴族でも男爵と言う立場だと言う事だった。
　彼の名は、ベンジャミンと言う、父親の親しい人達からは、ベンと呼ばれている。
父親は、音楽に精通していて、ジャックリーンにピアノと声楽を教えてくれた。
決して裕福とは言えないが、そこそこの生活が出来てジャンヌはと

ても幸せだった。

ジャンヌが6才の時、庭でとても珍しい光る石を見つけたのだ。蒼く光る石は、どうやら自分だけにしか見えていないらしい。ずっとそこにあったのに、誰も気がつかないのだ。ジャンヌがこの光る石に気がついたのは、ヨチヨチ歩きの赤ちゃんの頃だった。キラキラと光り輝く石に目を見晴らせた。

その時、ジャンヌの中の大ジージは、直感で思ったのだった。

（この石は、今　ワシが触ってしまうと飛んでもない事に巻き込まれてしまうかも知れん。もう少し様子を見て置こう。）

それもその筈、その時にワシの乳母としていたマギーや母親に父親達には、この石が見えてなかったのだ。幾らワシが可愛い声で「ピカピカ！マブチー！」と何度連呼しても、彼らは「ジャンヌにはお日様がまだ眩し過ぎたんだね。それなら、中に入ろう。」そう言われて、ワシは自分の魔力がもしかしたらこの世界の両親達よりも遥か上なのでは・・・と思ったのだった。

それから5年もの間、雨の日も、風の日も、そして雪の日も、茹だるような夏の暑い日にも、ワシはいつも、あの庭の片隅に放っておかれていた石を見ておった。

あの石は、誰にも気付かれる事無くただ、其処に居たのだ。ジャンヌがその石がある方向に目をやると、石は途端に輝き出していた。早く拾ってくれと。

その石は、この異世界では魔石と呼ばれて居て、魔力が強い者はこの世に生を受けた時から、魔石を手に握って出て来る子も居ると言う。

ジャンヌが学校と呼ばれる所へ通う様になってから、気付き始めたことは、地方の学校で学べる子供達は、皆　公爵や子爵、伯爵家の者ばかりであった。

石は、青に近ければ近い程、魔力が高いのだと学校で教えてもらっ

た。
ジャンヌが持っている魔石は、蒼く光り輝いていた。
この時までは、自分が拾ってしまったこの石が、ジャンヌの人生をどれだけ変えてしまう事になろうとは、ジャンヌ自身　知る由もなかった。

時は流れ、ジャンヌが15才になったばかりの時だった。薬師としての腕も上がり、病弱だった母親のジャックリーンも、ジャンヌが調合してくれる薬のお陰で、とても元気になって来た。ジャックリーン譲りの薬師としての能力をフルに活かす為に、今日も森へ行って薬草や晩ご飯の山菜を取りに行く事が、ジャンヌの日課となって行った。
男爵家の領地にある森でいつもの様に、山菜を摘んでいたジャンヌは森の奥で何かが自分を呼んでいる事に気がついた。
森の奥は、もう男爵家の領地ではなく、王家の領地となっている。
だが、この時ジャンヌは思春期の好奇心と言う物に勝てず、森の奥へと突き進んで行った。
ジャンヌが草や木々の枝を掻き分けて森の奥地へと進む度に、森の動物達はジャンヌの事を見て皆、頭を垂れるのだった。
一体何が起こっているのだろうか?ジャンヌの目には、光り輝く物体が見えていた。
草原に踞っていたのは、一人の若者だった。年は恐らくジャンヌよりも年上なのだろう。
篭を地面に置いたジャンヌは、彼に近づくと脈を測ったりしていた。
若者の顔色は青白く、呼吸も浅い。このままでは意識も無くなってしまうのではと判断したジャンヌは、彼の体に外傷がないかを調べ始めた。
若者の左太腿の外側と右肩には、矢で狙われたのか、矢傷の後があった。

「馬にでも乗っていたんだろうな。でなきゃ、矢傷がやや斜め上に入ることなどないしな・・・」

自分の周りにいた動物達にジャンヌは、薬草を採って来てくれる様に頼んだ。
その間に、ジャンヌは矢で出来た傷を見て、顔を顰めた。傷口が、少し黒ずんで来ている。しかもグランデーション状に黒ずむと言うのは、あれしかない。

「これは、鎖蛇の毒・・・・。このままだと、彼は死んでしまうかも知れない・・・・・」

鎖蛇（くさりへび）の毒は、体内に毒が残らないと言う事で知られ、昔は毒殺で使われていたが、その鎖蛇自体が、乱獲されつくされて、今では滅多に見ぬ蛇となったのである。それゆえ、その鎖蛇に噛まれた場合、解毒薬が無いのである。ただ噛まれた者は、５時間から８時間の間、噛まれた傷が段々と黒ずんで行けば行く程、毒が体に回って行くのだ。ひたすら死への恐怖を感じながら死んで行くのだ。

ポツリと気弱な事を言ってしまったジャンヌは、頭を振った。
毒の副作用で脂汗が滲んで、多少脱水症状を起こしているようだった。ジャンヌは、若者の口元に羊の革袋を持って行ったが、若者の意識は朦朧としていて飲めないようだ。
ジャンヌは、水を一口含むと若者の口に口移しで飲ませた。

傷を見てみれば、この若者が襲われてから半時も経っていない。すぐに、毒を足と肩の傷から毒を吸い出すと、毒と一緒に吐いた。それを何度もやって、ジャンヌは持っていた消毒用の塗り薬を傷口に塗り込んだ。
ジャンヌ自身、母親のジャックリーンや乳母のマギー達から魔術

を教えてもらった事があった。
その魔術は、薬草を使った薬を作る術だった。
ジャンヌが作る薬は、とても良質で傷が早く癒えると褒めてもらった。
自分の領地に住んでいる人達が困った時に安くで分ける様にと父であるベンジャミンから言われていたのだった。

「良いか。ジャンヌよ、人と言うのは、タダと言う言葉に弱いが、タダと言うのは本当は高い買物をする事になるのだ。だから、例えお前の良心が傷むと思っても、人がその薬を売ってくれと言った場合はその人の負担にならない額で売りなさい。それが、彼らの為になるのだ」

ジャンヌは、父の言葉に従って領地に住んでいる人達に薬を売る時は、彼らに負担がかからない額で売る事にした。お金がない物には、その者だけが知っている珍しい話を聞かせてもらったりしていたのだ。
ジャンヌは、いつもの様に腰に着けていた羊の革袋を取り出すと、大きな石の上に動物達に取って来てもらった薬草を散らして置いた。その上から羊の革袋に入った水を一滴垂らすと「シェスラードの天使の名に置いて・・」そういつもの呪文を唱えると塗り薬と飲み薬が出来上がった。
ジャンヌは、若者の側に行くと、傷口に塗り薬を塗り込み、そして口移しで薬を飲ませた。
今まで、鎖蛇の毒を解毒させるのに必死だったジャンヌは、改めて目の前の若者の顔をじっと見つめた。月のような白銀の流れる長い髪、今は固く閉じられている瞼は、どんな瞳の色を隠しているのかしら・・・。白磁の様なきめ細やかな白い肌。

「一体・・・この人は、何者なのかしら・・・？」

若者が目を覚ます前にジャンヌは、そっと若者から離れると森の入り口へと戻って行った。若者は少しだけ意識を回復させていた。ジャンヌが自分を介抱してくれているのを知り、それをじっと見ていた。男は、おや?と目を凝らすとジャンヌの体から、溢れんばかりの蒼い石の光が出ていた。揺れる金の巻き髪は、まるで絵画に描かれていた天使の絵のようだ。こちらを振り向いたジャンヌの瞳を見た若者は、薄れいく意識の中でその瞳の色を忘れまいしていた。

「あれは蒼の石の光・・・そんな石を持つ者がこの国に居たのか・・・揺れる金の巻き髪に、銀の双眸・・・」

ジャンヌが彼を介抱している時に、茂みの向こうから誰かがこちらへやって来る音が聞こえて来た。傷を治していたジャンヌの周りに黒い影が下りて来た。ふとジャンヌが上を見るとまるで入道雲かと思うような男が、自分の目の前に居た。その人はジャンヌに一度剣を向けていたが、ジャンヌが逃げる事もせずに、ただ目の前の怪我人の手当をしている。

「お前は、何者だ?」

「ただの薬師です。名乗る程の者ではない。これで良しと」

「毒?若様が毒を盛られたのか?」

「矢ですよ。鎖蛇の毒でしたが、そうそう手に入る代物ではありませんからね。そうね、東の果てにあるクーダンと言う所でしたら、まだクサリヘビの生息は確認されていますが。・・・・・では、失礼します。家の者が心配しておりますので。」

「名を教えては貰えないだろうか？」

「名乗る程の者では、ございませんから。特別にこちらの薬を差し上げましょう。この人にこの粉薬を一日3回飲ませてあげて下さい。それを6日続ければ、体の中に入っていた毒は、全て体外に出されますから、もう心配はないでしょう。では失礼します」

粉薬を手際良く瓶に入れたジャンヌは、小さじも瓶に入れると男に渡した。見た所、2人とも良い所の出身なのだろう。着ている布地もこの辺ではあまり見かけない物だ。

ジャンヌは、さっさと王家の森から出ると、男爵家の領地へと戻った。まさかこの出来事が後のジャンヌの運命を変えてしまう事になるとは思いもしなかった。

ジャンヌはまだ社交界デビューをした事は無い。

貧乏男爵家に取って社交界デビューと言うのは、金がかかる物以外何も無い。

それよりも、いかに自分の領地を豊かに平和に治める事が出来るのかが、一番大事だと父様がいつもジャンヌに教えてくれていた。

大ジージも、心の中で大きく頷いた。

（この父親、そして母親は若いのに、よく物事の道理を分かっておる。関心じゃわい）

しかし、今年は何故かジャンヌ達までもが、この社交界に呼ばれているのだった。

変な胸騒ぎがしてならないジャンヌ達。

王家の馬車がトスポートル男爵家に迎えに着いた。

ジャンヌは、ぎこちない笑みを浮かべながらもそっと馬車に乗り込んだ。

これから、一体どんな事が待っているのだろうか・・・。一部の期待と半分以上の後悔を噛み締めながら馬車の窓から見える領地を

眺めていた。

サシュルートの王都へ（改）

何もかも初めてだらけの馬車の中で、カタカタと体が心地よく揺らされる。
その振動は、眠りを誘う程に心地よい。
父様と母様は、サシュルート王家の使いの方から、今回の王への謁見の招待状の事と、本来ならば娘が１３才の時に成人の儀をする事が普通なのだが、どうして娘を早く社交の場に出さなかったのかを聞いていた。
実際、社交界と言うのは、色々と場を踏んで行かなければならないもの。
挨拶の仕方も、立ち振る舞い、ダンスや作法など、色々と学ばなければならないのだ。トスポートル男爵家では、そのような礼儀作法の練習などと言う物は、あまりしていない。
週に二度、王都で開かれる茶会には、男爵夫人のジャックリーンが出ていた。
年に４度、王侯貴族達は互いの領地の事を王であるレゼンドに報告に行かなければならない。
それは、年初め、春の芽生え、夏の実り、秋の収穫の時期である。たまたま今年の年初めの宴の席で、ベンジャミンの幼馴染みであるバトラー伯爵が、ジャンヌの事を王の前で話してしまった事から、今回の輿入れが秘密裏に決まってしまったのだ。

思い出しても、忌々しい。ベンジャミンは、ギリリと下唇を噛み締めた。
本来ならば、この世界の子供は、１３才になると成人の儀を執り行う事になっている。それは、王家との繋がりを示しているのだが、ベンジャミンは敢えてそれをして来なかった。ベンジャミンは、ジャンヌを自分の領地内で彼女が恋し焦れた相手と相思相愛で結ばれ

れば良いとそう考えていたからだった。
それに・・・ベンジャミンは自分の領地に居る長老から予言を貰っていた。

「お嬢様は、蒼い石の光を持つお方です。お嬢様は太陽と氷の戦いの中に、既に巻き込まれます。お気をつけ下され。男爵様」

あの年初めの宴の席で　彼奴（バトラー）さえジャンヌの事を言わなければこのような事にはならなかったのに・・・。

　バトラー　「そう言えば、ベンジャミン。君はどうして自分の娘の成人の儀を執り行わないんだい？もうジャンヌは１５才だろ？聞けば、奥方のジャックリーンと同じ金髪に珍しい瞳の色を持っていると聞いたが、一度見てみたいものだな。あはははは。ジャンヌどのの成人の儀式の後ろ盾は、ぜひ私がなりたいものですな。ハハハハ～」

バトラーの声が広い宴の間に響いた。
ベンジャミンは、心の中で舌打をした。
それを聞いた玉座に居た王と王子達は、不思議そうな顔をしている。
普通貴族達は、自分の子供がまだ１３にもなっていないのに、１３だと偽ってまで成人の儀を執り行い、あわよくば王の目に自分の子供が見初められればと企んでいる位だったからだ。たまに子供が居ないのに、孤児を街から拾って来て自分の子だと偽り、王の寵愛を受けられる姫として王宮に送り込む為に成人の儀を受けさせる悪徳な貴族達も居る。

「ほう。珍しい瞳の色とは・・・見てみたいものだ。　そう言えば、ディートリッヒが森で何者かに襲われた時に天使かと思う程、美しい少女に介抱されたと聞いておる。確か、トスポートル男爵の所で

は、医術が優れているとか聞いているが・・。それも、男爵の娘が作っている薬なのかな・・？」

「は、娘はおりますが、まだ社交界のような華やかな場所には、不慣れな者でして・・・・。医術と言うよりも薬師として今は勉学に励んでいる身であります」

「ふむ・・そうか、男爵は、いつも謙遜ばかりで欲が無いと見える。では王である儂が後ろ盾になって、男爵の娘の成人の儀を執り行う。期限は夏の実りの宴以降とする。それまでの間、この王都にある我が王家の別邸に男爵一家を住まわせ、礼儀作法なり何なりの家庭教師を着けてやろう」

ベンジャミンはただ謙遜ではなく、本気で言っていたのだ。

「人として、見られる立場と言うのは、たまに自分が何者なのかを忘れてしまう事がある。それは幼き頃から崇められ、甘やかされて育つと我が侭と欲望に満ちた心に支配されやすい。ジャンヌ、今はただ他の子供達と一緒に遊び、学びそして民から信頼と言う宝を得る様になりなさい」

父様が言うには、形だけの作法など何も役に立たない。大ジージは、心の中でこのベンジャミンの子として産まれて来て本当に良かったと心からそう思った。

使いの者が言うには、今の侭では王謁見の間に招待しても、何も作法も知らないでは、男爵家の恥となるだろうと言う事で、パーティが催される半年前から王宮でジャンヌに徹底的に礼儀作法、ダンス、乗馬、帝王学、魔術、その他を身につけさせると言う事となったのだ。

「はぁ～」

何度目だろうか。ジャンヌの口から溜息が出て来るのは。もう既に、男爵家の領地を過ぎて来た。男爵家の領地内では、街の者達に「お嬢様しっかりお勉強して来て下さいよ。」などと声をかけられ、思わずジャンヌも「うん！」と大声を出して答えてしまった。

「そう言う時は、はい。と言うのだジャンヌ。例え領地内の民でも自分よりも年上の者に対しては、失礼が無いように接するように」

父様から諭されるとジャンヌは、領地内の長老に抱きつくと「長老様。では、行って参ります。素敵な淑女になれるように、ガンバリマス！」と元気よく言って別れたのだった。

馬車に揺られる事半日以上。そろそろお尻の感覚が無くなって来た。

窓から外の景色を見ても、王家の領地に入ってからずっと同じ田園風景が続いている。

ジャンヌは、退屈になり父様の膝枕で眠ってしまっていた。

いきなり、馬車が止まり、ジャンヌは父様から揺すり起こされると仕方無く歩いて城の中へと入って行った。

王の使いの者が、「今夜はもう遅いので、明日の朝になりましたら、迎えに行きますので正装をして下さい」そう言うと去って行った。

ジャンヌは、大きく手足を伸ばして欠伸をした。案内された別邸は、王宮から橋一本を渡って行けばすぐに行ける距離である。この別邸から見える景色はなかなかの物だった。

赤や緑、白、黄色などの色彩豊かな明かりが、この王家の領地内にある王都から見える。

家々で灯される魔石の明かりなのだ。それは、まるで今で言う、夜景なのだろう。

ジャンヌは、その王都に灯る夜景がとても気に入っていた。

「まるで、宝石箱をひっくり返したみたいに綺麗！」

素直なジャンヌの感想に、父様は笑顔でジャンヌに寄り添うと頭を撫でてた。

父様の彫りの深い顔を見て、ジャンヌはつい思った事を口に出してしまった。

「私。父様と母様の子供に産まれて来て、本当に幸せです」

父様は、金髪のジャンヌの髪をそっと撫でると目頭を押さえていた。いくら何も知らないジャンヌでも王宮に行くと言う事が、どのようなことになるのか分かっていた。

もしかすると、大好きな父様や母様の元を離れて、王宮（ここ）に住む事になるのかも知れない・・・。

今、この世界の王であるレゼンドには、２人の王子が居る。

だが、一番上は第一王子で年は２２才。金髪碧眼で見目麗しいと言う噂が立っている。人々から彼は太陽の君と呼ばれている。

ディートリッヒ第二王子で、年は同じく２２才。白銀で蒼い双眸の冷酷の君と呼ばれている。

つい最近、ディートリッヒ王子が何者かに襲われたと言うので、調べている最中だと父様から聞いた。

ジャンヌは、何故２人っきりの兄弟なのに・・・と悲しくなって来た。

そんなジャンヌの心を知ってか、父様は笑ってジャンヌの白い柔らかい手を重ねると少し寂しい表情をしている。

「私は、お前のそんな優しい所が何よりも好きだ。王子達もお前の様に万人を愛する気持ちを持って下さればどれだけ、この国は平和

になるのにな・・・・・」

ベンジャミンは、最後の方をワザと口には出さなかったのだが、心の中で葛藤をしていた。

（一体、王様はジャンヌに何を求められているのだろうか・・・。この白く汚れ無き我が娘をまさか王子の結婚相手などに選ばれる事はあるまい・・・。既に王子達には婚約者候補と言われている公爵家の二女アリシア様とスティン伯爵家から三女のロゼッタ様やツマック侯爵家からは、二女のビルマ様と言う3人の候補者達が居られるのだから、わざわざ私の娘ジャンヌを招かなくても良いのに・・・。）

全ては、明日の王への挨拶の時に知らされるのだろう。

これから、この別邸で最低一ヶ月、最高で半年以上ここで暮らす事になるのだから・・・。

ベンジャミンは、自慢の前髪を少し掻きあげると額に皺を寄せた。

そんな父親であるベンジャミンの心配を他所に、娘のジャンヌはこのサシュルートの王都の夜景に甚く感動していた。「宝石箱をひっくり返したみたいに綺麗だわ」と言って満面の笑顔を自分に向けて来る。

ジャンヌは、銀の瞳をキラキラと輝かせながら嬉しそうに外を見ていた。

サシュルートの王都へ（改）（後書き）

少し内容を変えました。国名が無かったので付け加えました。

王都　第一日目　？

緑豊かな領地に囲まれていた男爵家とは違って、ここ王都は朝からとても活気が出ていて賑やかである。
ただ、空が今にも泣き出しそうなくらいに、暗雲が立ちこめている。
　街の中は、石畳で出来ており、水はけも良い様に舗装されている。
日干しレンガで作られている家は一つもなく、此処は石造りの家が殆どだ。
ジャンヌは、二階の窓際にちょこんと座るとブラシで自分の長い金髪を梳かしていた。　そしていつもの様に空に向って歌を歌い出した。

我は風に問う、何故　お前を縛る事は出来ぬ
我は雲に問う、何故　お前は光を拒む
風は、雲を押して我が光を街に照らさせておくれ

先ほどまで暗雲が立ちこめていた雲も、ジャンヌが歌い出すと、たちまち消えてなくなり後には清々しい青空と眩しい太陽が王都を照らし始めた。
そんなジャンヌを父ベンジャミンは、複雑な表情で見ていた。
確かに、我が娘ジャンヌは魔力に秀でた所がある。歌を歌えば、雨も呼ぶ鳥も呼ぶ、風さえも娘の言いなりになってしまう。
ジャンヌが幼い頃、森で迷子になってしまった時。ベンジャミン達は広く鬱蒼と木々が生い茂る森の中、幼いジャンヌを探していた。
暗い森の中で一人で、寂しく泣いているだろうと心配していたベンジャミン達は、森の動物達に囲まれて楽しく笑っているジャンヌを見て驚いたのだった。
ジャンヌは、動物達が食べ物が森に無いのと訴えれば、両手を天に翳し、胸の前で祈る様に手を合わせると地面に手をついた。

その途端に、森中の木々達は一斉に真っ赤な果実を実らせたのだった。

「あのジャンヌの力を他の貴族達に知られでもしたら、ジャンヌはたちまち女神だと祭り上げられ、それこそ自由が無くなる」

蒼い小鳥が三羽飛んで来ると、ジャンヌの肩に止まった。
小鳥達は、可愛らしい小さな嘴でジャンヌと話をしている。ジャンヌは楽しそうに「そうなの。パン屋さんの奥さんに可愛い赤ちゃんが産まれたのね」と相づちを打っている。

赤い小鳥が別邸の周りをすぃーっと飛び回るとジャンヌの手の甲にチョコンと止まった。

（誰か、人が来るよ。ジャンヌ。）

「あら、もしかしてもう王様と会うお時間なのかしら?」

（ううん。違うよ。もっと若い人。ほら、あの茂みの影からこっちを見てるよ。）

ジャンヌは、小鳥達に言われた方向を見るとにっこりと微笑んだ。
茂みが大きく動くと銀髪の若者が倒れていた。ジャンヌは、驚いて階下に駆け下りると別邸の外へ出た。
手には、膏薬や湿布を入れた袋をしっかりと持って。周りを見渡すと先ほど茂みの影に隠れていた人がまだ伸びていた。ジャンヌは、その若者に近づくと目を丸くした。

「まあ、この方はこの間、クサリヘビの毒で半分死にかけていた人だわ」

怪我していないかと色々調べてみたが、ただの気絶しているだけのようだった。目に隈も出来ているようだから、恐らく何日も十分な睡眠が取れていないのだろう。ジャンヌは、手を合わせ何かを念じると芝生の上に両手を着いた。
側に生えていた木が一気に生い茂ると立派な樹木にまで成長した。
ジャンヌは、突如出来た木陰を見て、その若者の頭を自分の膝の上に乗せた。
流れるような長い銀髪を指で撫でながら、時がゆっくりと過ぎるのを待った。

先ほどまでは無かった大きな樹木が別邸の側に生い茂っている。まだ新年が明けて間もない冬の季節だと言うのに、何故　新緑が生い茂っているのだろう・・・。時々自分の顔を照らす日の光を受け、眩しそうに薄めを開けたディートリッヒの真上に見たものは、太陽の光を全て自分に纏ったような光り輝く金の髪に白い肌を持った少女だった。少女は本を読んでいて、たまに視線が上に上がったりする。その大きな瞳には、この世界では希有と言われている銀の双眸。あの時の天使・・・・

「ジャンヌ様〜。ジャンヌ様〜」

別邸の中から侍女の声が聞こえて来た。ジャンヌは、「ふふふ　」と笑うと掌を差し出すと上から果実がゆっくりと下りて来た。その果実にそっと息を吹き込むと果実は、フワフワと蝶の様に舞いながら侍女の方へ飛んで行った。
侍女は、フワフワと浮遊して来た果実を見ると、溜息をついた。

「ジャンヌ様〜。後二時間後には、謁見の間に行く事になっていますからね〜。後半刻で帰って来て下さいよ〜」

ジャンヌが居なくなるといつもこの侍女は、ヒヤヒヤさせられる。その度に自分は近くに居るから心配するなと言う意味で、いつも果実を魔法で浮遊させて自分の居場所をそれなりに教えているのだ。侍女も毎度の事だから慣れては居るのだが、まさかこの王都でも、男爵家でやっていた事と同じ事をされるとは思っても見なかったからだ。

ジャンヌと言うのか・・・確かに不思議な色の瞳をしている。それに、蒼い石の力で髪まで蒼く見える。

ふと目を覚ましていたオレと目が合ったジャンヌは、「良かった。目覚められたのですね。」そう言うと優しく微笑んだ。

「もう、あの時の傷は良いのですか?」

「あ、ああ。あの時は、助かった。あり・・・」

ディートリッヒが礼を言いかけた時、別邸から声がした。

「ジャンヌ様〜。そろそろ半刻ですよ〜」

「ごめんなさい。もう行かないと。マーサに怒られちゃうわ。樹木も私が離れたら元通りに戻っちゃうけど、ごめんなさいね。また会いましょう」

オレが起き上がるとジャンヌは、一気に自分だけ捲し立てる様に話すと、溢れんばかりの笑顔をオレに向けて別邸へと、駆けて行った。

オレは、徐々に木陰が小さくなるのを感じるとさっきまで大空を覆い尽くすかのように大きかった樹木が小さな若木に戻っていた。

ジャンヌか・・・面白い娘だ。

ディートリッヒは、芝生の上で大きく伸びをすると腰まである長い銀の髪を手で梳かし、ゆっくりと立ち上がると橋を渡って城へと入って行った。

その頃、ジャンヌはマーサに叱られながら質問攻めに合っていた。

「ジャンヌ様！もうああいう事は慎んで下さい！長老様とお約束なさったんでしょ？　淑女になりますって。朝っぱらから別邸を抜け出す淑女など、この広い世界を探しまわってもジャンヌ様しかいませんよ。全くもう！」

ジャンヌは、湯浴みの最中からずっとマーサのお小言を聞いていた。いつもの事ながら、今朝の自分の行動でどれだけマーサに心配をかけたのかは、よく分かっている。だけど、確かめたかった。　あの時の怪我人が本当に無事なのかどうなのかを・・・。

腰までの長い金の髪も綺麗に現れ、体にはジャンヌが好きなラベンダーの香りを取入れた香油をたっぷり刷り込まれた。

元から細いジャンヌはコルセットも布のコルセットを着けらると、あまりのキツさに溜息を吐いた。

「ジャンヌ様。もう少しキチンと食べて頂かなくては、育つものも育ちませんよ。それに、このような場所であの力を使われるなんて、何て無防備な・・！」

マーサは、子供の頃からずっと世話をしてもらっているからか、ジャンヌに対してズケズケと言って来るのは、いつもの事だからジャンヌもマーサの前では、蒼の石の力を使っている。

ジャンヌは藤色のドレスを着せてもらうと嬉しそうに微笑んだ。

そこへ父親のベンジャミンがドアをノックすると中へ入って来た。

「ジャンヌ。支度は出来たのかい？そろそろ謁見の間へ行く時間だ

よ」

今までのお転婆娘だったジャンヌが、まるで貴婦人の様に着飾り其処に立っていたのを見て、ベンジャミンは「年を取ると涙もろくなるな・・」と言って目尻を下げながら潤んだ瞳でジャンヌを見ていた。

王宮からの迎えの使者がやって来た。

王達との謁見は午後からなのだが、ジャンヌの為に使者は時間を取って謁見前の事前のリハーサルを何度も練習する事になったのだ。

お辞儀の角度、長いドレスの裾さばき、歩き方や立ち振る舞い、そして受け答え方まで、ジャンヌは顔の筋肉が引き攣る思いで、短時間の集中特訓を受けていた。

漸く合格点が貰えて、休憩に入った。椅子にどかっと座ったジャンヌを見て、使者が「例え休憩時間でも、レッスンはレッスンですよ。さあ、もう一度座り直して下さい」

手厳しさは、まるでマーサのようだ。

軽い昼食の時もジャンヌは、食べ物を食べようとしてもマナーの事ばかり気にしてしまい、フォークを落としてしまう。疲れた・・・。

そう思いながらも早く自分の家へ帰りたいと思い始めた。

少しの事でしょげている娘を見て、ベンジャミンはワザとジャンヌの負けん気根性をあおるような事を言い始めた。

「このような事で拗ねて、まさかスゴスゴと家へと帰るつもりじゃないかい？」

それを聞いたジャンヌは、キッと父のベンジャミンの顔を見るといつもの負けん気を闘志に変えて鼻息荒く言い返して来た。

「父様。私は長老に約束したんです。素敵な淑女と成れる様に頑張

ると・・・。だから、負けませんし、投げ出しません！」

ジャンヌがそう言い返して来ると、ベンジャミンは、クルリと背を向けるとクスッと笑った。

例えどんなに外見が変わろうとも、ジャンヌはジャンヌのままなのだ。

少し遠い目をしながら、礼儀作法を学んでいるジャンヌをベンジャミンは、温かい眼で見守る事にした。

遂に王との謁見の時間となった。　使者は、ジャンヌににっこりと微笑むとジャンヌの手を取った。

「良いですか、ジャンヌ様。私が教えた通りにやって下さい。朝からとはいえ、ジャンヌ様は根を上げる事無くキチンとされていますよ。これからがとても楽しみです」

ジャンヌは、ドレスの裾を軽く持ち上げると会釈をした。それを見た使者は満足そうに、何度も何度もベンジャミンに向って頷いていた。

先触れの使者が謁見の間に入って来ると、「もう、間もなく王様達が参られます」

その声にジャンヌは、王族だけが通れる豪華な彫刻が施されてあるドアを見ると、覚悟を決めた様にお辞儀をしたまま彼らが来るのを待った。

王都　第一日目　？

先触れの者が謁見の間に入って来ると王達の入室を告げるとお付きの者達に寄って、王族だけが通れる豪華な彫刻が施されてあるドアが重たい音を立てながら、ゆっくりと開く。
ジャンヌ達は、玉座が並ぶ前でお辞儀をして、王達がそれぞれの玉座に座るのを待っていた。
衣擦れの心地よい音が謁見の間に、響くと低いテノール音の声がこの部屋の空気を揺らした。

「久しいな。トスポートル男爵」

ベンジャミンは、今回の謁見とそして愛娘ジャンヌの成人の儀の後ろ盾となった王に感謝の言葉を伝えた。父が王様と言葉を交わしている間、男爵夫人であるジャックリーンと娘のジャンヌは顔を下げたままで居た。

「お久しぶりですわね、ジャックリーン。明日の茶会を楽しみにしてますよ」

王妃から言葉を掛けられ顔を上げたジャックリーンは、王妃の隣に座してる2人の王子達を見た。
まあ、本当に噂通りの太陽の君と氷の君ですわ。　噂に違わぬ見事な金髪碧眼。彼が太陽の君と呼ばれるのは、この世界の太陽神アクゥールの壁画から来ている。
太陽神アクゥールは、一見女人かと見間違うほどに、美しい。細い柳眉、彫りが深く鼻筋が通った所など、まるで彫刻の世界から飛び出して来たかのようだ。
加えて金髪碧眼。あの碧眼で見つめられれば、獰猛な獅子でも大人

しい子猫の様に懐いてしまうと言う伝説がある。
名前は、アウグスト。第一王子だが、体が弱いと聞いている。日中はさながら本の虫と言う事を他の貴婦人達から茶会で聞いた事があったわ・・・。

「お招きいただいて、恐縮でございます。私も明日のお茶会をとても楽しみにしております」

ジャックリーンは、アウグストの隣に座っている氷の君を見ると、とても驚いた。
まるで月光をその髪に宿したかのような見事な銀髪に、ジャックリーンも息を飲んだ。こ、この髪の色って、まさかマーサが言っていた別邸の庭でジャンヌと一緒に居た若者では・・・？
氷の君と呼ばれる第二王子ディートリッヒ。
自由奔放なお人で、帝王学に秀でていて、この国の将来を背負って立つに相応しいと言われている方だと耳にしている。確か・・・・・一月前にに第二王子の事を良く思わない何者かに王家の森で命を狙われたとか・・・。
そう言えば、ベンジャミンも確か同じような事を言っていたわね・・・その時に、どうやらジャンヌが助けたのではと・・・。ジャンヌも丁度　一月前に王家の森で鎖蛇の毒で行き倒れになった人を介抱したのだと言っていたけど、まさか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。ジャックリーンは、自分の隣で俯いたままのジャンヌを見ていた。
この子は、長老様の予言通りに太陽と氷の争いに既に巻き込まれてしまっていたなんて・・・。ジャンヌはまだ、輿入れの事さえも知らない。
この成人の儀は、王侯貴族達に取ってみれば、未来の自分の花嫁または、側室を選ぶ基準になっている。しかも、今回ジャンヌの場合は、王自らがジャンヌの後ろ盾として成人の儀を執り行うと言って

いる。それは即ち、ほぼ王家への腰入りが決まったと言う事なのだ。

王は、男爵に自分の娘を紹介する様に言うと、男爵は震える声でジャンヌを彼らに紹介した。

「これは、私の一人娘でジョセフィーヌ　シュスラード　フォング　ミハエル　トスポートルでございます。ジャンヌ挨拶なさい」

父親に自分のフルネームを言われて、上がってしまったジャンヌはカチカチに固まっていた。

その時に、ジャンヌは自分の胸に手を置くと深呼吸をして体の緊張を和らげると、ゆっくり顔を上げて来た。窓から赤い小鳥や青い小鳥達が入って来るとジャンヌの周りを飛び回り、ジャンヌの肩に止まった。

「はい。父上。ジョセフィーヌ　シュスラード　フォング　ミハエル　トスポートルです。ジャンヌとお呼び下さい」

顔を上げたジャンヌはそう言うとドレスの両端を持って軽く礼をした。使者の方に習った通りのお辞儀をやってみると玉座に座っている方達４人とも目を丸くして自分の顔を見ている。

王は、ジャンヌの銀の双眸を見て驚いていた。

「ほう・・・成る程。バトラー伯爵がトスポートル男爵の娘は珍しい瞳を持っていると言っていたが、真だな。本当に素晴らしい銀の瞳をしておる。ディートリッヒ、この娘に間違いは無いのか？」

王はディートリッヒにそう聞くとディートリッヒは、立ち上がってジャンヌの前に跪くと彼女の手を取り、立ち上がらせて父王の前へと連れて来た。

「ええ。彼女です。間違えありません。あの王家の森で私の命を救ってくれたのは、天使と見紛う程に輝く金の髪に銀の双眸、彼女の声は天使の歌声の様に私の心を一瞬で鷲掴みにしてしまいました」

ジャンヌは、自分の手を取って隣に立っている人が、あの時自分が助けた若者。

そして今朝偶然にも別邸の庭で会った若者が、この国の第二王子だと言う事を知り、銀の双眸をもっと大きく見開いていた。

ディートリッヒ王子の話を聞いていたレゼンド王は、楽しそうに頷くと太陽の君と呼ばれるもう一人の王子の顔をちらりと見ていた。

アウグストは、面白そうに2人を見ると自分の玉座から下りて、ジャンヌの前に来た。ジャンヌは、驚いた顔で、アウグストを凝視していたが、彼の碧の双眸があまりにも寂しそうに光っていたのでつい言ってしまった。

「どうして、あなたは　そのような寂しい瞳をされていらっしゃるのですか？」

太陽の君と呼ばれるアウグストは、王宮の者達に愛されていると言われているのに、どうしてこのジャンヌと言う娘は、自分の廃墟な心を知っているのだ・・・・。

いきなりそんな事をジャンヌに言われたアウグストは、眉を顰めたがすぐに微笑んだ。

「何故、そう思うのだ？」

「あなたの瞳の奥で、小さな男の子が泣いているからです」

ジャンヌの言葉にピクリと肩を震わせたアウグストは、笑顔でジャ

ンヌを見ていたが目は笑っていなかった。・・・・この娘、何を知っている・・・。どうして私の心をかき乱すような事ばかり言って来るんだ・・・。

アウグストは、目の前のジャンヌに何もかもを見透かされている様に思えて仕方無かった。

第一王子とは名ばかりで、自分は幼い頃から体が弱く、何かと双児の弟ディートリッヒと比べられて来た。体の方も漸く健康体となり弟のディートリッヒに追いつけ追い越せと言わんばかりに、剣術、帝王学、経済学、宗教、算術、馬術など必死に習って来た。

そのおかげか、小さい頃は自分に見向きもしなかった臣下や貴族達が、たちまち猫なで声を上げるかの如く、自分の前に懐いて来た時には、空笑いしか出なかった。

コイツらが欲しいのは、自分が王を継いだ時に、少しでも甘い汁を据える様にする為の物なのだと。今までは空気のような扱いだったのが、こうも違う様に変わるとは、笑わせてくれる・・・・。

それ以来、アウグスト王子は、自分の心に仮面を付けてしまった。例え表面では笑っていても心では相手の事を疑り、腹の探り合いしか出来なくなってしまったのだ。

「そんな事を言われたのは、あなたが初めてですよ。ジャンヌ。父上お願いがあります。ジャンヌを私の離宮に住ませたいのです」

それを聞いたディートリッヒは、慌てた様に父王に進言した。

「父上、それはダメです。ジャンヌは私の命の恩人でもあります。彼女はぜひとも私の離宮に」

レゼンド王は、面白そうに太い眉をピクリと片方だけ器用に上げると、顎髭を左手で包む様に触っていた。今まで誰にも興味を示す事

が無かったアウグストが、今日初めて見るジャンヌにこれだけ執拗に興味を示すとは、面白い。　かと言って、ディートリッヒの言う通り、ジャンヌはディートリッヒの命の恩人でもある。　ふむ・・・。

ヒゲを撫で考えていたレゼンド王は、ジャンヌに問う事にした。

「ジャンヌよ。もし、お主が伴侶を選べるとしたらどちらが良いか？」

レゼンド王の言葉に、隣に居た王妃は、溜息をついた。この王に任せて喋らせたのが、不味かったのだと。王にいきなりそんな事を言われたら、普通の娘なら固まってしまうのに何を根拠にそんな事を言い出すのか・・・。

お家騒動でも起こしたいのか！と今にも怒り心頭な勢いで無神経な夫であるレゼンド王を睨むと、拳を作ってワナワナと肩を震わせていた。

しかしジャンヌは、にっこり笑うと2人の王子の顔を見ていた。

「そうですね・・・。今直ぐには出来ません。お家騒動にも発展しかねませんから。それに私はお二人の事をあまり存じておりません。ですから、ゆっくり時間をかけてお付き合いして行こうと思います。初めは、お二人のお友達になりたいですわ。幸いこの国の婚期は、女性が18～19なのでそれまで、この答えは持ち越しとなりますが、宜しいでしょうか」

ジャンヌの言葉にレゼンド王は、にこやかに微笑むと何度も頷いていた。

王妃は、ジャンヌの考えに関心を示していたが、彼女は自分から進んでイバラの道を選んだと言う事には代わりは無いのに・・・・・

と心の中でジャンヌに深く同情をしていた。
ベンジャミンは、横でハラハラした表情でジャンヌを見ていた。
（よ、予言が当たってしまった・・・・・。これでお家騒動間違え無し。どっちを選んでも確実に第一王子派と第二王子派に別れてしまう。よりに寄って、お二人の父親であるレゼンド王がそんな事を１５才にしかなっていない、男爵家の娘に聞く事なのだろうか・・・・。これでこの国は終わりかも知れん・・・・。）
父ベンジャミンは、心の中で大きく溜息をつきました。

ジャンヌは、そんな事よりも今後の成人の儀を行う為の礼儀作法のレッスンの事を考えていた。成人の儀は、王から新しくその家の紋章が着いた首飾りを承るのだが、問題はその後なのだ。後半は、ダンスを踊る事になっているのだが、ジャンヌはダンスをキチンと最後まで踊った事が無く、習う前から苦手意識が着いてしまったのだ。
（何度か、父ベンジャミンに習ったのだが、一曲終わるまでに、ベンジャミンの足は、何度もジャンヌに踏まれてしまい、途中棄権したのだ。）
しかも、ダンスは４曲連続で踊る事になっている。今回自分の成人の儀の後ろ盾となってくれた王と一曲、父と一曲それから、王子達と一曲ずつの計４曲。
その事を思うとジャンヌは、心の中で深いため息を付いた。

謁見の間から王達が去って行った後、ジャンヌは大きく背伸びをすると父ベンジャミンの後を追って別邸に帰って行った。
ジャンヌは、少し不思議に思っていたのだ。あの2人の王子達は、髪の色や瞳の色、それに身に纏うオーラが違うからそっくりとは言えないが、とても良く似ている。何故・・？
ジャンヌが首を傾げて考えていると、ベンジャミンが聞いて来た。

「どうしたのだ？私の可愛いお姫様は？　ああーそうか、使者の方に礼儀作法を相当扱かれていたから、疲れてしまったのか？ジャンヌ」

ジャンヌは、チラリと父の顔を見てプウッと頬を膨らませた。
そんな可愛い子供じみた事をするジャンヌをベンジャミンは、とても可愛がっていた。
怒ってそっぽを向いたジャンヌは、少し淋しそうに俯いていた。

「ーねぇ。父様、あの2人の王子様達は、どうして同じ年なのかしら？　とても良く似てらっしゃるんですね。ただ髪の色と瞳の色が違うだけで、顔は瓜二つだもの」

「それは、王子様達が双児だからだよ」

「双児ですか…」

そこへ母様がジャンヌに教えてくれたのだった。

「第一王子の名前は、アウグスト様。金髪碧眼。第二王子の名前は、

ディートリッヒ様。腰までの長い銀髪は、それは月の光を一糸に集められたようでしょ。彼の瞳はまるで暗い湖の底の様に蒼い双眸。淑女達の間では「太陽の君」と「氷の君とかまたは冷酷の君」と呼ばれているのよ。アウグスト様は、ダンスの名手なのよ。それに乗馬に、でも普段は王宮の図書館で本を読んでいらっしゃるのよ。学問の才もあるお方なのよ。　ディートリッヒ様は、剣の達人なの。あの方は王立魔法学校でも優秀な成績を収められている方でね、魔術師の資格も持っていらっしゃるのよ」

ま～よく知っていらっしゃる事。ジャンヌは呆れた様に母親のジャックリーンの情報網には、脱帽していた。
まるで昼と夜の様に対照的な2人の王子様達だったけれど、氷の君と呼ばれているディートリッヒ様は、とても気さくなお方に見えたのだけれど…。
太陽の君と呼ばれているアウグスト様は、本当に寂しそうだったわ。自分を必要とされていないみたいに…。

一人っ子のジャンヌには、到底理解知り得ない事なのだろう。
ジャンヌは、自分の横を歩いていた父の顔を見る。ジャンヌは笑顔で「ちょっと別邸の庭を散歩してきます。」そう告げると、ベンジャミン達の返事を聞く前に、走りさってしまった。
森の奥に入っても、其処からはお城や別邸が見えていた。
ジャンヌは大きく欠伸をすると、ゴロンと草の上に寝転がると目を瞑って、「結界」そう一言呟いた。ジャンヌの周りには、綺麗な弧を描いた様に蒼い結界が張り巡らされた。　結界が無事張れたのを確認すると、ジャンヌは　すうすうと寝息を立てて眠ってしまった。
いつもジャンヌは、こうやって結界を張って草の上で寝転がっているのが好きなのだ。でも、そんな所を父様やお城の使者達に見られでもしたら、またお小言を言われかねない・・・・と言う事で誰にも見られないように結界を張れば、結界の外からジャンヌを見る事

は出来ない。ただし、魔力の強い者であれば、ジャンヌの結界を見破れるのだが、そのような高い魔力を持ち合わせている者は、そんなにこの世には居ない。

ジャンヌは、既に熟睡中。長い金髪に草が絡まっても、そのままだ。

丁度その頃、別邸の様子を見に来ていたアウグストは、森の奥で何かが蒼く光っているのを見つけ、急いで光のする方へと走って行った。

すると、蒼い光の中心に昼間、謁見の間で会った女……。確か、名前がジャンヌとか言っていたな。彼女が草の上でごろんと気持ち良さそうに寝ていた。

この光は、結界を張っているのか…。アウグストは、フフッと微笑みながら人差し指で、その蒼い光をチョンと押すとスルッと自分の指が入って行くのが分かった。

自分の指が中に入れると言う事は、体も当然この結界の中に入り込める事になる。

アウグストは、躊躇する事無くジャンヌが張った結界の中へと入って行った。

無邪気な寝顔で草の上に寝転んでいるジャンヌを見て、アウグストは、ジャンヌの髪をそっと撫でていた。

「不思議な娘だ。一目オレを見ただけで、俺の心が分かってしまうとはな…」

アウグストは、ジャンヌの顔にそっと近づいた。朝から昼過ぎまで、ぶっ続けで謁見の儀の練習をさせられていたジャンヌは、泥の様に眠っている。ちょっとやそっとじゃ起きなかった。

そんなジャンヌを見て、アウグストはクスッと笑うと唇を重ねた。

「こんな小娘が、俺の将来を…いやこの国の未来を握っているなん

てな…。」

そう言うと、アウグストはもう一度ジャンヌの濡れた唇に口付けをした。
閉じられていた瞼がピクリと動くと、ゆっくり開いた瞳は、まさしく銀色だった。

「無粋ですわね。眠っているその小娘にこのような真似をなさるなどとは…。心寂しい子供が目新しいおもちゃに執着を持っている様にしか見えませんがね。そのような事をなさるのなら、私が起きている時になされば良い」

眠っているとばかり思っていたジャンヌから、言われた言葉に思わずカァ～ッと顔を赤くしたアウグストはジャンヌの顔を凝視した。
アウグストの孤独な心まで見透かすような銀の双眸でジャンヌは、アウグストを見ていた。

「お望みとあらば…。」

ジャンヌにそっと覆い被さる様に自分の顔を近づけるアウグストは、ジャンヌの唇に自分の唇が触れる寸前で止めてしまった。
（こ、この女・・・・震えるかと思ったら、変に度胸が据わっている。そんな吸い込まれるような銀の瞳で見られたら、嫌な事を思い出してしまう・・・・。）

「アホくさ…。またお前に寂しい子供が強請っている様にしか見えないとでも、言われそうだからな」

「そうですね。全くです」

「お前に遠慮と言う物は、ないのか？」

「ありません。特に、私の事を名前ではなく『お前』と呼ばれる方には」

アウグストは、怪訝な顔をしてジャンヌを見ていた。今まで生きて来て、此処まで自分を真正面から否定したり、意見して来る女は初めて見てなのだ。

こいつは、本当に面白い。アウグストは、いつものような微笑を浮かべるとジャンヌを見つめている。

ジャンヌは、太陽の君と呼ばれているこの王子がどれだけ孤独だったのかを知っている。ジャンヌの意識がアウグストの中に眠る過去の記憶の中に入って行く。

あの太陽の君と呼ばれている人は、子供の頃から周りの臣下達に冷たい仕打ちをされて来たのだ。彼の瞳を見ていると5才くらいの色が青白く痩せ細った子供の姿が見える。

ーああ、これは彼なのだ。

例え、名ばかりの第一王子だと言っても、体が弱ければ誰も自分を守ってくれる者も、側に着いて来てくれる者も居ない。いつも孤独と死への恐怖だけが、彼の心を支配していた。

そんなアウグストをいつも側で見守っていたのは、乳母とそして一匹の黒と銀の虎縞模様の猫だけだった。

今、ジャンヌはその猫の瞳から、この幼い日の王子の事をじっと見て言いた。

王子なのに、体調を管理するためと言う名目で、北の塔に閉じ込められ、与えられる服や食べ物は、粗末な物ばかり。それもこれも自分の体が弱いと言うだけで、使い物にならないと決めつけた臣下達が、徐々に自分を弱らせ、そして暗殺しようとしている事をまだ幼い王子は知ってしまった。

ジャンヌは、この王子のたった一人の友達である猫の意識の中へと入り込んだ。猫は、いつものように王子の足下へすり寄って来ると、そっと王子の手を舐めていた。早く元気になってこの塔から出れる様にと。

猫が王子の手や顔を舐める度に、王子の体調が良くなって来た。それと引き換えに猫は少しずつ衰え始めて来た。

ようやく、王子が外へ出歩ける程まで王子の体が回復した時、北の塔から王子は出される事になった。大事な猫を連れて。猫は、まるで王子に自分の精気の全てを与えたかの様に、毛並みはボロ雑巾の様になってしまった。アウグストが、一度(ひとたび)第一王子としての地位に戻った事を喜ぶかの様に、「にゃ〜ぉん」と小さく鳴く。そしてアウグストの腕の中で、猫は丸まると銀の目を閉じた。

王子が自分の自室で目覚めたある朝の事だった。毎朝自分を起こしてくれる猫が、枕元に来ないのを不思議に思って猫用のベッドに目をやったアウグスト。

そっと猫をさわると、まるで氷の様に冷たかった。震えるその手で、アウグストは冷たくなってしまった猫を抱き締めて、いつまでも泣いていた。

自分を守ってくれ、自分に命をくれた唯一の自分の友達。猫の亡骸を大事に抱き締めて。

彼は、あの時の王子だったのか・・・・。大ジージは、自分が神様にファートムを助けてくれる様に頼んだ時、魂の一部がファートムに、そしてもう一つが花園の向こうへと飛んで行った事を思い出した。

恐らく、それがあの猫へと飛んで行ったのだろう。どうやら、あの猫は王子を助けたいばかりに儂と同じ様に神に祈ったようだ。じゃが、猫は歳を取り過ぎていた。その上、王子は死を待つだけの体となっていた為に、魂の力が足りなかったんじゃな・・・・。

大ジージは、自分の意識をジャンヌの中で眠らせた。この子(ジャンヌ)ならば、

この王子を助けてくれるじゃろう・・・・。

「あなたが求めているのは、こう言う事でしょう」

ゆっくりと起き上がったジャンヌは、王子の背中に手を添えた。そしてそっと彼を抱き締めると優しく王子の髪を撫でていた。まるで泣いている子供を慰めるかの様に、優しくそっと。
ジャンヌが伸ばした手からは、ラベンダーの心地よい香りが放たれる。

「一人ではありませんよ。もし、挫けそうな時は、心を解き放つのが一番です。あの銀の双眸を持つ猫にもお話をされていたように」

まるで幼い子に言う様に背中をトントンと優しく何度も叩くジャンヌ。
初めは、驚きのあまりジャンヌを凝視していたアウグストも、ジャンヌを抱き締めていた。
（な、何故・・・・知っておる・・あの猫の事を・・・・。）

「・・・・・・ジャンヌ。あと3年から4年の間。其方はこの王宮に住む事になるが、大丈夫なのか？」

ジャンヌは、さあ？と言わんばかりに肩を竦めた。
それよりも、今のジャンヌには大きな問題が待ち構えていた。

「今　私が一番頭を抱えているのは、成人の儀で踊るダンスの事ですわ。ふー　上手く踊れるのかしら…。ダンスなんて無ければ良いのに・・・・」

「ダンスは、苦手なのか？」

「嫌いです。ああ、成人の儀なんて無ければ良いのに・・・」

不安そうに口を尖らせるジャンヌは、１５には到底見えない。そんなにダンスが苦手なのだろうか・・・。ジャンヌのコロコロと変わる表情に、アウグストもつい笑顔が出てくる。

ジャンヌは、思いついた様にパン！と両方の手を合わせて音を鳴らすとアウグストの顔を見た。

「そうだ！アウグスト様は、ダンスがお得意なのでしょう？でしたら、私に教えて下さい。そうすれば、私もあなたの事をもっと分かる事が出来ますし」

アウグストは、ジャンヌの言葉に驚いた様に目を真ん丸にした。そしてクスッと笑っている。

「ジャンヌ。お前は本当に変わっているな。普通の娘ならば、どうやって私やディートリッヒに取り入ろうかと手をくすね居ているのに。お前は、成人の儀にしか集中しておらん。」

可笑しそうに笑っているアウグストを見ていたジャンヌも、つられて微笑んだ。

「アウグスト様。やっと笑ってくれましたね。あなたの本当の笑顔が見れて、私は嬉しいです」

ジャンヌは、そう言うと両腕を大きく伸ばすして伸びをしている。そして鈴の音の様な声で「解除」と一言呟くと蒼い結界がたちまち消えて行った。

「では私、そろそろ別邸に戻りますわ。アウグスト様、ダンスのご指導、お願いしますね。では、失礼します」

ジャンヌがドレスの端を少し持ち上げて礼をすると、さっさと別邸の方へ帰ってしまった。

一月のこの季節は、普通連日のように雨やみぞれが降るのだが、今日に限って春のような温かさを感じる。

アウグストは、自分の薄い唇を指でそっと撫でると微笑んだ。

「本当の笑顔か…」

アウグストは、いつも微笑を讃えていたが、それは作られたもの。その微笑を見て、他の貴族や臣下達が自分の事を「太陽の君」だと言って居る事は知っていた。

偶像を奉り上げる様に、自分の作られた微笑に心をときめかせている女達を見る度に、アウグストは表面は笑顔で笑っていても心の中では彼らを冷笑していた。

「ジャンヌ…か。本当に変わった女だ」

太陽の君の笑顔（改）（後書き）

アウグストの幼少時代です。
どんな病気?と突っ込まれたら・・・やっぱ免疫生がなかったと言う事にしてます。
沢山のアクセスありがとうございます。
誤字脱字は、なるべく無いように何度も文章をチェックしておりますが、それでもあるのだと思います。そのような時は「ここ間違っています」と教えて下さい。漢字のおさらいにもなりますので。

Ｋｎｉｇｈｔ　ｂｕｇ

似た者親子～ジャンヌとジャックリーン

「ジャンヌ！一体何処に行っていたんだ！？　探したんだぞ！」

別邸のドアを開けた途端、久々に父様の雷がジャンヌに落ちた。

「庭に居ましたが」

「お前の姿は見えなかったぞ！」

「見えないのは、当たり前ですよ。庭で結界張って寝てましたから」

シレッと言っているジャンヌは、母様やマーサと一緒に料理をし始めた。

ジャンヌは、そっと自分の唇を指の腹で触った。フフッと微笑むと楽しそうに食器をテーブルに並べ始めた。

食事の用意が出来てテーブルの上には、いつもよりも豪華な食事が並べられている。

食前酒、生野菜のサラダ、牛肉のソテー、柔らかそうなクリームを練ったロールパンにそれから、人参のタルト。

ジャンヌ達は、女神シュスラーを崇拝しているので、食事の前には、いつもお祈りをしている。女神シュスラーと大天使シュスラードは、この世界の神であり、信仰の象徴と言われている。お祈りが終わった後、マーサがふと気付いたようにジャンヌに聞いて来た。

「ジャンヌ様。ご帰宅された時から口紅が乱れていますが、どうされたんですか？　袖口にも、ハンカチにも、紅は付いておりませんのに…」

少し小さな溜息をついたジャンヌは、父様達が口に食前酒を含んだのを確認すると爆弾発言をした。

「ああ。先ほど口付けされたからですわ」

ベンジャミン達は口から食前酒を吹き出していた。ジャンヌは事前に持っていた銀のトレーをさっと自分の前に出して、自分の分の食べ物と服を食前酒の飛沫から守った。ジャンヌは何事も無かったかの様に、トレーを予備のナプキンの上に置くと黙々と食べ始めた。

ベンジャミンは、ナプキンで口元を拭くと、マーサに早くテーブルを拭く物を持って来る様にと指示を出していた。マーサは、ジャンヌの様子から見てこう言う事をなさる方だからと、既に予備のナプキンを多めに用意していた。

ジャンヌがいつも何か爆弾発言をする時は、決まって食前酒を両親が飲み始めた時に言うのだ。それで何度も被害にあっている旦那様を見て、マーサはお気の毒に…と毎回心の中で合掌をしているのであった。

「く、く、口付け?!　何処のどいつにそんな事をされたんだ!殴ってやる!」

「あら、父様。あの方を殴ったりなさったら、困るのは父様ですよ」

「どうして、相手を庇うのだ。ジャンヌ!」

「だって、相手は王子様なんですもの。殴ったりしたら父様が不敬罪で牢獄行きか、男爵家の爵位までも剥奪されてしまうわよ」

今にも爆発しそうな様子のベンジャミンだったが、またまた魂を抜かれてしまった父ベンジャミン。そんな父様に対して妙に落ち着いているのが、母親のジャックリーンだ。

「あら、でも王室に輿入れは決まっているのだから、良いんじゃありませんか?　それにしたのではなく、されたのですからね。　で、ジャンヌ。どちらの王子なの?」

この親子は本当に似ている。この母親にこの娘ありと言った感じだろうか…。

「金の髪で碧眼だったからアウグスト様よ。う～ん。でも、寝ている時に二度されただけだから、私が起きている時になされば良いって言ったら、もう一度して来そうになったけど、寸止めだったわ。全く根性無しよね」

父様は、口を開けたまま魂が抜かれた様に、今夜何度目なんでしょうね。またまた失神していました。

ジャックリーンは、テーブルに身を乗り出してジャンヌに聞いて来る。

色気も何も無い、男勝りだった娘が、殿方と口付けなんて…。しかも、相手はご婦人方の憧れの太陽の君だなんて…。我が娘でも羨ましいわ～。

「あ、でも…。そう言えばディートリッヒ様とも一度やった事がある。でもあれは口移しで薬を何回かに分けて飲ませただけだから。口付けとは言わないかも。もしも、本人がその事を覚えていたら、どうか分からないけどね」

娘の爆弾発言から漸く立ち直った父ベンジャミンは、またまた失神した。

それを聞いたジャックリーンは、目をウルウルさせるとジャンヌに、どうだったの？とか感想を聞いて来た。

「ディートリッヒ様の時は、助けるのに必死だったから、分かんないわ。それに今日のなんて、私が眠っている時だったから、どうせなら私が起きている時にすれば良いのに…」

ジャンヌはそう言うと、人参のタルトをパクッと食べていた。
人はいつも見かけで自分を判断している所がある。確かに男爵領地でも、初めはみんなジャンヌの事をお淑やかな女の子だと思っていたようだが、ジャンヌ自身もうそれが窮屈で溜まらないのだ。
どうして自分を出しちゃダメなの?!母様に泣いて相談すると母様は、ジャンヌの頭を撫でると淑女の嗜みの入門編として教えてくれた。

「ジャンヌ。可愛いジャンヌ。もう泣かないで頂戴。あなたのそういう所を好きになる殿方もいらっしゃるのよ。それまでは他の皆が想像しているか弱き少女のイメージを保っていれば、良いのよ。演じ分ければ良いのだから。人生は演劇なのよ!ジャンヌ!」

そう言う訳で領地内では、男勝りのジャンヌだが、何かの行事の時には淑女らしく振る舞っている。
だが、どんなにジャンヌが淑女の様に振る舞っていても、完全に出来ないのが一つだけあった。それはダンスだった。ジャンヌの両親はダンスが上手なのに、何故かジャンヌはダンスの才能が無いのだ。それに降って湧いて来たような、今回の成人の儀。これにはダンスがもれなく付いて来る。
何度もジャンヌに足を踏まれている父様は、ジャンヌの練習に付き合う様に母様に言われていたが白旗を上げる始末。
ジャックリーンは、溜息をつきながらもジャンヌにどうやってダンスを教えたら良いのかを考えていた。

「母様。アウグスト様にダンスを教えてもらう事になりましたから、だからダンスの事は心配しないで下さい」

そう言うとジャンヌはナプキンをテーブルの上に乗せた。マーサが

食器を下げ始めると、ジャンヌはさっさと二階の自室へ行ってしまった。
ベッドの上で今日の反省を自分なりにしていたジャンヌは、はぁ～っと溜息をついた。

「アウグスト様にされた時に、泣けば良かったのかしら？」

ジャンヌは、そんな心にもない事を言いながらも、窓から見える王都の景色を眺めていた。
どちらかを選べって…。
成人の儀まで後６ヶ月。

似た者親子～ジャンヌとジャックリーン（後書き）

誤字脱字を何とか修正しました。

猫〜アウグストの幼少

その夜、アウグストは夢を見ていた。懐かしいあの猫に見守られていたあの頃の。
北の塔に入れられる前日、アウグストは侍女達の立ち話を偶然聞いてしまったのだ。

「全く、第一王子の侍女になれば、王子様が成人された時に、優位になると思っていたのに、飛んだ見込み違いだったわ。もう、嫌になっちゃう。あんなに体が弱ければ、すぐにコロって死んでしまうわ。折角の私の計画も台無しよ〜」

「本当本当！私の妹は、ディートリッヒ様の所に行儀見習いで侍女として入っているけど、あの方の素晴らしさと言ったら、本当に神二物を与えないって言われるけど、二物どころか何個も与えまくっているじゃない〜。私もディートリッヒ様にして置けば良かったわ〜」

そんな心ない侍女達の立ち話は、今に始まった事ではない。
アウグストが気温の変化で直ぐに熱を出してしまい、何日も床に伏している時など、これ見よがしに、そんな事を話している。
やはり、自分は第一王子と言う名ばかりの王子なのだ。
誰からも必要とされる事も無い、臣下でさえも最初は影でコソコソと自分達の主人であるアウグストの事を「将来が見えない王子」だと言い出した。
いつも、そんなアウグストの周りの心ない者達を叱りつけるのは、乳母のローリアと幼いアウグストに着けられた護衛のシルベスターだった。
あの悪夢の様な夜の事は、今になっても忘れる事など出来やしない。

幾ら第一王子が住む離宮でも、アウグストの周りは全て敵ばかりだった。昨晩まで熱を出していたアウグストは、側にいた乳母に水を頂戴と言った。ローリアは、王子の寝台の近くに置いてある水差しをコップに入れるとアウグストに手渡した。

「いけません！アウグスト様。それをお飲みになってはなりませぬ！」

コップをアウグストの手から取り上げたシルベスターは、怖い目をしてアウグストを見ていた。

「シルベスター殿…それでは、王子の熱も下がりませぬ」

ローリアは、シルベスターの行動に驚いていた。ローリアが言う様に、アウグストの喉はカラカラで声も出ない。水を求めるアウグストにシルベスターは、自分の腰に着けていた羊の革袋の水を王子に飲ませた。

漸く喉が潤った王子は、どうしてシルベスターが自分にその水差しの水を飲ませないのかと聞いて来た。暗殺などと言う恐ろしい言葉の意味も知らない、この王子は人を疑う事など知りもしなかった。だから、心なき臣下達、侍女達の陰口に恐れ傷ついていたのだ。すっかり萎縮していた王子に、シルベスターが近づくと彼の大きな手が幼いアウグストの頬を撫でている。

「アウグスト様。私はこの命にかえても、あなた様をお守り致します。ですから、私の事を信じて下さい。この離宮でアウグスト様の事をお慕いしているのは、私とここに居る乳母のローリアだけでございます。明日、アウグスト様は北の塔に入れられる事になりました。私の力が及ばず申し訳ございません。私も一緒に北の塔へと志願致しましたが、騎士団に戻る様に命を受けました…。残念で

ございます」

シルベスターの言葉に、側にいたローリアも涙を見せていた。
アウグストの小さな手は、震えながらも絹のシーツをキツく握りしめていた。手の上にポタポタと溢れる雫。シルベスターは水差しの水を一気に飲み干すと王子に向って言った。

「アウグスト様。もし私を信じて下さるなら、私をお側に置いて下さい。人間としてではなく…」

シルベスターが言葉を言い終わる前に、白い光がシルベスターを包むと洋服だけが一瞬　宙に舞った。　パサリと音を立てて落ちる洋服には、その服に袖を通す主人を無くしていた。シルベスターはアウグストの前から忽然と姿を消してしまった。
ローリアは、両手で口を押さえると嗚咽しはじめた。

「あの水差しの水は、やはり毒だったのですわ…。シルベスター殿…　無念です…」

「シ・・シルベスター！何処なの？　何処に居るの？　返事をしてよ！どんな姿でも良いから、僕の側に居てよ…シルベスター！」

この日は、満月だった。
優しく王子の部屋を照らす月明かりは、やがて一つの綺麗な水晶玉へと形を変えた。
アウグストの部屋にいきなり現れた水晶玉を持っているのは、大天使シェスラードだった。大きな翼には輝くばかりの金の光が満ちあふれている。金色の巻き毛をしているシェスラードは、床でシルベスターの服を握りしめて泣いているアウグストを見ると優しく微笑んだ。

「お前がアウグストか」
「は、はい！」
「その服の持ち主であるシルベスターから、頼まれてな…。彼奴（シルベスター）はどのような姿でも良いからアウグスト、お前の側に居たいと言っていたのでな。毒入りの水差しを自分で煽って私を召還しようとするとはな…」

ど、毒入り?!
その言葉を聞いてアウグストの顔色は真っ青になった。
此処に居れば確実は自分は殺されてしまう…シルベスターを失った今、自分を守ってくれる者は、乳母のローリアしかいない。しかし、ローリアは乳母だ。しかも初老である。そんな乳母に自分を守れと言う訳には行かない。

「大天使シェスラード様。私には自分を守る術も、そしてローリアを守る事も出来ません」
「そうか…。やはりシルベスターが必要なのだな。だが、人間の姿でお前の近くに居させる訳には行かない。それでも良いのだな」
「はい。彼がどのような醜い姿になろうとも、シルベスターは私を守ってくれます。そう信じています」

揺るがないアウグストの碧眼を見たシェスラードは、微笑むと自分が持っていた水晶玉をアウグストに手渡した。水晶玉は、アウグストの掌で形を変えると黒い銀の虎縞の猫となった。
その猫の瞳は、シルベスターの蒼い双眸とは異なる銀の双眸を持っていた。

「シルベスター…」
「にゃぉ〜ん」（はい。そうですアウグスト様）

文字通り彼は死ぬまでアウグストに使えていた。その事を知るのは、乳母と自分しか居ない…・・なのに、あのジャンヌは知っているのだ。揺れるような銀の双眸でアウグストの心をかき乱して来る。何とも懐かしく昼間の様に、何もかもを忘れてジャンヌの腕の中で眠っていたい・・・。シルベスターが生きていたあの頃のように・・。

アウグストが、健康体となり無事に第一王子として、この離宮に戻った時には、猫(シルベスター)はかなり歳を取り過ぎて衰弱していた。それでも、アウグストは、一日でも早くシルベスターに自分の王子としての姿や務めを見せる為に、勉学、ダンス、乗馬　マナーに魔術と言った物を物凄い早さで習得して行った。

猫の姿となったシルベスターは、いつ死んでしまうか分からない。早く自分の地位をこの離宮にいる者達に知らしめる為にも・・・・。いつの間にか、周りはアウグストを次期国王へと押して行く声が強まっていた。

まさにどん底から這い上がって来たアウグストである。

臣下達や侍女達の軟化した態度を見て眉を顰めたアウグストは、父王を通して彼らを一掃した。つまりクビである。

生前、シルベスターが極秘で調べていた報告書が見つかり、その報告書には、幼きアウグストを亡き者にしようと少量ずつ毒を盛っていた事が書き記されていた。そしてその実行犯までも書いてあり、それに関わった貴族達は家を爵位を剥奪となった。

その後、アウグストには、新しい臣下達が付いた。彼らはシルベスターから「もし自分の身に何かあれば、アウグスト様を守る様に」と言われていたのだった。

猫(シルベスター)が、この世を去る時、大天使シェスラードがシルベスターを迎えに来た。アウグストの腕の中で抱かれていた猫は、大きく息をすると、ニッコリ微笑んだまま旅立って行った。

アウグストの腕の中には、猫の姿が銀の砂粒の様に消えて行く。そ

してシェスラードの隣には、微笑んでいるシルベスターの姿があった。

「王子。私は、これで安心して天国へと旅立って行けます。王子なら立派な姫を見つけられますよ」

そう一言残すと2人の姿は跡形も無く消えて行った。王子の周りにいた臣下達や侍女、そして乳母はシルベスターの名を呼びながら目頭を押さえて泣いていた。

明日から、あの娘に会う事になっている…。早く寝ないとな…。

成人の儀まで後6ヶ月

猫～アウグストの幼少（後書き）

猫との接点と言う事で、今までは乳母を何となく出していましたが、乳母だけで王子を守る事は出来ないので、騎士を付けました。
シルベスターです。年齢はこの時２５才くらいと言う事にして置きます。
猫の歳って、一年に４～６才くらい歳を取るので、最長に生きても２２年くらいですかね。それって人間の歳にすると１３２才!?
凄いです。
それにしても猫って可愛いですよね。
犬も可愛いです。
アウグストは、猫派と言う事にしました。

マーサの溜息

今日は、私マーサのお話でございます。
私の朝は早く、早朝まだ男爵家の皆様が夢の中で彷徨っていらっしゃる間に、軽く別邸の掃除をしています。
その後は、朝食の準備ですか…。寝る前に大体な所はやっていますので、ロールパンを竈に入れて焼いておくだけです。ジャンヌ様は毎朝フルーツを山盛り一杯食べられますので、その用意をしています。
家計が苦しい男爵家では、フルーツは高価なのですが、ジャンヌ様の魔法で領地の森にはいつでも鈴なりにフルーツが獲れますので、タダと言うのは本当に有り難いですね。

朝。眩しい太陽の光が窓から差し混んで来る。マーサは覚悟を決めた様にそっとドアを開けると息を殺してジャンヌが寝ているベッドに近づく。

「ジャンヌ様。朝でございますよ。起きて下さい！」

ゆさゆさとジャンヌを揺り起こすマーサ。するとジャンヌは、ベッドの中で大きく手足を広げると伸びをして、起き上がった。間一髪でアッパーカットを避けたマーサは、ほっと溜息をついた。

実は、ジャンヌ様って朝が苦手なんですよ。それもその筈、ジャンヌの様に長い髪の方なら分かると思いますが、特に縦巻ロールが入っているジャンヌの髪は、特に縺れやすい。
毎朝、涙を出すくらいブラッシングをしないと直ぐに縺れてしまうのだ。ブラッシング自体、マーサの楽しみでもある。日頃の鬱憤をそれで晴らしているとでも言いましょうか　フフフ。

それに、男爵家では家計節約のため、シャンプー代をケチってます。もちろん、コンディショナーも同じく。シャンプーセットを買うよりもジャガイモや人参、お肉を買った方がお腹も膨れますしね。ウフ。

では、何で洗っていたのでしょうか……。それは、「何でも石鹸です」

この石鹸で頭を洗うと確かに皮脂汚れは落ちますが、乾燥しやすくなりますね。

その為、毎朝ジャンヌ様は髪の手入れとか言われて、私から地獄のようなブラッシングをされてました。ま、日頃の恨みも入っていますから・・・・・！

でも、此処　男爵家に与えられた別邸には、キチンとサロン並みのシャンプー&コンディショナー、さらにトリートメントも用意されていました。

しかし、慣れって怖いですね。私もジャンヌ様もシャンプーには手が届かず、ついつい　いつものクセで使い慣れている石鹸を手に取って、髪も体も擦り洗いしてしまったのです。ハイ。

朝になれば、髪の毛はグジャグジャの焼きそば状態か、メデューサでしょう。　まあ、減らず口のジャンヌ様なので香ばしい焼きそばよりも、メデューサの方が、ぴったりですわね。

そこで、朝一から湯浴みをすることになりました。

マーサがシャンプーを使ってジャンヌ様の髪を優しく擦り洗いしています。

「ジャンヌ様。これってどれ位出すんでしょうね？」

「さあ、私も知らないわ、ジゼルコインくらいで良いのかしら？それともモクアミパンくらいで良いのかしらね？」

（ジゼルコインの大きさは、小さなおはじきくらいです。それにし

ても、縺れているんだから、もっとシャンプーを使った方がよろしいのかしら…。これじゃあ獅子の鬣（たてがみ）と一緒だわ。）

でも縺れているので中々上手く泡が立ちません。根気よく優しく縺れた髪を揉みほぐした後は、綺麗サッパリ泡を洗い落として、コンディショナーをたっぷりと使えば良いのですが、どうやらこの男爵家の皆様は、貧乏性が取れないようで…。

マーサは自分の掌に、ほんの少しだけコンディショナーを垂らすと、それを使ってジャンヌの髪をマッサージしてる。

こんな事を繰り返した後、漸く湯浴みも終わり、ブラッシングへと突入！

いつもなら、ジャンヌは目に涙を浮かべて騒ぐ程、地獄のようなブラッシングになるのだが、今朝は、そんなに痛く無い…。

これって、凄い！　ジャンヌは目をキラキラさせてシャンプーセットに抱きつくと、その場で小躍りしそうになる自分を抑えるのに必死だった。

階下から、母親のジャックリーンの声が聞こえて来る。

「もうすぐご飯にしますよ～」

「はい。ただ今参ります！」

ジャンヌは、そう答えると急いでドレスに着替えて階下へと下りて行った。

いつもは、何となく縦巻ロールの髪も、今日はふんわりコロネみたく軽い。シャンプー&コンディショナーで髪質がこんなに変わるなんて…。ジャンヌは朝からご機嫌だった。

鼻歌を歌いながら、朝食の果物を食べている。

それを見ていた父ベンジャミンは、とうとうジャンヌが壊れてしまったと思ったみたいで、スゴスゴと書斎へ行ってしまった。

ジャンヌの普段の朝は、ご機嫌で始まる事など、決して無いのです。
朝は低血圧なので、起こす方も命懸け。いきなりジャンヌを起こしたら、枕パンチが飛んで来るのは当たり前。寝相が悪い時は、もれなくキックもオマケでついて来ます。
たまに私が風邪でダウンしている場合は、旦那様であるベンジャミン様がジャンヌ様を起こしに行かれるのですが、無傷で食堂の椅子に座られた事など一度もありません。
ジャンヌ様の目が完全に覚めるのは、朝食を食べられてからです。
それまでは、まるで二王様のような感じで、いつ怒りが爆発してもおかしくないと言う雰囲気を醸し出しています。ですから、朝食が終わるまでの間、男爵家の方々はジャンヌ様の様子見をしています。
魔法でも使われたら堪りませんからね。
お腹も満たされたジャンヌ様は、ようやくお目覚めのようで「オハヨウございます」と天使のような笑顔で言われますが、私あなたの闇魔様の様な顔も知っておりますから。ハイ。

ジャンヌ様は、恋愛ごとにはとてものめり込む方ではないので、昨日のジャンヌ様の爆弾発言には、私も驚きました。
2人の王子様と口付けですか…。人は見かけに寄らないモノですね。ジャンヌ様は、見かけは清純で大人しく可憐っていうイメージを持たれるんですが、本当は勇ましいのです。毒蛇を見つけるなり魔法で毒を全て出させて、その毒を使った薬で何やら妙な薬を作られる事もあります。あまり大きな声では言えませんが、そのー　夜のお供ですね…。つまり秘薬です。
その割には、ジャンヌ様と来たら「赤ちゃんって、神様に祈れば出来るのよ」そう仰っていました。
ならば、どうしてそのような妙薬を作られるのかと聞きましたら、一言「売れるから」でした。ジャンヌ様は薬師としての腕はぴか一なのですが、いつも妙な薬を作られるのはお止めになった方がよろしいかと思いますがね…。

私の溜息は、これからもまだまだ続きそうでございます。

もう少し、殿方にも優しく接してあげれば宜しいのに、ジャンヌ様曰く「私は自分を偽りたく無いの。母様だって言っていたわ。『ありのままの自分を受け入れてくれる人を見つけなさい』ってね」

可愛いお顔でそのような事を言われても、困ります。旦那様の話では、ジャンヌ様がお二人の王子様達の内、どちらかと結婚されると言う事だそうです。既に王様も王妃様もジャンヌ様が選ぶ方を国王にと考えていらっしゃると…。

ジャンヌ様。マーサは恐ろしゅうございます。あなたのような可憐？と言うよりも、無遠慮でお転婆、その上に無鉄砲な少女がこの国の未来を握っていると思うだけで、この世の終わりが来るのではと思ってしまいます。

マーサでございました。

レッスン一週間目　前編

あれから早くも一週間が過ぎました。
ジャンヌ様の成人の儀を執り行う為の準備が、着々と進んでいます。
普通の成人の儀と言えば、礼儀作法やマナー、ダンスだけを学ぶのだが、ジャンヌの場合はすでに2人の王子が妃として迎えたいと国王と王妃の前で言ってしまった事で、花嫁修業も同時進行で入ってしまったのだ。
王宮の宮廷魔術師達も、ジャンヌの魔法に興味津々なので、この世界で希有とされている銀の双眸を持ち主がどれだけの魔力を持っているのか見定めたいと言い出し、勉強科目が次第に増えて来たのである。
もちろん、薬師として名を馳せていた事もあるジャンヌは、王宮の宮廷薬師達が学ぶ魔法学校薬師学科で特別講師として授業をする事もある。
ダンス以外は、全ての分野がほぼ得意分野（もちろん礼儀作法は除いてですが）のジャンヌは、毎日とても充実した日々を過ごしていた。

「ジャンヌ様～。そろそろマナーの時間となりましたよ～」

以前、ジャンヌに謁見でのマナーを教えてくれた城の使者が、事の成り行きで礼儀作法&マナーの先生となったのだ。この方、名前はヘザーと言って元々王妃付きの侍女で、彼女が次世代の王妃の礼儀作法を教える事となっているのだ。他の貴族の娘達にとってみれば、それはとても羨ましい事なのだが、ジャンヌにとっては、有り難迷惑と言うよりも針の筵である。
それもその筈、この礼儀作法の先生は、マーサの様に手厳しい。ジ

ャンヌが結界を張って逃げようかと考えていると

「ジャンヌ様。逃げる事は即ち負けを認めた事になりますよ。それでも宜しいのですか？」

彼女は、ジャンヌの負けん気根性に火をつけるのである。
唇をグッと噛み締めたジャンヌは、「そ、そんな事はありません。や、やってみせますわ！」そう言うと、本を頭の上に乗せて真直ぐ歩き出した。

第一週目は、淑女としての歩き方、お辞儀の仕方の基本編から入る事になった。
漸く二時間の礼儀作法の授業が終わった。
脚はもうパンパン、背筋も凝りに凝りまくっている。今日はダンスのレッスンも入っているから、私の体……大丈夫かしら。
そうだ！こんな時は、魔法で結界張って充電するしかないわね！

城の中庭で比較的木々が鬱蒼と茂っている所を目指して、足早にジャンヌは歩き出した。この一時間の休憩時間を逃したら後は無い！
今しかないのだ！
周りをキョロキョロと見渡したジャンヌは、「結界」と言うとたちまちジャンヌの半径2メートルあたりに蒼い結界が張り巡らされた。
その結界の中でジャンヌは、太陽の光を浴びながら、「充電」と言うと疲れた体に温かいエネルギーが注入された様に体の中からポォ～としてくるのだ。
その後は、昼寝。寝ぼけた頭の中で本日のスケジュールを見直していた。
朝、王立魔法学校にて薬師学科の授業を体験。特別講師として招かれているけど、どんな風に人に教えたら良いのかまだ分からず、初めの一ヶ月間はただの学生として授業に潜り込む予定になっている。

要領を覚えたら、講師として教鞭をふるう事になっている。
金色のフワフワ巻き毛が、風に揺れているのは、とても気持ちがいい。いつのまにかリラックスしていたジャンヌは芝生の上で眠っていた。
温かく柔らかい感触がジャンヌの唇に触れる。
ゆっくり目を開けるとジャンヌの目の前にはディートリッヒ王子の顔があった。

「え～っとミス＝ヘザーの礼儀作法の後は…」

「魔術の授業だろ」

「あ！そうそう…魔術の…．．って、誰よ！勝手に人の憩いの場所に無断で入って来るのは！」

ジャンヌは、眉を顰めると起き上がって声のする方を見ていた。

「ディートリッヒ王子…．あなたも人の結界に入って来るんですか！　兄弟で同じ事は止めて下さいよ！迷惑です！」

「め、迷惑だと？　今までオレに対してそんな口を聞いて来た女は居なかったぞ！」

「ふ～ん。良かったですね。ここに居ますから。分かったら早く帰って下さい。昼寝の邪魔ですから」
ジャンヌは、シッシと言う様に手で邪見にディートリッヒ王子を扱う。

「兄弟でって、何だと！兄もオレと同じ事をしたのか！？」

「ええ。お陰で紅がずれましたけどね。あなたの唇にも私の紅が付いていますけど、疲れて寝ている女に口付けをしたなんて、ダメですね」

ジャンヌの容赦のない言葉に、イケメン王子は石となってしまった。

「アウグストと口付けしたのかよ！」

「されたんです！　何故私がしなきゃなんないんですか？　私が寝ている時に、お二人ともどうせなら私が起きている時にやれば、よろしいのに」

思わず誘うような事を言ってしまったジャンヌだったが、自分が兄と同じ事をしていたと知ったディートリッヒ王子は、またも石の様に固まっていた。

「それじゃあ、遠慮なく」

天の助けか、後少しでって言う所に午後二時の鐘の音が鳴り響く。溜息をついたディートリッヒは、そっとジャンヌに近づくが、王子の息が頬に当たるくらいに近い。

「あ、それと言い忘れましたが、私は物ではありません。助けたご恩をそうやって無下にされるのは、薬師として鳥肌が立つ程嫌です」

ジャンヌは、冷静な声でキッパリそう言うとディートリッヒ王子は、諦めたかの様にフッと笑ったと同時にジャンヌの魔法で結界から飛ばされたのだ。

ジャンヌは起き上がると「解除」の一言で結界を閉じた。その様子を一部始終見ていたのは、王宮魔術師のガゾロ＝ディーハルヒだっ

た。

今まで、蒼い結界などと言う物を見た事が無かったガゾロは、「あれが、蒼い結界なのか」ニヤリと微笑するガゾロは、これからジャンヌと会う魔法学校の魔術室へと向って行った。

レッスン一週間目　後編

今日は、漸く魔法陣を使っての魔力測定とか言う事をするのだ。
普通ならば、水晶玉を使ってどれだけの色と光が出るのかを示すのだが、水晶玉は只今修理中との事で、魔法陣を使う為にその魔法陣の講義を一週間受けていたジャンヌだった。
魔術ーそれは血と才能が物を言う。男爵家でも魔術を使うのはジャンヌとベンジャミンだけだ。だが、ベンジャミンの魔力は不安定で弱い。水を空中に浮かせるにしても、いつも水が破裂していたのだ。
ジャンヌは、一昨日から水を空中に浮かせる術を受けていて、目を光らせながらも真剣に授業を受けていた。初心者でもすぐには出来ないこの魔法をあの妃候補とウワサされているジャンヌは、いとも簡単にやってくれたのだ。
ガゾロは、このジャンヌには　もしかすると底知れぬ魔力があるに違いないと思うと、魔力測定を今度致しましょうと言う事になったのだ。
中世のヨーロッパの城を思い起こさせる建物を目指して走っている一人の少女。　金の縦巻髪を弾ませながら走っている。
ツタの絡まる魔法学校の石作りの建物に不似合いなピンクのドア…・って一体誰の趣味やねん。などと心の中で突っ込みを入れてしまったジャンヌ。そのピンクのドアを開けると、にっこり微笑んだ漆黒のマントで身を包んでいたガゾロは、ジャンヌを見ると近づいた。

「今日は、昨日ジャンヌ様に申しました様に、魔力測定を致します。では、こちらにどうぞ」

白髪まじりの髪と山羊のような顎髭を持つガゾロは、優しく笑う。
彼の瞳は薄い紫色だ。御歳２８９才だと言う現役の宮廷魔術師だ。
ジャンヌはガゾロの後について建物の中へと入って行った。

「今日は、此処の教室を使う事にしよう」
魔法で扉を開けると室内は、何もないただの広い部屋。
「コホン。ではジャンヌ殿。今から魔力測定の為に魔法陣を作って下さい」
ジャンヌは、すぅーっと息を吸うと両手を上に上げると祈る様に胸の前で手を合わせ「大天使シェスラードの名において…」そう言うと両手を床に着いた。
鬼火のような青白い炎が、魔法陣を象って行く。そして魔法陣の中央に大天使シェスラードが召還された。
「ジェンヌよ。何が望みだ?」
「別に何も望んでいませんが」
飄々と普通に答えるジャンヌ。
ピクリと綺麗なシェスラードの綺麗な眉が動くとフフと笑っていた。
「ただ今日は、魔力測定なので、大天使シェスラード様を召還しただけですわ」
「流石、蒼の魔石に選ばれた娘だな。では、私を上手く召還出来たのなら、宮廷魔術師のガゾロよ。ジャンヌの魔力がどれほどのものなのか分かっているのであろう。まだこの事は他の者には言うでないぞ。ガゾロ」
綺麗な流し目でガゾロを見たシェスラード。

ガゾロは、腰を抜かしたままジャンヌを見ていた。大天使シェスラードを召還してその上、大天使と普通に話をしているこの娘が、蒼の魔石に選ばれた娘…？

「ジャンヌ殿…いえ、ジャンヌ様」

そう言うとガゾロは、ジャンヌの前に跪いた。

運良く此処で授業終わりの鐘の音がなると、ジャンヌは2人に手を振って魔術室を出た。魔術室に取り残された2人は…．と言うと…。

「だ、大天使シェスラード様、ジャンヌ様は…」

「まだ、目覚めてはおらぬ。ただ、ジャンヌには魔術をみっちり教えてくれ。後、召還したのだから、その後の事も出来る様に教えておくように」

シェスラードは、微笑みながら消えて行った。

大天使が消えて行った後、ガゾロは大きく溜息をついた。

この方は、我が宮廷魔術師ディーハルヒ家に伝わる蒼い魔石の使い手なのか…。

ガゾロは深く溜息をつくと、ディーハルヒ家の初代当主が残したとされる予言の書を開いていた。

『一つの世界が二つに別れし時、銀の双眸を持つ蒼い魔石の使い手が世界を一つにするであろう』

あのジャンヌ様が世界を救うのだろうか…．まだ魔術の方は爪が甘いのだが、魔力は十分にあり過ぎる。あれで、もう少し真面目に魔術の授業を受けてくれれば…．

ガゾロの悩みは尽きなかった。

悩みのタネであるジャンヌは、駆け足で広い王宮の中を移動している。魔法陣を使って移動した方が早いのだが、ガゾロさんから「良いですか、ジャンヌ様。幾ら蒼の魔石の使い手とはいえ、ジャンヌ様の魔法には、ムラがあり過ぎます。そこで、移動の魔法は使わずに過ごして下さい。あ、もし魔法を使う時は結界の魔法だけにして下さい。分かりましたね」
そうやんわりと釘を刺されてしまったのだ。

「急げ！急げ！ダンスの授業に遅れちゃう！」

ジャンヌは走ってアウグストが待つ離宮へと急いだ。
離宮にある一番広いホールルームに、鐘の音と共に駆け込んで来たジャンヌは、両手を広げて「セーフ！」と言うとにっこり微笑んだ。

「遅い！あれは、途中休憩の鐘の音だ。１５分遅刻だぞ。ジャンヌ！」

今日は、このダンスの授業で最後なので、１５分遅刻したジャンヌは、もちろん居残りで練習していました。

「そこ！出す足が逆！」

「手の角度は、後１０度上げる！そこでターン。遅い！」

こ、この先生…．アウグスト王子って、イケメンなんですけど、物凄くスパルタ教師でもありました。習った所だけ、２人で踊る事となり、一通り踊ってみる事になりました。

「痛！って、ジャンヌ！何度私の足を踏めば良いのだ。私に何か恨みでもあるのか？」

「恨みですか？さあ？　これから出て来るやもしれませんね」

ジャンヌは、相変わらず飄々とした顔で、言って来る。
何の恨みか知らないが、合計2時間のダンスのレッスンが終わり、ジャンヌの体の全筋肉が悲鳴をあげている。あまりの足の痛さに無理して立ち上がろうとしたジャンヌは顔を引き攣らせた。

「痛！」

か細い声だった。
腓返りをしたようだ。思わず床に座り込んだジャンヌ。アウグストは慌ててジャンヌに近づこうとすると大丈夫ですと言い出しまた体上がるが、今度は足を挫いたようでジャンヌがまた崩れる様に床に座り込んだ。
まるで尋問するかの様に低い声でジャンヌに聞いて来るアウグスト。

「ジャンヌ。お前、今日は何度魔法を使ったんだ？」

「へ？」

「へ？じゃない。何度魔法を使ったと聞いたんだ」

普段の優しいアウグストからは想像出来ない程、何だか怒っている様に思えてならない。
アウグストの気迫に思わず目を逸らしてしまったジャンヌ。
そのジャンヌの両頬を挟む様に、大きな手で自分の方へ向かせるアウグスト。
蛇に睨まれたカエルの様に、脂汗が額からじんわりと出て来る。

「礼儀作法のレッスン後に結界を張って・・・その後、あまりにも疲れていたから、充電の魔法を使って・・・後は、ディートリッヒ王子を結界から追い出すのに使いましたね。それと結界を解く魔法に…今日の魔力測定で召還魔法を使いました」

私の言葉を聞いて、はぁ～と溜息をついたアウグスト王子は、キラキラと輝く金髪を乱暴に掻きむしると床に座り込んでいた私の前に座った。

「5回も魔法を使って、その上此処までの徒競走ぶりの走りに、ダンスと来れば腑返りになる筈だ」

思わず俯いているジャンヌ。
反省しているジャンヌを尻目に、アウグスト王子の尋問が続く。

「ディートリッヒと会ったと言っていたが、あいつが何かして来たのか？」

「王子（あなた）と一緒の事をして来ただけですよ。しかも、人が寝ている時に。こっちは眠りを邪魔されて、良い迷惑でしたけどね」

ジャンヌのアクの強い言い方に、クスッと含み笑いをしていたアウグストも、ジャンヌが痛そうに摩っている足を見て、顔を顰めた。

「魔法を使うと言う事は、全身の筋肉を使うのだぞ。幾らお前が蒼の石の使い手であっても、それは同じだ。こんな無茶な事を繰り返せば、ジャンヌ自身どうなるかぐらいわかるだろ」

飼い犬が、主人に怒られている様に耳も尾っぽも足れてシュンと反省しているような表情で、ジャンヌは俯いたまま必死に言い訳をし

ていた。

「す、すみません…。まだガゾロ先生に其処までは教わっていなかったので…。まさかこんな風になるなんて思っても見なかったから、以後気をつけます」

涙眼で痛む足を摩っているジャンヌ。余程痛むのだろう、肩で息をしている。

「どれ、見せてみろ」

「#”#$!!」

アウグストがジャンヌの足を触ると言葉にならない悲鳴を上げるジャンヌ。アウグストの手から柔らかい金の波動が出て来る。痛みが治まって来た。

「明日と明後日は休日だし、魔法は使うな！　分かったな。男爵家には私から事情を話しておくから」

有無を言わさない気迫に、ジャンヌも大人しくアウグストに従った。イケメンが怒ると空気も凍るって本当だ・・・。さっきから部屋の温度が１０度ほど下がって来ているような気がするんだけど・・・。

「は・・・い」

アウグストは、ジャンヌを抱き抱えると自分の離宮へと連れて行った。

その夜、別邸のドアから魔法陣が浮かぶと手紙が送られて来た。

「ジャンヌは、金の離宮に泊まります」

金の離宮＝アウグストが住んでいる離宮です。ちなみに白銀の離宮＝ディートリッヒの離宮なんです。

金の離宮にて　前編

いきなりの離宮からの手紙に驚いた父ベンジャミンは、魂が抜かれたかの様に食堂の椅子に座って伸びていた。母ジャックリーンは、夫ベンジャミンが握りしめている手紙をゆっくりと手から剥がす様に取ると、手紙の内容を見て目を丸くした。

「まあ～！なんて素晴らしい事なのかしら！」

ジャックリーンは恋する乙女の様に胸の前で手を組むと、頬を染めていた。ジャックリーン曰く、ジャンヌは幼い頃から野山を駆け回って、熊でも狼でも自分の家来にしてしまう男勝りだった。そんなジャンヌにはもう嫁の行き手は無いだろうと諦めていた所に、成人の儀の話が舞い込んで来て、その上幸運な事にジャンヌが助けた人が、この世界の王子様！
これって、それ行け玉の輿の王道ですわね！
一人で息巻いているジャックリーンは、鼻歌も出ている程、ご機嫌だ。

ところで、ジャックリーンと言えば魔術を使えた筈なのですが、ご本人曰く「私って、そんなに魔力が無いのよ。それに移動の術も得意ではないの」だそうだ。
王立魔法学校では、魔術よりも薬師として優秀な成績を収めていたらしい。
ジャンヌに薬師として術を教えたのも、彼女である。
しかし、魔法で移動が出来たのは、ジャンヌを身ごもっていた時に使ったあの１回っきりなのだ。
恐らくあの移動魔法が成功したのは、ジャンヌのお陰なのだろう。

そして、一方此処は　金の離宮にあるアウグストの寝室では、金の巻き毛をした少女がベッドの上で青白い顔で横たわっていた。その少女の顔色を見るだけでは、一見死んだのか?と思ってしまうが、規則正しく聞こえる寝息を耳にすれば、生きているのである。ただ、今の所は辛うじてと言った方が良いかも知れない。

ジャンヌは知らなかったのだが、魔術は体力勝負である。使い過ぎると命さえも削ってしまうのだ。魔法を使い初めの時、必ずその事は授業で習うのだが、ガゾロ自身これだけ高等魔術を使いこなせるのだから、そのくらいの基本は知って居なさるだろうと思っていた為にジャンヌに忠告するのを忘れていたのだった。ジャンヌが倒れた後で、ガゾロはアウグストから呼び出しを受けた。ガゾロは、そこで初めてジャンヌが、魔力の使い過ぎで倒れたと言う事を知ったのだった。

「ガゾロ・・・。今日のジャンヌの魔力測定で召還魔法を使ったと聞いたのだが、ジャンヌは一体誰を召還したんだ?」

「そ、それは・・・・」

「私にも言えないような事か?」

「いえ・・・そのような事は・・・・」

「では、話してくれガゾロ。ジャンヌはいずれ私の妃として迎えるのだから、私には知る権利がある。さあ、話してくれ。ジャンヌは誰を召還したんだ?」

ガゾロは、根負けした様に溜息まじりで言った。

「大天使シェスラード様です」

「な！何だと？！」

召還魔法とは、自分の魔力を使って呼び出すのだが、呼び出す相手に寄って自分の魔力がどれだけなのかを指し示す目安となっているのだ。ちなみに召還魔法で呼び出せる最大級のモノは、大天使シェスラードなのだ。

大天使を呼び出すのには、その召還した者の魔力の高さが基準となるのだが、下手をすれば命を落としかねない事になるのだ。

アウグストは、一度だけ召還魔法を使って大天使シェスラードを召還した人物を知っている。

彼は、自分の命と引き換えに大天使シェスラードを召還し、猫の姿に自分を変化させて欲しいと懇願したのだ。

シルベスター自身も、魔力は高い方であった。　その彼でも、命を引き換えにしないと大天使は召還出来なかったのである。

そして、ガゾロにとっても大天使を召還した人物は、彼が長い事生きている中でも、ジャンヌしか居ないのだ。

普通、魔力測定の召還魔法では、自分の両親を呼び出したりする者が多い。自分の血族を召還魔法で呼べる者は、高い魔力の持ち主と診断される。魔力が普通の者が召還魔法で召還出来るのは、動物を呼ぶのだ。魔力が低い者達が召還魔法で呼べるは、動かないもの即ち野菜とか果実である。それらの事を踏まえてでも、ジャンヌの魔力は特別高いと言う事が言えるのだ。

其処で、アウグストはガゾロにジャンヌの魔術の授業に付いて意見を述べて来た。

「ジャンヌに基礎である魔術と魔力の使い方を叩き込んで欲しいのだ。そうしないとあのお転婆娘は、最大級奥義である体力回復　”

充電”　をそれとなしにやってしまうからな。頼んだぞ。ガゾロ」

ジャンヌは知らなかったが、体力回復の魔術は普段の生活では使用しない予備の体力を引き出す魔術だ。その為に、一時的に体力を回復させるために使うのだが、その予備の体力を使ってしまえば、動く事すら困難になってしまう。いわば諸刃の剣である。　この魔術は上級者用の魔法で自分の身が危ないと言う事で、起死回生のために、使う魔術である。

魔法学校の生徒達でも、その位の事は知って居るのだが、魔法学校に通った事のないジャンヌが、そんな事など知る由もない。恐らく、便利な魔術だとしか思って居なかったのだろうな。

「は。畏まりました。来週からのジャンヌ様の魔術のカリキュラムを入門編に変えさせて頂きます。ですが、実施は中級にしませんと彼女の場合、何を起こすか分かりませんからね」

「うむ．．．。そうだな、それはガゾロに任せる」

「は。では、失礼致します。」

ガゾロはそう言うと杖で足下をコツンと叩いた。すると金色に光る魔法陣が出て来て、彼の姿はかき消す様に消えて行った。

ひんやりとする感覚が腫れた足に優しく触れる。

魔法を使い過ぎたのとダンスのレッスンや魔法学校の建物から、徒競走並みに走って来た事も重なり、体を酷使し過ぎたのだろう。

自分が覚えているのは、離宮のホールルームでアウグスト王子に説教されている所までしか覚えていない．．。

此処は、何処だろう．．？

目覚めた時に自分の手を握ってくれている人が居た。
誰だろう？　流れるような金の髪をそっと撫でていると、どうやら彼を起こしてしまったようだ。
「ん…。あ、どうやら看病していたら寝てしまったらしいな…。」
優しい表情は、ジャンヌの胸にほのかなトキメキと言う波紋を投げ掛けた。
ベッドの側のライトスタンドには、炎の魔石がランプ代わりに置かれていた。
魔石の近くに手桶とタオルが置いてある。この人は、こんなに優しい人なんだ…。そう感じたジャンヌは自分からそっとアウグストの手を握った。
指先から感じる自分の鼓動の早さ。彼の思考がジャンヌに入って来る。
（シルベスター…私は、お前に恥じないくらいの王子になれただろうか…？）
「シルベスター？ってもしかして、あの綺麗な瞳をした猫騎士の事ですか？」
ピクンと動く王子の指。
やはりそうなんだ…あの綺麗な瞳をした猫は、元は人間だったんだ…。

「ご、ごめんなさい。詮索するつもりは無かったの。ただ…アウグスト様の思考が入って来たもので…。ごめんなさい」

ジャンヌが必死に謝っているとアウグスト王子が自分を引き寄せると、キツく抱き締めた。
震えているのだろうか。小刻みに肩が震えている。
まさか、笑いを堪えている訳ではないよね…。
もしそうなら、例え王子であろうとも遠慮せずに横っ面を思いっきり叩かせてもらうわ！　そんな事を考えていたジャンヌだったが、

アウグストは「良かった。ジャンヌが目覚めてくれて…。良かった」と何度も言っていた。

アウグストの目の前で、ジャンヌがホールルームで倒れた時は、シルベスターの最後を思い出させる程ショックだった。途端にアウグストの顔色が真っ青になり、ジャンヌを抱き上げて医師を呼べ！と連呼するほどの慌て様だった。

「これは、一日でこの方の魔力を一気に使い過ぎたのとそれを知らず、過激な運動のし過ぎによる過労です。足は、腓返りをした時に、酷く足首を捻挫されています。週末の二日間は、とにかく魔法を使わせない様に休息をさせてください」

医師からの診断を不安な表情で聞いていたアウグストは、ホッと胸を撫で下ろした。銀の双眸と言う事もあり、アウグストは、知らず知らずジャンヌをシルベスターと重ねて見ていたのである。彼が毒の入った水差しを煽るように飲み干し、そして床に倒れたあの夜の事が目に焼き付いて離れないのだ。その場面をジャンヌもアウグストの思考から流れて来る事で、彼が愛されて育った訳ではないと言う事を知った。

「王子。泣かないで下さい。私は大丈夫ですから。でも、今日は本当に疲れました。魔法って体力を消耗させるのですね。今回の事で身にしみて分かりましたわ。王子も寝て下さい…ね。」

思考を読むと言う微量にしか使わない魔法でさえも、今のジャンヌにとっては気力との勝負と言える程、体力を使ってしまった。吸い込まれるように、眠りの世界へと落ちて行くジャンヌは、アウグストの腕の中で、すうすうと可愛らしい寝息を立てて眠っていた。

金の離宮にて　中編　不思議な夢

金の離宮でジャンヌは、不思議な夢を見ていた。
あれはこの世界を支える大きな夢の果実の樹だった。其処には、撓わに実る果実達。
体は竜の様に大きい魔王はその撓わに実る果実の中でも、一際大きく形の良かった果実を一つ選ぶとそれに魔法を掛けてしまったのだ。
片方に銀の輝きを持つ果実ともう片方に金の輝きを持つ果実。魔王はそれを見て「傑作だと」笑うと、予言を出した『この果実でこの世界は滅びる』と。

魔王は、一度人間の姿となると、白銀の雪の様に艶やかな長い髪を後で一つに括った男とも女とも言えない中性的な容貌をした人間が立っていた。瞳には光る銀色と血を連想させる鮮やかな紅色の瞳が光っていた。左右違う瞳の色を持つこの魔王は、自分の姿を見た人間を全て虜にしてしまう程の妖艶で美しい。彼が王都を歩く度に魔王の残り香を嗅いだ人達は、男も女も狂った様に魔王を求め、魔王の後について歩いて行くのだ。
魔王が去った後に残るのは、瓦礫に埋もれた人々の屍が山の様に積まれている。屍の多くは、微笑みを残して死ぬ者が多い。それは、魔王の色香に絆されて自ら命を差し出すのだから、恐怖や不安と言う物を感じる事が無いのだろう。
魔王の食事は、人の魂。小さな村に突如として現れた魔王に、村の人々は狂った様に彼に縋り付く。魔王に触れられただけで、騎士であろうとも魂をぬかれてしまうのだ。
魔王に寄って小さな村がまた一つ消えた。
地図を広げたこの世界の王は、地図の中から村の存在を示す名前が静かに消えて行った。それは、シャボン玉が弾けて空に消えるのと同じ様に儚い物だった。

欲深い王は、この世界中の勇者達を集めて魔王討伐を決めた。
魔王の魔力の源は、彼が自分の力の象徴と定めた金と銀の果実だった。それを求めて幾千もの勇者達が魔王の巣窟へと足を踏み入れた。しかし、誰一人として魔王の巣窟から無事に戻って来た者は居なかった。
空が金色染まる時。伝説の勇者が現れて呪われた果実を食べてしまう。
魔王は、呪われた果実の力を無くすと同時に、自分の巨大な魔力でさえも失ってしまう。
その伝説の勇者は、自分の手に魔力を込めて一本の矢を作る。その矢を舞おう目掛けて放つと魔王は倒されてしまったのだ。
呪いの言葉を残して。

『また再び我は、復活する。この世界が二つに割れる　その時に我は現れる』

勇者は自分の剣で魔王にとどめを刺すと、魔王は黒い霧となって消えて行った。後に残ったのは、魔王の巨大な城とそこにあった巨大な街だけだった。
勇者は、世界の王の元へ凱旋すると魔王討伐が成功した事を告げた。
王は、魔王討伐に成功した者には、なんなりと褒美を渡すと言っていた。そこで勇者は王に、「ではあなたの末娘であるクリシャーナ姫を下さい」と申し出る。

王は、勇者の顔を見た時に、なんて醜い顔なのだと思った。鼻は低く横に膨れていて、目は腫れぼったくしている。よくあれで魔王の姿が見えたものだと笑っていたのだった。唇はガマガエルの様に大きく開き、顔中にある出来物を見て王は、眉を顰めていたものだった。
こんな醜い男に、可愛いクリシャーナを渡す訳無かろうと王は勇者

の事をそうあざ笑っていたのだ。
クリシャーナは、小顔に大きな瞳、鼻も高く、サクランボを思わせるような可愛い唇、そし金髪の巻き毛をしていた。彼女の瞳はこの世界には希有と言われる銀の双眸をしていた。

王には、２人娘が居たが、まだ嫁の行き手がなく考えあぐね居ていた所に、魔王の襲来があり魔王討伐に成功した者に、自分の娘を娶らせようと思っていたのだった。
しかし、勇者が望んだのは、王が一番可愛がっていた、まだ幼さが残る末娘のクリシャーナだった。王は、仕方無く婚儀をさせることにしたのだが、婚儀が終わった翌朝、勇者が目覚めた時に自分の寝室で見たのは、一番上の娘であるカリーであった。
カリーは、自分の容姿が整っているのを鼻にかけている女で、勇者はカリーの事を避けていた。彼女の持つ魔の要素が漂い、気分を悪くするのだから。魔王討伐と言う生死を掛けた戦いだったのに、それをあざ笑うかの様に自分を平気で騙した王に、勇者は憤りを隠せなかった。

「私はクリシャーナが欲しいと言った筈だ。どうして騙すような事をするのだ。」

勇者は王にそう言うと王は、この勇者なら、クリシャーナ欲しさに色々な物を持って来てるわい彼の心には、魔王に寄って植え付けられた私利私欲が出て来た、

「此処では、妹が姉よりも先に嫁ぐ事は、良しとされていない。勇者よ、もし其方が本当にクリシャーナを欲しいのであれば、世界の果てにある龍の山へ行き、竜が持っている水晶玉を持って来て欲しいのだ。そうすれば、今度こそクリシャーナを其方に渡そう。」

クリシャーナは、勇者を見て縋るような瞳で訴えた。世界の果てにあると言われる龍の谷に一度入って行った者は、二度と戻って来ないからだ。

「どうか、行かないで下さい。父王は、欲深い方です。何を持って来ても、私を手放すような事はされないでしょう。私は、勇者様が傷つかれるのが怖いのです。どうか、行かないで下さい。」

勇者はクリシャーナと結ばれる事を胸に秘め、世界の果てへと向って行った。何ヶ月もの間クリシャーナは勇者の無事を神に祈っていた。姫の祈りが通じたのか竜を倒し、水晶玉を奪うと勇者は水晶玉の力で風よりも早くクリシャーナが待つ城へと帰って行った。王に、水晶玉を見せると王はとても喜んでいた。そして王は、水晶玉を手に取ると勇者に剣を向けた。

「お前ごときの者に、私の愛娘クリシャーナを渡す訳無かろう！斬れ！」

そう命令すると、王の臣下や家来達は、クリシャーナの目の前で勇者に剣を振り落とし殺害したのだった。城内に響くクリシャーナの悲鳴。その時の勇者の深紅の双眸は、クリシャーナを見ていた。勇者の屍に縋りついて泣いているクリシャーナは、銀の双眸で父王に懇願した。

「父様！私を愛して下さった方を返して下さい！」そう叫んで泣いていた。

クリシャーナの涙が勇者の頬に落ちると勇者の体が光り輝いた。まるで蝶が殻を脱ぎ捨てる様に勇者の体から眩しい閃光が出ると、そこに立っていたのは勇者ではなく大天使シェスラードだった。

クリシャーナを抱き締めたシェスラードは、王を見ると彼はワナワナと震え出した。大天使シェスラードは、相手に寄って天使にも悪魔にも変わると恐れられていた。クリシャーナにとって真っ白な翼を広げた天使にしか見えないが、王に取ってみれば黒い翼を広げた悪魔に見えていた。
王は、転げ落ちる様に玉座から下りると大天使シェスラードの前に平伏した。

「どうか、お慈悲を下さい！」

「ならぬ。お前は、私を3度も騙した。この世界を塵にさせる。」

それを聞いたクリシャーナは両手で顔を覆った。この大天使を怒らせたのは他でもない自分の父である。クリシャーナは、持っていた短刀を握ると自分の胸、即ち心臓に突き刺した。崩れ落ちるクリシャーナの体をシェスラードが抱き寄せると、クリシャーナは息も絶え絶えに震える声で大天使シェスラードに訴えた。

「ち、父が…あなたに犯した罪を…．お、お許し…．下さい」

銀の双眸には、もう既に生命の力を宿る影さえもない。ただのガラス玉のようにシェスラードを見ていた。シェスラードは、クリシャーナの亡骸を抱き締めると天へと帰って行った。空は荒れ狂い地上は、悲しみに嘆くかの様に激しく揺れた。それが一月も続くと欲深な王が治めていた世界は、滅びてしまった。
天国で大天使シェスラードは、クリシャーナの魂を転生させる事を決めた。また世界は元のように静かな日々を送れる様になった。
かつて魔王が住んでいた城とその王都には、人々が移り住み、城には新しい王が着いた。
それがレゼンド王の先祖であった。

以来、黄金の髪を持ち、銀の双眸を持つ者は、世界を救うと言われる伝説へと変わって行ったのだった。
ジャンヌは、微睡みに身を任せながらも、自分が見ていた夢は一体いつの時代の事なのだろうかと考える様になった。
魔力測定の時に自分が大天使シェスラードを召還した時、彼は嬉しそうな表情と言うよりも、懐かしんでいたと言った方が早いのだろうか…。自分の手を握ったまま眠ってしまっているアウグスト王子を見てジャンヌは、「ようやく見つけました。私の使命を…。」そう言うとアウグストの手にそっと口付けをした。
魔石で照らされた部屋にはアウグストの影とジャンヌの影が見える。だが、ジャンヌの影は異様な形を象っていた。それは、この世界の破滅へと導く事になるのだろうか。
それとも伝説の少女の様に、この世界を救うのだろうか。

未来と過去

ワンクッション置いて、その頃別邸の方はどうなっていたのかと言うと…。どんちゃん騒ぎになっていました。
ジャックリーンは、嬉しさのあまり感激して高級酒を飲むと泣き上戸となっていました。その横では、未だに魂を抜かれたような状態で、椅子に座っているベンジャミンが居ました。
ジャンヌが金の離宮に泊まっていると言う情報は、国王夫妻の耳にも届きました。

お二人は、「まぁ！ジャンヌを自分の離宮に泊まらせるなんて、なんて積極的なんでしょうね。アウグストは」そんな事を言っていた。

国王夫妻の耳にも届いていると言う事は、当然青の離宮にいるディートリッヒの耳にも入っていた。

「くそ！どうして、ジャンヌが兄上の所に泊まっているんだよ！」

ディートリッヒは、苛立ちながらも次々と枕を壁にぶつけています。そんな王子を遠巻きで哀れむ様に見守る侍女や臣下達は、何故今回ジャンヌがアウグスト様の金の離宮に二日も泊まる事になってしまっているのかを色々なツテを使って調べ始めました。
すると、臣下の一人がディートリッヒに耳打ちすると、ディートリッヒの顔色は途端に青ざめた。

「何？　ジャンヌのダンスの先生が兄上だと言うのか？　ジャンヌ自身が兄上にダンスを教えてくれる様に頼んだだと？」

確かに兄上は、ダンスの名手だ。ならば、私も自分の得意分野を活

かせば、ジャンヌの新しい家庭教師として、ジャンヌの側にもっと居る事が出来る。そう考えたディートリッヒは、伝達用の姿見の前に立った。

鏡に映し出されたのは、宮廷魔術師長のガゾロである。

ガゾロに、ジャンヌの魔力の高さはどうなのかと聞くとガゾロは、

「個人の情報ですので、それは例え王子様とあってもお答えしかねません」そう言った。

心の中で舌打したディートリッヒは、ガゾロに提案したのだった。

「多分、魔力の使い過ぎとかで倒れたんだろ？　あのお転婆娘は。なら、俺もあのお転婆娘を助けてやりたいんだが、ダメか？」

ガゾロは、驚いて姿見の前に佇んでいるディートリッヒの顔を見た。確かに、ディートリッヒ様程の魔力を持っていて、魔術、魔導師としての腕も技術も高いのは、ガゾロ自身よく知っている。何よりも、ディートリッヒは魔法学校時代では優等生であり、人に物を教える事がとても上手だった。

あの気性の激しいと言うか、やる気があるのか無いのか分からないジャンヌ様に魔術の基礎を教えるのは、自分よりもディートリッヒ王子の方が向いているのかも知れないと思ったガゾロだった。

「あの…．実は王子、ジャンヌ様の魔力は有り余る程持っていらっしゃるのですが、使い方に少々問題がありまして．．．．。　今回倒れられたのでございます。丁度、週末明けから魔法の入門編をお教えしたいのですが…私の方も他に仕事がございますので、誰かジャンヌ様にお教え下さる方をと探していたのです。王子、お願いしても宜しいですか？」

ガゾロは、？は言っていなかった。東の果ての国から魔導師協会の

理事として話し合いや、講義などあるので、本当にこれからジャンヌに付きっきりで教える事が出来なくなるが、どうしようかと悩んでいたのだ。そんな時にディートリッヒ王子自ら、魔力があっても均等に魔術を使うことが出来ない爆弾のような、あのジャンヌ様を助けてやりたいと言ってくれた。

ジャンヌ様が、お二人の唯一の妃候補だと言う事は、城の者全員が掌握している事である。

ディートリッヒ様にも、アウグスト様と対等の条件を付けた方がフェアーと言えよう。ガゾロは、長い山羊のような顎髭を摩りながらディートリッヒを見ていた。

「うむ。承知した。ついては、ジャンヌの魔力測定の結果を知りたいのだが、水晶玉は修理中だったな。ならば、召還魔法でジャンヌの魔力がどれほどの物か、分かったのだろう？教えてくれ。でないと何処からあの跳ねっ返りのじゃじゃ馬に教えれば良いのか迷うからな」

「そうでございますね。ジャンヌ様が本日の魔力測定で召還されたのは、…」

それを聞いたディートリッヒは内心とても驚いていたが、そんな事は表情に一ミクロンも出さなかった。

「それは、大変だった。彼女があれでは、時期に魔力に食われてしまうのがオチだろう。うむ。入門編と上級編を織り交ぜたやり方でジャンヌに教える事にする。そうでもしないと、アイツの事だから『つまんない～』などと抜かして、今日みたいな事態を招きかねん」

ディートリッヒの冷静な分析は、的を得ていた。やはりディートリ

ッヒ様も同じ様に考えられていたのでございますね…。ガゾロはそんな事を思いながら、ディートリッヒを見つめていた。

「では、早速来週から宜しくお願い致します。私は、半年程こちらに戻れませんので、その間、ジャンヌ様にビシビシ魔法の基礎を教えてあげて下さい。魔術の講師にも、この事は私から伝えて置きますので。では、失礼致します」

恭しく頭を下げたガゾロは、電通鏡から消えた。

ガゾロの自宅には、書類が沢山並べられていて、来週からの控えている魔導師協会の資料を読み返していた所だったのだ。

ガゾロは、夜空に光る星を見て溜息まじりで、魔導師協会の資料の一番上に重ねて置いていた、召還魔法の資料に目をやった。

過去に大天使シェスラードを召還した者の資料だった。

そこには、かつての自分の愛弟子で、最愛なる息子であるシルベスターの名が記されていた。

シルベスターは、若くして魔術の才能に溢れていた。いずれは自分の跡目を継いで宮廷魔術師長になるのだろうと思っていたが、シルベスターが選んだのは幸薄いアウグスト様の護衛に着く事だった。

そのシルベスターがある夜に血相を変えて父であるガゾロの宮廷魔術師長室にやって来た。

「父上、私は今度の春に騎士団に移動させられる事になったのです。そうなりますと、もう誰もアウグスト様を守る事は出来ません。あの方は、本来ならば第一王子として大切に扱われるべきお方なのに…。どうか、父上私がどのような姿になろうとも決して哀しまないで下さい。息子の最後の我が侭だと思ってお願いします」

嘗て今までだって父であるガゾロに対して、忠実に従って来た息子が起こした反抗はこれで2度目である。一度目は、アウグスト様の

護衛付きになる為に騎士団に入った事。そして、今回の事だ。並々ならぬシルベスターの言葉に、ガゾロはただ黙って我が息子を抱き締めるしか無かった。

「シルベスター。お前…。まさか召還魔法を使うのではないだろうな…。」

震える声で抱き締めている息子に聞くが、シルベスターはもう既に心に決めていたようで、コクリと頷いていた。

「大天使シェスラード様を召還致します。もうそれしか方法が無いのです。失礼する。もう、時間がないのです」

例え我が息子シルベスターがどんなに魔力が高くとも、大天使シェスラード様を召還する事は、足りない魔力を自分の命と引き換えに召還する事になる。それは即ち死を意味する。走り去った我が子の背中を見つめて涙した日が、昨日の様に思えてならない。

ジャンヌ様が今日の魔力測定で召還された大天使シェスラード様を見た時には、感動の気持ちよりもどうして私の息子の命を取られてしまったのですかと言いそうになった程、ショックだった。

そして、何よりショックだったのは、大天使シェスラード様を召還しても尚、元気にされていたジャンヌ様の魔力の強さには、ガゾロも驚かされたのである。

早く寝なければ…。

壁に架かっているシルベスターの肖像画を見て、「親不孝ものが…。じゃが、今のお前がアウグスト様を見れば、誇りに思うじゃろう。全てお前のお陰じゃ」銀縁メガネの奥には、優しい蒼い瞳が涙で潤んでいた。

未来と過去（後書き）

ガゾロとシルベスターの繋がりを今回の話に混ぜてみました。
前回の話では、ガゾロは、大天使シェスラードを召還した者を知らないと書いてましたが、目の前で召還魔法として大天使シェスラードを召還したのは・・・と言う意味ですので。

ジャンヌの影はどんな形をしていたかと言う事は、次回のお話にさせて頂きます。

金の離宮にて　後編　ジャンヌの影

ジャンヌは、自分の影を見て驚いていた。自分の影なのに、大きくそして逞しい体つきをしている影。もしかして彼がアウグスト様を守っていたシルベスターなんだわ！と理解した。

眠っているアウグストをそのままにして、ジャンヌは姿見の前に立つと自分を映した。鏡の中に映っているのはジャンヌではなく、アウグストよりも大人の男性だった。フワフワの黒髪は猫っ毛のようだ。蒼い双眸は湖の底の様に澄んでいる。意志の強そうな黒くキリリとした眉。鼻筋は高く少しツンと上を見ている。

あの目元は、見覚えがある・・・・・けど、思い出せない・・・・・。

「あ・・・あなたが、シルベスター様なのですね？ちょっと待って下さい。アウグスト様を起こしますから、あの方がどんなにあなたに会いたがっていたか…。」

ジャンヌがアウグストの方へ駆け寄ろうした時に、鏡の中から手が出て来て、やんわりと止められた。

『いえ。王子でしたら、大丈夫です。私は今あなたにこの世界の終わりを告げに来たのです。全てジャンヌ様、あなたが鍵となっています。』

「私が鍵ですか？　しかもこの世界の終わりになるかならないかのですか？　何故です。私は、貧乏男爵の娘です。その私が鍵などと・・・」

『あなたが、どちらの王子を選ばれるのかで決まるのです。その事

を忠告しに来ました。』

ジャンヌは、驚きながらもシルベスターの話を聞いていた。
さっきジャンヌが見ていた夢は、どうやらこの世界が作られた創世記の時代に起こった出来事だったのだ。と言う事は、自分はあのクリシャーナと同じような運命をたどる事になるのだろうか…。
俯いていたジャンヌにシルベスターが、「一刻も早く成人の儀を迎えられる事をお勧め致します。蒼の石の力だけでは、やがて復活してくる魔王を倒せるような魔剣は作れません。それには…」

寝室がピカピカと不思議な光を放っている事に気がついたアウグストは、光がしている方へと歩み寄って行った。
其処には、ジャンヌが巨大な姿見に向って話をしていた。そしてその姿見の中にはシルベスターが映っていた。

「！」

ジャンヌは気付かずにシルベスターと話をしている。
夢の話？創世記の時代……？　そういや、確かガゾロ達がジャンヌの瞳を見て騒いでいたな『伝説の少女が現れた！』など言っていたな…。
シルベスターは、アウグストが物陰からこっちを見ているのに気がつくと、あの懐かしい声で王子の名前を呼んだ。

『ア・・アウグスト様…』

シルベスターの懐かしむような哀しい声に、ジャンヌは自分自身後を振り返っても良いのかどうか、悩んでしまった。今の姿見に映っているのは自分ではなくシルベスターで、アウグスト様がどれだけ会いたかったのかよく分かっている。

目の前の彼（シルベスター）に目で促すと覚悟を決めた様にコクリと頷いてくれたので、ジャンヌも心無しかほっとしたのだった。

「シルベスター！　どうして私に会いに来てくれないんだ！お、オレはお前を失った時、どれだけ悲しかったか…。」

肩を震わせながら、ジャンヌと姿見に映ったシルベスターの方に向って、ヨロヨロと歩いて来た。

『申し訳ございません…。これも全てアウグスト様の御身の為と思い不肖シルベスターは、あなた様が第一王子としてこの国の王となって頂くためにと考えた末の事でございます。』

ダンスではスパルタ教師のアウグスト様も、シルベスターの前ではこんな表情もするんだ。いつもの人を寄せ付けないような絶対零度の微笑みは、やはり寂しい幼少時代を過ごされた事から来て居るのだわ…。

「シルベスター様。もしもですが、私がお二人を選ばずにクリシャーナ王女と同じ道を選ぶと言う事は考えた事はありますか？」

ジャンヌの言葉に、驚いたシルベスターは顔を青ざめると目を見張った。彼女（ジャンヌ）なら、あり得るかもしれないが、そのような選択だけは決してして欲しく無いと思っていた。なんせ、あのクリシャーナ王女の生まれ変わりでもあるのだから…。もしジャンヌがクリシャーナ王女と同じ道を選ぶとすれば、２人の王子は自分達を許さないだろう。

『そ、それは…ジャンヌ様の性格からして見ますと、分かりません。随分御気性が荒いようですし…。それに、クリシャーナ王女と

同じ道を選ばれますと、アウグスト様もディートリッヒ様も哀しまれます。』

目を逸らしたシルベスターに、アウグストは詰寄った。恐らく本能で感じたんだろう。一体何について、2人は話し合っているのかと言う事を。

クリシャーナ…その王女の名前が出た時に、アウグストの頭に思い浮かんだのは、『悲劇の王女』だと言う事だった。クリシャーナの父王がやってしまった大天使シェスラードへの怒りを鎮める為に、自分の命を差し出した王女だと伝えられている。

途端に愁眉な眉を顰めると振り返って隣にいるジャンヌを見た。その時の自分の顔は怖い顔をしていたのだろうか？　一瞬ジャンヌが哀しそうに微笑んでいたのをアウグストは見逃さなかった。

「オイオイ。ちょっと其処まで言わなくても良いでしょ！　私の気性が荒い事まで知ってるなんて…。大丈夫よ、同じ鉄は踏まないわ。例えそれが一番楽な方法であっても、私は逃げないから大丈夫よ。」

その場を茶化す様に明るく振る舞うジャンヌは、もし自分がこの2人の王子の内、一人を選べと言われているのに、選べなかったらクリシャーナと同じ選択をする事も少し考えていたのだ。そんな事をすれば2人共哀しむのは分かる。分かっているけど…。どうすれば良いのか…。

「あーもう！とにかく成人の儀を無事にとっとと終わらせたら、直ぐに魔石探しをすれば良いんでしょ？」

溜息をつきながらジャンヌは、2人を見ていた。

「シルベスター…。」

語尾を言いたくてもアウグスト様は言えなかった。シルベスターの慧眼な眼差しが、王子の言葉を止めさせたからだった。ジャンヌを見ても表向きは明るくしているが、あの銀の双眸が一瞬哀しく潤んでいるのをアウグストは、見逃さなかった。
アウグストは、俯いていたジャンヌを抱き締めた。

「苦しくても絶対に死などと言う道は選ばないでくれ…。ジャンヌ。」

「そうですね。クリシャーナ王女はどちらも傷つけたく無くて、死を選んだけれど、結局彼女はどちらとも傷つけてしまったもの・・。私はそんな哀しい事はしないわよ。と言うよりも、アウグスト様とディートリッヒ様がお止めになるでしょ。シルベスター様も、アウグスト様ともっとお話をなさりたいのでしょ？　でしたら、私の体を使えば宜しいのですわ。」

そう言うとジャンヌは祈る様に両手を合わせると「大天使シェスラードの名に置いて…」と唱え始めた。そんなジャンヌを止めたのは、アウグストであった。

「ジャンヌ！君の魔力はまだ完全に戻っては居ないのだぞ！　それに、シルベスターはいつも私を見てくれている。それは私自身良く知っている。だから、君はもう寝るんだ。分かったね。」

アウグストは、ジャンヌに休息の魔法をかけると、ふらついたジャンヌの体を支えた。
それを見ていたシルベスターは、微笑んでいた。

「アウグスト様も人に諭される様になられたのですね。素晴らしい

事です。本当に素晴らしい王子になられました。シルベスターはあなた様の事を誇りに思います。」

姿見の中のシルベスターが銀の砂の様に消えて行った。アウグストは自分の腕の中で眠るジャンヌを抱き締めるとジャンヌの赤く濡れた唇にそっと自分の唇を重ねた。
その場面だけを見ていた侍女達は、顔を真っ赤にして「太陽の君は、とうとうジャンヌ様の唇を奪われたのよ～」とはしゃいでいた。

だが、これは、口付けと言うよりも、魔力のチャージであった。アウグストは、軽々とジャンヌを抱き抱えると自分の寝室へ戻った。
広いキングサイズのベッドにジャンヌを寝かせるとそのまま自分も横で眠っていた。

孤独の離宮～氷の君（前書き）

残酷な描写があります。

孤独の離宮～氷の君

抜けるような青空を見ているような、そんな気分にさせてくれるこの青の離宮。

ここは、ディートリッヒにとって自分の家であり牢獄でもあった。幼い頃、ディートリッヒは、心ない臣下達の声を聞いた。それは、言葉に出しているのではなく、心の声だった。

「双児の王子は、不吉と言われているのに。どうして、王妃様は双児の内のお一人を始末しなかったのかしら？　あの予言がまだ生きていると言うのに」

「第二王子は、呪われた王子だ。忌み嫌われる王子だ」

「彼が生きているから、彼が双児として産まれたから、この世界は終わりに近づいているのだ。どうする？王妃様が出来ないのなら、我々から手を下すか？」

日中でも夜でも、ひっきりなしに聞こえて来る人々の心の声は、幼いディートリッヒを怖がらせていた。毎晩夜泣きするディートリッヒを宥めていたのは、乳母のアリエットだった。彼女からは、ディートリッヒを思いやる心しか出て来ない。

不安な夜には、いつもアリエットが幼いディートリッヒを膝に乗せ、抱き締めてくれていた。

そんな穏やかな安らぎが、ある日突然奪われてしまう事になるとは思いもしなかった。

眠れない夜にアリエットを探して、青の離宮の中を彷徨っていた。聞き慣れたアリエットの声が聞こえて来て、ディートリッヒが声を掛けようとした時に、彼は聞いてはならぬ事を聞いてしまった。

「どうして、殺さないのだ。アリエット」

「あの方は、無害です。どうかあの方に生きる希望を与えて下さい」

「どうしても出来ぬのか？　お前にディートリッヒ様を殺害する任務を与えてやったのに。お前の乳飲み子はあの方の所為で、殺されたのだぞ！お前を乳母にする為に枷になるからと言う理由だけで！　それを忘れたのか？！」

「そ…それは分かっています。私だって、あの子の事を一度たりとも忘れた事などありません」

お．．俺が産まれたから、俺がアリエットの子供を殺してしまったのか…．？

じゃあ、今までアリエットが俺に優しく接してくれていたのは、俺の為じゃなくて死んでしまった自分の子供の為だった…．。小さな乳飲み子が母親を失えば、死んでしまうのは5才の自分にも分かる。

「ですが！　オーウェン！　どうかあの方を信じて下さい！　あの方は無害です。とても純粋な方です。どうか、どうかあの方を殺めるのだけは、お止め下さい。　例え…．私達の子供があの方の誕生で殺されたのだとしても…．」

ディートリッヒはその時、初めて知ったのだった。この国では双児は忌み嫌われる存在であり、魔王の予言通りに世界が二つに分かれると言われていたからだ。その為に時の魔術師達は王子達と同時刻に産まれた男児を生け贄として殺害していたのだった。それは、国を安泰にする為であり、2人の王子が今後争う事無く過ごす為だったのだ。

それを聞いたディートリッヒは、数歩ほんの少し後ずさりをした時に、運悪く回廊に飾ってあった銀の壷に体が当たってしまった。壷は、ぐらりと揺れると音を立てて広い回廊の冷たい床に落ちるとディートリッヒの方へと転がって来た。

「誰だ!?」

「ディートリッヒ様!」

真っ青になったアリエットは、両手で口を押さえると自分の隣に立っていた夫であるオーウェンの方を振り返った。オーウェンは、攻撃態勢でディートリッヒを見ると、榛色(はしばみいろ)の双眸を涙で潤ませながら己の怒りをまだ幼いディートリッヒにぶつけて来た。

「お、お前さえ居なければ・・・! 俺達の子供は今頃スクスクと育っていたんだ!俺達の息子を返せ!」

怒り狂ったオーウェンは、王子の姿を見るなり剣を抜いて、王子に向って行った。それを見たアリエットは、移動魔術を使いディートリッヒの前に来ると王子を抱き締めた。その時、ディートリッヒが見たのは、アリエットの哀しそうな赤い瞳だった。声にならない心の声で聞こえるアリエットの心。

『王子…。私の子供の命を奪った憎い人…。でも、あなたは生きて償うのです。あなたに課せられた呪いとも言える魔王の予言を。可愛い私の王子。誰も信じてはいけません。周りは敵ばかりです。あなたのお味方になるのは、アルフレッドと彼の家族だけです。あなたは、死ぬまでご自分の罪からは逃れられません。いえ、例え死んでも・・・』

優しく微笑むアリエットは、王子の白銀の髪を撫でると「可愛い私の……あか…ちゃん」と一言だけ残して、倒れてしまった。
目の前に飛び散る赤い血飛沫は、青の離宮の廊下を赤く染めた。
幼いディートリッヒの顔にも、血飛沫がかかった。血まみれのアリエットに抱き締められた王子を発見したのは、王子の護衛であるアルフレッドだった。　オーウェンは、血が滴る剣を握ったまま立ち尽くしていた。カランと剣を手から落とすとアリエットの方へ駆け寄った。
すでにアリエットは、虫の息状態であった。青の離宮で、王子に対して刃を向ける事は、即死罪となる。アルフレッドは、王子を自分の後に隠すとアルフレッドの心の声が、ディートリッヒに聞こえて来た。

「王子。目を瞑って下さい」

そして次の瞬間「確保」と言う声と共に、オーウェンの身柄が拘束されると、オーウェンは大声で叫びながら王子を罵倒した。

「アイツの所為で、アイツさえ居なかったら、俺達は幸せに生きていたんだ！」

　そのオーウェンの言葉は、深くディートリッヒの心に消えない傷として、今もまだ残っている。後日、オーウェンは、王族に対して謀反を行ったと言う事で、処刑となった。　この事件以来、ディートリッヒは、心を閉ざす様になって行った。それは、やがてディートリッヒから子供らしい笑顔を奪ってしまった。

アルフレッドは、何とかして王子（ディートリッヒ）の事を青の離宮に仕える臣下達や侍女達に認めさせる為に、王子の教育係として自ら率先して動く事にした。

王子が挫けそうな時には、「アリエットはあなたの事を信じていたのですから、王子として皆に認められる様に努力しましょう」と励ました。

「なあ、アルフレッド・・・・。アリエットは、私と一緒に居て、幸せだったのだろうか？」

「さあ。それは私にも分かりかねません。ですが、王子の命を救ったのは、アリエットですよ。それに、彼女は王子を自分の子供の様に叱る時は叱って褒める時は褒めていたでしょう。在りもしない予言や伝説に人は翻弄させられます。それを打ち砕く為にも、王子が真の王子であると言う事を知らしめる為に、日々努力する事です」

「そうだな。」

アルフレッドの熱心な教育のお陰と、ディートリッヒ本人の努力もあって、剣術では５回に二回くらいは、アルフレッドに勝てる様になって来た。歴史学、地学、魔術、帝王学、経済学、語学とディートリッヒは、まるでスポンジの様に知識と言う泉を吸い込んで行った。

そうした彼の努力が青の離宮でも少しずつ認められる様になると、こぞって臣下達は今までの態度を１８０度変えて、ディートリッヒに近づいて来るようになった。侍女達もそうだった。

病で北の塔に入れられたアウグストの代わりに、王の隣で執務をこなす様になったディートリッヒは、自分を消そうとしていた貴族達の闇の商売を次々と暴き出した。彼らは、他にも孤児達を攫い彼らを生け贄として魔王復活の儀式をしていた事も発覚したのだった。

全ては、魔王の魅力にあやかりたいが為の事だった。

彼らの処分として、まずディートリッヒは見せしめの為に、時の侯

爵から手を付けた。　侯爵は、ディートリッヒを殺害するために、あの手この手で間者をこの青の離宮へと送り込んでいた。その事もあり、爵位剥奪となった。　当然、この侯爵と一緒に釣るんで居た他の貴族達も、厳罰のたいしょうとなり、降格させられた貴族達は、ディートリッヒを恐れる様になった。

　東の果ての国で戦争があった時に、属国を守る為、戦地に自ら赴いたディートリッヒは、無表情でバッサバッサと敵を切り倒して行った。その姿を見た味方の兵士達は、ディートリッヒの力に恐れおののいた。

決して感情を表に出さないディートリッヒ王子の事をいつしか、人々は「氷の君」または「冷酷の君」と呼ぶ様になった。

孤独の離宮～氷の君（後書き）

ディートリッヒの幼少を書いてみました。少々暗いですが、其処はご勘弁を。

孤独の離宮～太陽の君

孤独の離宮～アウグスト

金の離宮が、朝日に照らされ、辺り一面が黄金の輝きとなる時間に、アウグストがゆっくり目を覚ますと、自分の隣でスウスウ寝息を立てて寝ているジャンヌを見ていた。

ジャンヌが眠っている間、アウグストはジャンヌの金の巻き毛にそっと指を絡ませていた。髪にまでラベンダーの香りが付いている。

そう言えば、歴史書の中の悲劇の姫と語られているクリシャーナ王女は、別名「ラベンダー姫」とも呼ばれていたと記されている。

彼女の髪や体には、ラベンダーを使った物を好んで付けていたと記してある。

もし、シルベスターが言う様にジャンヌがそのラベンダー姫の生まれ変わりならば……俺かディートリッヒの内どちらかを選べと言われて、迷ってしまうだろう。

アウグストは、白く透けるような肌をしたジャンヌの手をとると、口付けをした。

青白いジャンヌの肌に少しずつであるが、精気が入って来ているようだ。呼吸（いき）を吹き込む様に精気を何度もジャンヌに入れているアウグストの姿を侍女達は、しっかりと扉の隙間からのぞいてました。

ようやく見つけた俺の光…。

どうしても手に入れたい。

例え、ディートリッヒに手をかけてでも。

もし俺がそんな事をすれば、コイツ（ジャンヌ）は俺を責めずに自分を責めるだろう。もしかすると、自分の存在自体を否定してこの世界の果てにある万年氷の世界となっているアガシの悲恋湖に身を

投げてしまうかもしれない。
あのお転婆で破天荒なジャンヌだが、あいつならやりかねない。
そうなってしまえば、また俺はこの金の離宮で孤独との戦いになるのかもしれない。
もう一人は嫌だ…。
乳母のアーリアも、この世を去ってしまい、俺に取って心を許せる者は、目の前に居る百面相が得意で、行動に多少難があるジャンヌだ。
別邸にいつものように朝の昼寝？をしに行ったら、別邸には見かけない少女が窓から王都を眺めていた。
雨が降りそうな嫌な天気だったが、少女の歌声で、風が吹き雨雲を飛ばすと太陽が出て来た。天気を操る魔術が出来るのは、この世界でも一人か2人くらいしか知らない。

（シルベスターとガゾロだけだろう。）

もっとあの少女の顔を見ようと思って、若木によじ登った時に、不安定な状態になって、地面に落ちてしまった。少女はそれを見て、薬なのだろう、それが入った小さな袋を持って、慌てて俺の所までは知って来た。

黙って、俺の頭を持ち上げ、自分の膝の上に乗せてくれた。ああ、この感触って、子供の頃にアーリアにやってもらったきりだな。懐かしい・・・。ついついウトウトと眠ってしまった。
あの後で、あの少女がジャンヌだと分かって俺は、嬉しくてつい言ってしまったのだ。
そして、ジャンヌがどうして俺の心を見透かす事が出来るのかを知りたかった。

「ジャンヌを金の離宮に住まわせたい」

それは、妻として迎えたいと言う意志表示である。　ディートリッヒも同じような思いだったようだ。
久しぶりにアイツと目から火花を散らせる勝負が出来る。
ジャンヌと言う商品を賭けて。
だが、父王レゼンドは、ジャンヌに聞いて来た。
「もし、お主が伴侶を選べるとしたらどちらが良いか？」と。
ジャンヌにこの国の未来が託される。

シルベスター・・・・・俺はどうすれば良いんだ？

ジャンヌの成人の日まで後５ヶ月と３週間。

孤独の闇～　ジャンヌ　前編　（改）

ジャンヌの成人の日まで後5ヶ月と3週間。
それまでに、ジャンヌにダンスをキッチリ出来る様にさせないとな…。
ダンスだけでなく、たまには馬を使って遠乗りにでも出かけてみるか。　何かと閉鎖的なこの王宮では、ジャンヌのように天真爛漫に生きて来た者に取って、苦痛の場所にしかならないだろう。
王家の森にそう言えば、ラベンダーが一面に咲いている場所があったな…。昼は、其処にでもジャンヌを連れて行くか。　ジャンヌを起こす前に、侍女がやって来て、「アウグスト様。ジャンヌ様。朝食の用意が出来ましたが、どうなさいますか？」その言葉に、目を冷ましたジャンヌは、目の前にアウグストの顔が近づいていたのに気がついた。
ジャンヌは知らなかったのだが、今朝までアウグストの上着を掴んで離さなかったのは、なんとジャンヌだった。　見知らぬ離宮の王子の部屋で寝ていると言うのもあったのだろう。ジャンヌは時折夢に魘される様に顔を顰めたりしていた。ジャンヌは、繰り返し繰り返しまるで終わりの無い夢の様に何度もクリシャーナ王女の夢を見ていた。
アウグストが、ゆっくりとベットから抜け出ようとすると、ジャンヌの白い腕に掴まれて泣いて自分に縋って来た。
「行かないで…」
その様子は、部屋の外に居た侍女達にしっかりと見られていた。
そして翌朝、目覚めたジャンヌの隣には上半身裸のアウグスト王子を見て、わなわなと震え出すと思わず王子の顔をグーで殴った。
「痴漢！　変態！」

と叫ぶジャンヌの声と共に、バキッ！と言う鈍い音が王子の寝室に響いた。
ジャンヌの拳がアウグストの顎に見事に当たり、アッパーカットが決まった！　アウグストの体は、弧を描く様にベッドの上から床の上へと落とされた。
ベットの上では、ジャンヌが自分の寝着を握りしめたまま、黄金の右腕を天に向かって拳を突き上げていた。
朝から床とご対面しているアウグストは、侍女達から温かい眼で見られている。ジャンヌは、自分の洋服が寝着になっているのを見ると涙眼で言って来た。

「アウグスト様～！　あなたって人は！　私を襲ったのですか！？」

顎を殴られたアウグストは、床に座ったまま赤くなった顎を押さえながら首を横に振っていた。それを見ていた侍女達は、クスクスと笑うと「ジャンヌ様。それは、私達が致しました。今から湯浴みをして頂きますので、アウグスト様は、別のお部屋へ移動をお願い致します」

3、４人の侍女達に連れられて、浴場へと行くと、あれよあれよと言う間に寝着を脱がされ、縺れていた髪を丹念に揉みほぐしてもらい、ジャンヌはされるが侭になっていた。
此処までの人数でやってもらうのは、初めてのジャンヌはびっくりするやら、恥ずかしいやらで顔を真っ赤にしていた。縺れやすい髪も侍女達の魔法の様な手付きで、滑る様に滑らかになって行く。
骨まで蕩けそうってこんな事を言うんだ・・などと考えていたジャンヌだった。　さり気なく、侍女達の手付きを見ながら、シャンプーの量はどの位使うのだろうかとチェックしていた。　自分や、マーさを基準にすれば、１００％とまでは行かないが、間違っている

のだろうと自覚したいたからだ。　侍女達が自分の髪に使っているシャンプーの量を見て、驚きを隠せなかった。
シャンプーってこんなに使っても良いのね～。　す、すごいわ！
泡が立つ立つ～。　マーサにやってもらうと泡は全く立たない。それどころか、髪を泡立てる度にギシギシいっているのが、指の感覚からでも、分かる位である。
あら、コンディショナーまでも、こんなにこんもりと使うんだわ。
　まさに目から鱗である。
只単に、ジャンヌ達が節約と言うかミミッチイだけなのだろう。
別邸に帰ったら、早速マーサに教えないと…。多分マーサの事だから、「勿体ないでございます！」と言って来るに違いないわ。そんな事を考えながら、ジャンヌはどうしてアウグスト王子が上半身裸だったのかを考え始めた。

「まあ、ジャンヌ様の御髪は、本当に金を纏ったようでございますわ。お肌も透ける様に白くて、艶やかで。でも、拳で殿方を殴るのは、お止めになった方が宜しいですわ。」

やんわりと嗜まれているジャンヌは、アウグストを殴ってしまった自分の黄金の右手を見ていた。指が真っ赤になっている。思いっきりやってしまった証拠だ。
湯船につかりながら、ジャンヌは侍女達に恥ずかしそうに聞いて来た。

「やはり、謝らないといけませんよね？　アウグスト様にあんなに酷い事を言ってしまったのだし…　それにしても、どうしてアウグスト様は、上半身裸だったんでしょうか？」

侍女達は顔を見合わせると、コソコソとジャンヌに耳打ちをした。
ジャンヌが、昨夜すごく魘(うな)されていて、その間ずっとアウグスト様

が、ジャンヌの手を握っていたのだ。　ほんの少しでもアウグスト様がジャンヌから離れようとすると幼子の様に『行かないで』と言いながら、王子の寝着を握りしめていたと言う事だった。
話を聞いているだけで、こっちが恥ずかしくて顔が、茹で蛸状態で真っ赤になって来てしまった。

「まあ！ジャンヌ様。湯当たりをされてしまったのですね。さあさ、こちらへ」

まさか、湯当たりではなくて、実はあなた達の説明が詳し過ぎて倒れそうになりましたなんて言えない・・・。
どうして此処まで詳しいのだろうと思ったら、侍女の皆様ってば、アウグスト様が自分の寝室に女性を連れ込んだ事自体、初めての事だから、つい覗き見していたそうだ。
恥ずかしさのあまり、真っ赤な顔をして湯船に顔の半分程付けて反省しているジャンヌを見た、侍女達はクスクスと笑い出した。真っ赤になりながらも、ジャンヌもつられてクスクスと笑い始めた。

「ジャンヌ様は笑顔の方が良いですよ。それにアウグスト様は、怒ってはいらっしゃいませんよ。多分拗ねていらっしゃるかもしれませんが……」

自分が言ったあの『変態　痴漢』と言う言葉に傷ついたのかも知れない…。
ゴシゴシと擦り付けられる様に洗われているのだが、マーサにやられるよりもずっと心地よい。風を起こす為の魔石がブラシの中に嵌められている。それで濡れた髪も綺麗に梳かされながら、乾いて行く。　このブラシを使うといつもよりも、カールがきつめになっている。濡れると腰まである髪が、肩の肩胛骨の所までと言う状態になるのは、本当に久しぶりだ。

男爵家に居た頃は、徹底的に節約志向だったから、石鹸で全てを洗っていたから髪も縺れやすくなっていたんだろうな…。

恐らく、日が落ちる頃には、いつもの長さに戻るのだろう…。

今日は外に出るのだろうか？　いつもの絹のドレープがかかっている重たいドレスよりも、軽い木綿のドレスを着せてもらった。心無しか、ドレスの丈も短い。いつもなら、足首まで来ているドレスを着ているが、今日のは、膝下１０?くらいの長さで、歩きやすい。青のドレスに白いレースが入ったエプロンを着せてもらい、ジャンヌは姿見の前でくるりとターンした。フワリと舞い上がるドレスの裾からは、ペチコートがチラッと見える。

鏡を見ていたジャンヌは、いきなりフラッシュバックの様に昨夜見た夢の出来事が見えて来た。

湯浴みをしたばかりだと言うのに、脂汗まで掻いて来た。ゆっくりと姿見の前から立ち去ったジャンヌは、自分でも気がつかなかったのだ。

自分の変化に…。一体夢の中でジャンヌを怖がらせる何があったのだろうか…。

鏡の中からジャンヌを見ていた大天使シェスラードは、寝室への扉に向って歩いて行くジャンヌをじっと見ていた。

孤独の闇～　ジャンヌ　後編

侍女達が寝室への扉を開けると、其処にはアウグストがジャンヌを待っていた。
どうやら、朝食はこの部屋で食べるらしい。リコの実が入ったパンにサブラーと言う果実のジャムを塗って食べる。リコの実は木の実でとても栄養価が高く、腹持ちも良い。フルーツサラダを食べているとジャンヌは、目の前にいるアウグストの顔を見て、思わず目を逸らしていた。

「どうしたんだ？　ジャンヌ？　大人しいな」

「……さい」

「ん？」

「さっきは、酷い事を言ってごめんなさい…。皆から聞いたの。昨日の夜、私が夢に魘されていて、アウグスト様を離さなかったんだって。それに、私に精気を送り込む為にやってくれた事も……聞いたわ。　あ、ありがとう。」

お腹もいっぱいになり、食べ残してしまった物をジャンヌは綺麗にナプキンで包んでいると、侍女の一人が篭を持って来てくれた。
そこにサンドウィッチにして置けば、また腹が減った時に食べれると思っていたジャンヌだった。
そんなジャンヌを見て、アウグストは『今日は馬を使って遠乗りに出かけよう。ジャンヌ。魔法は明日まで禁止だ。」

「う…」

ジャンヌだって、魔法禁止の理由位分かっているが、週末の二日間を魔法無しで過ごせとは、酷い……。そう思っていた。

昼前にサンドウィッチとシャギー酒が入ったボトルを入れて2人は、離宮を出ると既に馬が二頭用意してあった。

「ジャンヌ。馬には乗れるのかい？」

「いいえ。まだ乗った事は無いですが……多分乗れると思います」

男爵家に居た頃、馬に乗りたいと何度か母親と口論になったのだが、母親は頑としてジャンヌに乗馬を教える事はしなかった。母親のジャックリーンは、もしジャンヌが乗馬を嗜めば、もっと遠い所まで行ってしまうのは眼に見えて明かだと思ったからこそ、敢えてジャンヌには乗馬を教えなかったのだ。

怖々と馬に近づくジャンヌだったが、頭の中に声が聞こえて来た。

『あんたが怖がっていてどうすんのさ。銀の双眸を持つお嬢さん。いつか、魔王を倒しに行くんだろ？そのためにも私の背に乗りな。』

じっとジャンヌの瞳を見ている馬の瞳は大きくそして、優しく光った。馬はジャンヌに軽くお辞儀をして来た。

ジャンヌは、あの声の持ち主はこの馬だったんだと分かると、銀の瞳を細めてにっこり笑った。馬は、早く乗れと言わんばかりに頭を動かしている。しかし、馬の背は高くどんなにジャンヌが足を上げても乗れる訳が無い。しょげそうになったジャンヌは、自分の体が宙に浮くのを感じた。アウグストがジャンヌの腰を持ち上げると、鞍の上に乗せてくれた。ジャンヌ自身空を魔術で飛んだ事はないので、普段よりも高い所から見る景色は、とても新鮮に思える。

丈の短いドレスと言う事もあって、股がるのではなく横座りで馬に乗っていたので、馬の方も比較的ゆっくりと歩み始めた。

途中、腰とお尻が痛くなったジャンヌは、馬の耳に囁く様に言う。

「ねえ。ドレスを脱ぎたいから止まってくれる？」

『は？面白いお嬢さんだ。良いだろう』

馬が止まると、ジャンヌは馬の背から下りようとしたが、足を挫いていた事を忘れていた。そこで、アウグストを呼んで下ろしてもらうと、ドレスを脱いで、ペチコート姿になると「アウグスト様。馬に乗せて下さいな」そう言うとトマトの様に真っ赤な顔をしているアウグストの顔を不思議そうに見ながらも、彼の手を自分の腰に置かせて、馬の背に乗せてもらった。

「ジャンヌ…。お前、羞恥心とかないのか？」

「何ですか？それ？」

「その…お前は今、下着姿なんだぞ。それに俺は男だ」

「分かっていますよ。男だと言う事位」

「ならば、それは俺を誘っているのか？」

「はぁ？　誘うって、何を誘うのですか？」

「つまり…だ。その、男と女の関係と言う事だ」

「別に考えた事などありませんが。どうしてですか？」

「ならば、何故　そのような格好をするのだ」

「ドレスだと乗りにくいし、それにホーキンから落ちるよりもマシです。本当ならば、魔法で衣装を変えたかったのですが、魔法は禁止だと言われたので、このようにしたまでです。私も気にしてませんから、アウグスト様も気にしないで下さい」

そう言うと、ジャンヌは微笑んでいた。

気にするなと言われても、目の前に下着姿のジャンヌが居るのだから、気になるに決まっているだろう。一体コイツは何を言いたいん

だ？　ダメだコイツに一般常識を求めていたら、俺の方が絶対に禿げるか、棺桶に片足を突っ込む事になりそうだ。それくらい長い時間かけてコイツに説明しなければならないかと思うと、アウグストはジャンヌの好きにさせればそれで済むし、此処は王家の森ー王家の者以外、何人たりとも立ち入りは許されない土地だ。なら、こっちも余計な心配をしなくても済むと言う結論に出た。

「ジャンヌ。さっきも言っていたが、ホーキンズとは一体？」

「この馬の名前です。私が勝手に付けちゃいました。ね、ホーキン」

『まぁ、良かろう。馬馬と呼ばれるよりも、名を付けられた方がまだマシだからな』

ホーキンは、ジャンヌの方を向くと軽く嘶いた。

ジャンヌが脱いだドレスは、アウグストが魔術で亜空間を作ると其処へ入れた。ちなみにバスケットも其処に入っている。

鬱蒼と木々が生い茂っている森を抜けると目の前には、小高い丘があった。其処に広がるのは、一面の紫色の絨毯。　ラベンダー草だった。

それを見たジャンヌは、目を輝かせた。

アウグストがジャンヌの腰を支えながら、馬から下ろす。辺り一面のラベンダー草を見渡したジャンヌは深呼吸をしている。頬も心無しか紅潮しているようだ。

銀色の双眸に、映えるように映るラベンダー色が、とても綺麗だ。

アウグストは、馬達をその辺の木陰に休ませると、手綱を木の幹に縛っておいた。

そして、お昼の準備をする為に、亜空間から敷物とバスケットを出していた。

「とても素敵だわ。初めて来たのに、何だか懐かしいの」

初めて来たと言っているが、でも懐かしいのか…。此処は、その昔

ー太古に栄えたこの世界の王が治めていた城の城跡だ。城壁も何もかももうない。ただここに在るのは、ラベンダー姫と呼ばれたクリシャーナが愛したラベンダー草が咲き乱れているだけだ。
亜空間からドレスを出したアウグストは、ジャンヌにドレスを着せると「腹の虫が鳴いておるぞ。さあ、昼にしよう。」そう言うとジャンヌの手を取り、敷物の所まで案内した。

「アウグスト様。此処は何処なんですか？」

「此処か…。太古に栄えていたこの世界の王が治めていた城だ。大天使シェスラードの怒りに振れ、全てを無くしてしまったがな。」

その時に、丘の上に人が立っているのを見た2人は、驚いていた。
此処は王家の森。何人たりとも入る事は許されない土地に誰がどうやって此処に降って湧いた様に現れたのだろうか？
ジャンヌを抱き寄せ、移動魔術で丘の上に降り立ったアウグストは、その人を見てもっと驚いていた。
この城を怒りに任せ塵とさせた張本人である大天使シェスラードだったからだ。ジャンヌに歩み寄った彼は、ジャンヌの頬をそっと撫でると『クリシャーナ…。』と呟いた。
ジャンヌは困ってしまったが、ただ笑顔を大天使シェスラードに見せた。

『違う…。クリシャーナは、もっと優雅に微笑んでくれていた』

彼は（シェスラード）不躾にもそう言って来た。
それを聞いたアウグストは、ププッと吹き出して笑っていた。
アウグストの笑いにも頭に来ていたけれど、この抜けぬけと言って来る大天使にムカッと来たジャンヌは、仏頂面で大天使シェスラードの手を自分の頬から剥がすと、銀の双眸で彼を睨んでいた。

「何かさっきから、ムカつく事ばかり言ってくれるじゃないのよ！
人違いなんだから！　悪かったわね、クリシャーナ王女みたいに優雅じゃなくって！」

本当はそう言いたかった。だけど言えなかった。哀しそうにジャンヌに微笑みながら目の前に佇んでいる大天使シェスラードを前にして、どうして怒っていられるのか・・・。彼自身、本当はクリシャーナ王女に会いたかったのだろう。だから此処に舞い降りて来たのだ。

ジャンヌはそっと大天使シェスラードを抱き締めた。
フワリと舞うラベンダーの香りがジャンヌの髪から香る。
『お前の望みは何だ？』
召還魔法の時と同じ事を聞いて来る大天使シェスラードに、ジャンヌは苦笑した。
頭を振るとジャンヌは大天使シェスラードを見て「私の望みは何もないわ」そう言うと優しく微笑んだ。
彼自身（シェスラード）、愛する人を亡くして天界と地上を彷徨っている。
そんなあなたに人の望みを聞いている暇など在る訳無いでしょ。心の中でそう呟くジャンヌにシェスラードは、苦笑しながらも懐かしそうにジャンヌの顔を見ている。
首を傾げるジャンヌは、願いと言われて、其処まで願う事は無いが・・・。ただ、夜は一人になりたく無い・・・・・。
ジャンヌはアウグスト王子には言っていなかったが、此処の王都に着いて以来、悪夢に魘されているのだ。その所為で自分の寝不足も解消されないし、眠りに着くのが怖くなってしまう程、恐れてしまった。
たかが夢。だから、誰にも言えない・・・。苦笑しながらもジャンヌは気丈に答える。

「何度聞かれても、私には、何もないの。何も」

そう、夢も希望も何もない・・・。ただ、今やる事をするだけ。

『それは、そうだったな。だが、ジャンヌよ。もし助けが必要になれば、我の名を呼べ。お前だけが我に付けれる名前だ』そうジャンヌに言うとシェスラードは、小さな猫になった。

「名前ね～」

考えているジャンヌは、猫の背をそっと撫でていた。白い毛並みをした綺麗な猫には、長い尻尾が生えている。まるで雪の精霊の様なそんな感じ…。小さな丸い顔に少し幅が広い鼻筋、そして何とも言えない程に少し丸くて可愛い耳・・・・・。なんて可愛いのかしら・・・。泣き声も可愛い子猫の様に鳴いている。紫色の瞳がとても綺麗で吸い込まれそうだわ。

ジャンヌが迷っている時に、大ジージの意識が出て来た。（おお～まるで雪豹のようじゃ。スノーの中に埋もれてしまったら、見分けが付かなくなるかもな…。）

そんな大ジージの声がジャンヌの頭に響いて来た。

「スノー。何だか知らないけど、私の中の誰かが、あなたを見て、雪豹のようだからって言っていたの。綺麗な白い色だわ」

『スノーか…。また同じ名になるとはな…』

スノーを抱っこするとアウグストの側へ行き、一緒にサンドウィッチを食べていた。アウグストの視線は、ずっとジャンヌに抱っこされているスノーに目が行っている。

アウグストは、シルベスターが猫になった時の事を思い出していた

が、その時よりもこの猫はデカイ！　絶対猫ではない筈だ。そう思って、何度かジャンヌに、そう言っていたが、ジャンヌは笑いながらスノーの前足を持って、アウグストに話しかける様に遊んでいる。

「ジャンヌ…それって絶対猫じゃないよ。ほぼ、雪豹に間違いない。こんなに手足が大きな猫が居る訳無いだろう？　でも、ジャガーよりは短足だな」

「私ね、猫でも雪豹でもどっちでも構わないの。私を守ってくれるって分かっているから。（今度こそ、いつまでも一緒に居てくれるって知っているから。）」

ヌイグルミの様に抱き締められているスノーを見て、アウグストは、これが大天使シェスラードの仮の姿とはな．．．と呆れていた。すると、いきなりスノーの尻尾で、頭を叩かれたアウグスト。

「オイ！　ジャンヌ！　ちゃんと躾けろよ！　尻尾で人を殴って来るんだからな。痛いじゃないか！」

抗議するが、ジャンヌはそんなことは聞こえないようで、スノーをさっきから抱き締めている。

「スノー！　ダメでしょ！　アウグスト様にそんなことしちゃダメなのよ」

スノーに優しく怒るジャンヌだったが、白くてまるっこい耳が足れて、尻尾も後ろ足の間に入れてしまったスノーは、瞑らな紫色の瞳でジャンヌを見ていた。ここまで可愛くごめんなさいをされてしまうと、ジャンヌも強く言えずにギュッと抱き締めて「スノー大好き」と言う程だ。アウグストが亜空間から出して来たこの世界の地理や

歴史書をジャンヌに開いてみせると、魔術で分かりやすく一ページごとに歴史上の人物やその時代に起こった事を立体的に見せていた。

「ねえ。アウグスト王子・・」

「別にアウグストで良いよ。ジャンヌは俺の妃になるのだから。って、何するんだ！この雪豹！」

アウグストに嫉妬したスノーは、猫パンチをアウグストの両頬に食らわせたのだ。アウグストの両頬には、綺麗にスノーの引っ掻き傷が残っている。
この時ばかりは、ジャンヌもスノーに怒っていた。

「スノー。ヤキモチ焼いているのは分かるけど。人にそんな事をしてはイケナイのよ」

渋々であるが、アウグストの両頬をザラザラの舌で舐めて来るスノー。　スノーが舐めた箇所は全て傷が塞がった。するとスノーの中から声が聞こえる「これで良いだろう。怪我も無くなったんだしな」
ジャンヌは苦笑しながらも、城へとスノーを連れて帰る事にした。
ホーキンがスノーを見ると暴れるかも知れないから、ジャンヌはスノーを篭の中に入れて持って行く事にした。
アウグストは、「亜空間の中にでも入れて置けば、揺れる事も無かろう。」等と言っていたが、ジャンヌは「スノーは赤ちゃんなんだもの。可哀想だわ」そう言って篭から出して、抱き締めているのだ。

孤独の闇～　ジャンヌ　後編（後書き）

沢山の方に読んで頂き、有り難うございます。
猫派のＫｎｉｇｈｔ　ｂｕｇは、雪豹大好きです。あの丸っこい顔に少しグレーの瞳が、最高です。プニプニ肉球を触りたいって思っちゃいます。
食べられちゃうかも知れないけど．．．。

夢の中へ？

昼間の楽しい遠乗りから帰って来たアウグスト王子とジャンヌは、周囲の者からしてみればとても親密そうに見えているようだ。
アウグストが住むこの金の離宮にもう一晩泊まることになっているジャンヌは、白い離宮が太陽の光で金色に変わるのを見て、驚いていた。
驚いているジャンヌに、アウグストがにっこり笑いながら説明してくれた。

「元々は、この離宮は一人娘の為だけに立てられた離宮だったんだよ。だけど、その姫が我が侭だったらしくてね。散財し放題やってくれちゃって、その時の王政の予算まで食い尽くす勢いだったらしいよ。」

「ふ～ん、よく一揆とか起きなかったわね。」

「起きましたよ。その時の王がこの金の離宮に貼ってあった緊迫を全て剥がさせて、民の為に尽くすと言う事を見せてくれたんですよ。それまで、薬師達は皆　貴族や豪農とか大きな庄屋の所でしか診察してくれなかったんだが、金の離宮に使われていた金ぱくを使って、各街や村に薬師を置ける様に予算を回してくれたんだよ。まあ、それで一揆も沈静化してくれたんだよ。この離宮の呼び名は、その時の名残だな。」

「夕日に映えるこの離宮は、まさしく黄金の離宮に見えるわ。まるであなた（アウグスト）の髪の様に綺麗。」

そんな事を言いながらも、今夜もこの金の離宮に泊まる事になった

ジャンヌは、太陽が沈んで行くのを見て表情を強ばらせた。
ダメだ…。未だ怖いあの夢をみてしまうかもしれない。そう思っていた時に、篭の中から声が聞こえた。

『大丈夫か?ジャンヌ…?』

スノーがジャンヌの不安をいち早く察知して聞いて来た。
あんな夢さえ立て続けに見なければ…こんなに怖がるような事は無いのに…。震える手でスノーを抱き締めたジャンヌは、弱々しい笑顔を作りながら沈み行く太陽を見ていた。

昨夜は王子の寝室で寝ていたが、今夜はその寝室の隣にある客室寝室で寝る事になったジャンヌ。ベッドの側にあるソファーでジャンヌとアウグスト王子が横に並んで諏訪って話をしている。今日2人が遠乗りに出かけた祈りの丘の事を歴史書で調べたりしていた。寝る直前まで、本を読んだりアウグストとたわいもない話をしたりしていたが、徐々に瞼が重くなり、持っていた本を床に落としていた。
スノーがジャンヌの膝の上に乗っていたが、アウグストはジャンヌを抱き上げるとスノーは、大人しくジャンヌの膝から床へと下りた。起こさない様に、ジャンヌをベッドに移した後、シーツとブランケットを彼女にかけた。

「スノー。ジャンヌは、どうして夜を怖がるんだ?」

『お前は、それを聞いてどうする? ジャンヌを守れるのか?』

「守りたいから、知りたいんだ。」

『それなら、もう一人の王子を此処に呼べ。さすれば、話してやろ

う。』

「…．分かった。今、青の離宮に使いを出す。」

一刻後、青の離宮からディートリッヒとその護衛であるアルフレッドを伴ってやって来た。

コンコン

少し大人しめのノックの音に、アウグストは、読みかけの本をパタンと軽く閉じた。

「入れ。」

アルフレッドが扉を開けると、後から白銀の髪をした我が双児の弟ーディートリッヒが入って来た。ジャンヌが金の離宮で二晩目を過ごしていると聞いて、難色を示していたディートリッヒだったが、兄であるアウグストからジャンヌの事で話があるから、至急金の離宮に来てくれと言う彼(アウグスト)に取っては珍しいくらいに慌てているのだろうか？

「兄上。ジャンヌの事で話があると聞きましたが、一体なんでしょうか？」

アウグストは、ソファに同席する様に、ポンポンと自分の隣のシートを軽く叩いた。

促されるままに兄の隣に座ったディートリッヒは、ソファーの目の前に置かれている猫足のテーブルの上に、奇妙な動物がチョコンと座っているのを見て驚いた。

「兄上！これは、雪豹ではないですか！　例え兄でもこれは大罪になりますよ！」

この世界では、雪豹と言う動物は神の使いと言われている神聖な生

き物。それを獲ったり、飼ったりする事は、即ち神を侮辱していると言う意味とされ、神自らの罰が下るのだ。

「この雪豹は、ジャンヌのだ。そして、雪豹自らジャンヌと契約をしたのだ。」

「契約ですか？」

「ああ。それに、俺がジャンヌの事で聞きたい事があってな、それをこの雪豹に訪ねたら、お前も此処に呼べば内容を話すと言って来たんで、お前にも来てもらったんだ。では、スノーよ話してくれ。どうしてジャンヌは夜を怖がるのか。」

スノーの体から白い煙が出て来ると、大きな人影に変化して行った。
大天使シェスラードだった。シェスラードは、ジャンヌの側に寄ると指で空間に円を描いた。
すると、雲のようなものがジャンヌの耳から出て来るとシェスラードは顎で入れと言わんばかりに2人に合図を送った。
ディートリッヒは、チラッとアルフレッドの方を見ると、彼は右手を胸に置くと騎士式のお辞儀をした。

「大丈夫です。私は此処で皆様のお帰りとジャンヌ様の身を守りますので、お二方は安心して行ってらっしゃいませ」

「うむ。では、行って来る。くれぐれもジャンヌを起こさぬ様に頼むぞ」

「はい」

2人の王子達がシェスラード共にジャンヌの夢の中へと消えて行っ

た。

夢の中へ？

荒涼とした風景が目の前に広がっている。空は、暗雲が立ちこめて、地はダストデビルが舞っている。（竜巻ほど大きくは無いが、大きな旋風である。）足下を見れば、草木は何も生えておらず、皹割れた土からは歩く度に土埃が舞うだけである。

「此処は、一体何処なんだ？」

アウグストが、眉を顰めながら土埃が口や鼻に入らない様に、魔術でマントを出すとマントの裾で鼻と口を押さえながら話しかけて来た。

「さあ？　俺もこんな所に来たのは初めてと言うか、人の夢の中に入ったこと自体が初めてなんだよね。だけどさ、もしジャンヌに俺達が勝手にアイツの夢の中に入って、夢の中身を体験して来たなんて知れたら……」

「叩かれるどころじゃないかもな…。特にアイツ（ジャンヌ）のアッパーカットは、凄いからそこん所覚悟しといた方がいいかもな」

ブーツで乾燥した大地を踏みしめて歩いている3人は、小高い丘へと辿り着いた。
その丘へと続く道なき獣道を歩いて行くと、アウグストが足を止めた。
ふと、考え込むアウグストが後を振り向いた時に、あっと叫んだ。

「どうして…。此処に俺達を連れて来たんですか？　大天使シェスラード様！」

「どうしたんだよ！　俺に分かる様に教えろよ！兄上！」

苦々しく舌打ちをしながら、丘の周りを見渡したアウグストは、地面に片膝を着くと枯れた土を手で掘ると何かに取り憑かれた様に、一心不乱に何かを探し始めた。

土埃が辺り一面に舞い上がるのをディートリッヒは、黙って見ていたが、やがて自分も…と言うと、アウグストの横で同じ様に枯れた土を穿り返していた。

アウグストの指先に何やら、枯れた花らしき物に触れると、それを大事そうに両手で持ち上げた。枯れて色は変色しているが、香りは微かだが分かる。

「やはり…。此処は、ラベンダー草が咲き乱れていたあの『祈りの丘』だったのか」

「祈りの丘？　だが、何故ラベンダー草がないのだ？」

ディートリッヒが聞いて来たが、アウグストは、天を仰いだ。歴史書の通りならば、此処にあの欲深い王が治めていた城が在る筈だ。だが、城の瓦礫も何もない。ただの枯れた大地だ。所々に硝煙が立ち上っている。

この世の地獄とも言える不毛の大地を見た2人は、同時に大天使シェスラードを見据えた。

もしかして、ジャンヌの夢の中は大天使シェスラードがクリシャーナ王女を失った後、悲しみのあまりに彼女が愛していたこの城、そしてこの世界の一部を焦土化した後のことなのか。

大天使シェスラードは、眉間に皺を寄せるとただ黙って黙々と前を歩き出した。

彼の後を2人の王子達が着いて行くと、小高い丘の上で何かが光っ

ていた。温かい波動を感じた2人は、顔を見合わせると急いで丘の上へと走って行った。何度か魔術で移動魔法を使ってみようとしたが、何故かこのジャンヌの夢の世界では魔法が使えないのだ。

夢の中で？　史実と事実（前書き）

残酷な表現が入っています。

夢の中で？　史実と事実

岩が幾つも重なって出来た小さな穴の中から、その光の波動は来ていた。切り立った純度の高いクリスタルの中には、蒼い魔石と赤い魔石、そして緑の魔石が入っていた。その三つの魔石を柄に治めた一本の剣があった。
柄には呪文が彫ってあり、『二つの力一つになりし時、我目覚めん』と記してある。王子達は、顔を見合わせると大天使シェスラードに一体どう言う事なのだと聞き出した。

「お前達は、歴史でクリシャーナ王女の事をどう習ったのだ？」

2人は顔を見合わせて、何故今更そんな事を聞いてくるのだろうかいう様な顔をして居た。

「クリシャーナ王女ですか？　そうですね」

2人は言い難そうにシェスラードの顔を見ていた。

「大天使・・・あなたの怒りをかった父親の代わりに、自分の命を差し出したと教えられました。悲劇の姫君と語り継がれています」

大天使シェスラードの手がクリスタルに触れると、無色だったクリスタルが蒼く光り出すとある風景を映し出した。

「事実はいつも闇に葬られるのだな」

意外なシェスラードの言葉に驚いた2人は身を乗り出した。

「どういう事ですか？　あなたの言い方では、史実は事実と異なると言いたいのですか？」

「ああ。そういう事になるな。話すよりも見た方がいいだろう。こんな風に」

岩が幾つも重なって出来た小さな穴の中から、その光の波動は来ていた。切り立った純度の高いクリスタルの中には、蒼い魔石と赤い魔石、そして緑の魔石が入っていた。その三つの魔石を柄に治めた一本の剣があった。

柄には呪文が彫ってあり、『二つの力一つになりし時、我目覚めん』と記してある。王子達は、顔を見合わせると大天使シェスラードに一体どう言う事なのだと聞き出した。

大天使シェスラードは、クリスタルに封印されてしまった魔剣を愛おしそうに愛でると、２人に歴史書には書かれていない真実を見せる事にした。

大天使シェスラードの手がクリスタルに触れると、無色だったクリスタルが蒼く光り出すとある風景を映し出した。

それは、クリシャーナ王女が産まれる以前の出来事だった。欲深い王は、自分の勢力を広げる為に全世界を手中に治めんと戦をし始めた。

初めの方は王の優勢だったが、他の小さな国々は互いに同盟を結び始めた為に、戦もとうとう劣勢になって来た。その時、あの欲深い王は隣の国に居たサラティーナ王女を攫って来ると側室として、子供を作らせたのだ。

その王女の家系は、代々金髪に銀色の瞳の子供が産まれると何でも願いが叶うと言う言い伝えがあったのだ。

それに目を付けた欲深い王は、自分の子供をその王女に産ませた。しかも思惑通りに金髪に銀色の双眸の子供が産まれるまでずっと。

側室との間に3人目の子供が出来た時に、ようやく王の願い通りの銀髪に金の双眸の娘が産まれた。見目麗しいその姫を王はとても可愛がった。
この王には妻達の間に6人の子供が産まれた。4男2女だった。
6人のうち、1人は途中で原因不明の流行病で死んだ。
2人はクリスタルに映る子供の姿が二人しか居ない事に気づく。

「シェスラード様。王子達が居ませんが、彼等はどうなったのですか?」

「・・・あの王自ら、王子たちを生け贄にしたのだ。お前達も知って居るであろう悪名高き王の名を」

「「フレデリック　クルイド三世・・・」」

歴史の教科書にも彼の名は残っている。一介の騎士だった男が生国の皇女と恋に落ち、その後王となった。だが、彼の戦は凄まじかった。フレデリックに寄って攻め落とされた国々は、例え王侯貴族であろうとも、奴隷同然の扱いだったと歴史書には記してあった。
眉を顰めたアウグスト王子とディートリッヒ王子はクリスタルを見つめていた。

「「生け贄・・・何故ですか?」」

「何故、創世記の時代に神が創造しなかった、“魔王”が　どうしてフレデリック王の時代に突如として出現したのか分かるか?」

そう言われて見れば、創世記より前の時代には、魔王は存在しなか

った。そうなると答えは推理せずとも自然と出て来るもの。

「「まさか・・自分の力を強大な物にせんが為に、無垢な王子達を・・・まさか、そうなると魔王はフレデリック王自身となる・・・・・・じゃあ、クリシャーナ王女は・・」」

「本来ならば、王子だったのだよ。だが、サラティーナ皇女はクリシャーナと名付けて、女として育てたのだ。もし、父王にクリシャーナが王子だと知られたら、これ迄の王子達と同じ様に生け贄としてフレデリック王に殺されるのは、目に見えていたからな。しかも、最高の生け贄に」

願いが叶うと云われる金の髪に銀眼・・・・・

夢の中で？　史実と事実（後書き）

始めに投稿していた物とは、違う物を書いてみました。

夢の中へ？

母親は、カリーとクリシャーナの手を取り弱々しい声で、娘2人に諭していた。

「あなた達の父様は欲深い方です。決してあなた達2人を手放さないでしょう。もしも、あなた達に心から好きな男性が現れたら、その方と一緒にこの城から逃げるのです」

カリーはそれを聞いても、肩をすくめて母親を見ているだけだった。

「お父様には誰も敵わないのですよ。例え、大天使シェスラードが戦いに挑んで来ても、お父様の狡賢い戦い方には赤子の手を捻るような物です。お母様もその様な戯れ言は言わずに、諦めた方がよろしくてよ」

カリーは言いたい事だけ口にすると皇太后の寝室から出て行った。クリシャーナは、カリーが部屋から出て行った後、母親に縋り付くと大きな銀の瞳を潤ませないて居た。

小さな剣をクリシャーナに手渡した母親は、自分の魔力の全てをクリシャーナに注いだ。薄れ行く意識の中で、母親は微笑みながら旅立った。

「逃げなさい。クリシャーナ。あなたは何があっても逃げるのです。今度こそ殺されてしまいます。カリーは、魔王と契約を結んだんです。だからクリシャーナ、あなたは早く逃げなさい…．遠くへ」

それが母親の最後の言葉だった。

勇者がこの大国に押し寄せる度に、王の機嫌は其処ぶる良かった。魔王の勢力がこの世界の平和を脅かしいた頃、父王は世界中の勇者達に魔王討伐をすれば何でも好きな物を渡すと言い出した。でも、多くの勇者達がこの城を出て行ったきり、帰って来た者を見た住人は誰も居ない。恐らくクリシャーナの母親であるサラティーナは、知っていたのだろう。何故魔王の力が急に巨大になったのかを。

そんな時に、旅の勇者がフラリとこの王の城へとやって来た。その勇者の醜い顔に王やカリーは眉を顰めていたが、クリシャーナだけは笑顔で迎えていた。鼻は低く目は腫れぼったく小さい上に、顔中にできものの痕が残っているこの男には、何やら底知れぬ神性なる力を感じた。

クリシャーナは他の勇者とは全く違う彼の態度にとても好感を持った。今までの勇者達は姿形ばかり気にし過ぎていて、馬に乗る時でさえも汚れない様にお上品に乗っていたのだ。

カリーは、そんな勇者達を魔王が住むと言われる魔の谷まで連れて行く。カリー自身、勇者が来る度に、顔が整って来ていた。

「ジェスと申します」

ジェスが魔王討伐に行く朝、城の南門でクリシャーナはジェスに全てを告白した。

自分が男である事も、そして今までの勇者達が帰って来なかったのは、魔王の魔力の糧として食われてしまったからだと。それを手伝っていたのは、自分の姉であるカリーだと言う事を。

「このまま逃げて下さい！あなたも他の勇者達と同じ様に殺されてしまいます。」

「私は、あなたを自由にするためになら戦います。」

其処まで言って来るジェスに、クリシャーナは勇者に母親の形見である小さな剣をジェスに渡すと、ジェスは優しく微笑んでそれを受け取った。
魔王討伐から帰って来た時、クリシャーナは涙を流しながら、彼を労った。

「お怪我はございませんでしたか？」

ジェスに心を惹かれていたクリシャーナは、何度もジェスに言う。

「どうか、私と一緒にこの城から逃げて下さい。父は、欲深い方です。」

咳をしている父王が、すんなりと自分とジェスとの婚儀を許した時は、天にも昇る気持ちだったが、クリシャーナは、その夜　塔に幽閉されると自分の身を恨んだ。ようやくクリシャーナが出された時には、彼が龍の持つ水晶玉を取りに行けば自分との結婚を許すとの事だった。クリシャーナは、ジェスに「父は私を決して手放さない。だから、もう行かないで下さい。私は、あなたを失いたく無い」と涙ながらに引き止めるが、ジェスは彼女
クリシャーナ
と結ばれる事を夢見て旅立った。
画像の場面は変わり、勇者であるジェスが城に帰って来た所を写し始めた。

　そこには、倒した筈の魔王が玉座に座っていた。　人の闇を吸い取るような黒く大きな目が大きく見開く。　右の腕が刀でざっくりと切られたのだろう。魔王の肘から下が無かった。大きく開かれた口からは、黒い小さな霧が出て来る。その霧は、ジェスの体に巻き

付くとカマイタチのように、彼の体を切り刻んで行った。黒い霧がさっと消えた後には、ボロボロのジェスの体が血まみれになって大広間の床に転がっていた。それを見たクリシャーナは、両手で口を覆うと嗚咽し、彼の亡骸に縋り付いて泣いていた。

ジェスの体から出て来た大天使シェスラードは、眉間に皺を寄せ怒りをあらわにすると、魔王の前に立った。

クリシャーナは、自分の短剣を床から拾うと呪文を唱え始めた。

眩い閃光を放った彼女の体から、三色の魔石が出て来ると剣に自分の命の命でもある魔石の力を注ぐと小さな短剣は魔王封じの魔剣へと姿を変えた。

魔王と化したフレデレリック王の前には、クリシャーナが魔剣を構えると、空気が切れた。切れた空気の欠片がダイアモンドダストとなって、魔王が持っていた水晶玉を破壊した。

「母様とジェスの仇！」

クリシャーナは、魔王の胸に飛びかかると魔剣を振り下ろした。魔剣に寄って斬られた所から、どす黒い霧と今まで魔王が吸って来た勇者達の魂が黒の塊となって、ボトリボトリと音を立てる様に、床に落ちて来る。

「史実では、大天使シェスラードが魔王を倒し、クリシャーナ王女があなたを助ける為に自害したと出ていた…」

魔王の体から黒い塊が全て出て行ってしまった後、白骨化したフレデレリック王の遺体が大広間の真ん中で倒れていた。

魔剣に自分の命の全てを注いだクリシャーナの手が少しずつ薄れて行く。それは、彼女の魂が魔剣を作る為に吸い取られたのだ。大天使シェスラードの前で徐々に霞んで行く彼女の体は、次第に霧となって消えて行った。

床に転がっていた魔剣から、三つの石が飛び出すと空の彼方へと飛んで行った。

シェスラードが剣に近づくと、それはただの短剣に戻っていた。
「こ、こんな事があったのか…」
この荒涼とした大地の彼方から悲鳴に似た叫びが聞こえて来る。
「魔剣の記憶が蘇っているのだよ。ジャンヌは生きる魔剣。魔王と戦った時に魔剣が受けた傷ーそれが彼女の悪夢となって出て来ているのだろう。あの様に」
シェスラードが指差す先には、魔剣の中にジャンヌが入っていた。

夢の中へ？

蒼く光る魔剣の中で、小さく踞っているジャンヌは、時折苦しそうに泣き叫んでいる。

「魔剣の記憶って…」

『魔王に吸われた勇者達の魂を天に返す為に、ああやって自分の中に一旦取り込めてから、一つ一つ天へと魂を送っているんだ。あれは、彼女しか出来ない。魔剣の力を持つ者の宿命なんだよ』

一体どれだけの数の勇者達が、あの魔王の犠牲になって行ったのだろうか。両腕を胸の前に交差して一つ光る物を出すと、瞼を閉じているジャンヌの目から涙が一筋溢れて行く。

「私が弱かったから…　あなたは、自分の子供の成長も見る事も無く魔王に生きながら嬲られる様に魂を抜かれて行った。どんなに悔しかった事でしょう…．今から、奥さんやお子さん達が待つ天国へと導きます。」

クリスタルの中に入っている魔剣から白く丸い球が、ふわりふわりと空中に浮かんで来ると、それが人の形となって来た。
ゴルゴの戦士だったようだ。ゴルゴは、西の果てにある国で身長が大人でも１６０ｃｍしかない低身長で、ズングリムックリしているが、異様に鼻が利くのが特徴である。彼らの武器は１ｍは在ろうかと思われる程大きな鎖鎌である。
その勇者を彼の家族と思われる二つの白い球が迎えに来た。
家族と何世紀もの間、ずっと離ればなれになっていたのだろう。漸く家族に巡り会えたゴルゴの戦士は、ニッコリ微笑むと家族と一緒

に天へと上って行った。

暗雲が立ちこめていた空も少しずつ雲が切れて来た。それに気がついた大天使シェスラードは、２人の腕を引っ張りジャンヌの夢の中から引きずり出した。

２人が倒れる様に金の離宮にある客室の床で折り重なる様に突っ伏していたアウグストとディートリッヒは、魔法がまるで使えない不便なジャンヌの夢の世界で普段は決して使う事が無かった体力を使い果たし、今此処でダウンしている。

２人の頭の中では、魔剣の中に閉じ込められていたジャンヌが言っていた言葉が頭の中でリフレインしている。

「いつまでこんな事を続けなきゃいけないの…？　好きでこんな力を持って産まれて来た訳じゃないのに…」

小さく踞って自分の両膝を抱え込んで泣いているジャンヌ。

蒼い魔石が意志を持つかの様に光るとジャンヌに呼びかけて来る。

『生きる魔剣ー我を集めよ。半分に欠けてしまった蒼の魔石を見つける事が出来れば、次の魔石を見つける手がかりを掴める』

涙で濡れた銀の双眸は、蒼く光る石を見つめて不思議そうな顔をしている。

「どうして私が見つけなきゃならないのよ。何故、私がそんな役目を引き受けなきゃならないわけ？　私には、関係ない。私はただの男爵家の娘だし、そんな力は無い…」

蒼の魔石は、波を打つ様に光を波動にしてジャンヌと話している。

温かいぬくもりに包まれるような、そんな感覚をジャンヌに与えている。

『魔石が揃えば、魔剣が出来る。それは今までの魔王に寄って吸い尽くされた魂が天に返る事を意味するのだ。だが、それも魔王が復活する前に魔剣が出来ればの話だがな。お前の力は、まだ小さい。魔力を持て、さすれば魔石がお前を呼ぶだろう』

魔力…。ジャンヌは自分の魔力が不安定である事しか知らない。一体自分にどれだけの魔力が備わっているのかさえ、知ろうとも思わなかった。

そもそも、自分は、薬師として生きて行くのだとずっと思っていたからだ。

明日からの魔術の時間は気合いを入れて行かないといけないのか…。

魔石の光が小さく消えてなくなると、ジャンヌはゆっくりと瞼を開いた。

ぼやける視界は、少しずつ形を成して行く。2人の心配そうな顔が目に入って来た。

「アウグスト様・・それにディートリッヒ様…。どうして此処に？」

両目を擦りながら、2人を見つめるジャンヌ。ジャンヌの長い金髪の端で遊ぶ様に戯れ付くスノーにガブリと指を甘噛みされ、少し涙目になっているジャンヌ。

2人とも服装が、まるで旅人の様に埃っぽい。まるで私の夢の中みたい…。まさかね。

王子達は、クスリと笑いながら、「洗浄」と一言呟くと彼らの服から砂埃が全て消えて行った。

レッスン二週間目　前編

この日の朝、ジャンヌは魔法学校の渡り廊下を走って王宮廷魔術師長のガゾロが待つ教室へと急いでいた。本当なら、ガゾロの授業は昼過ぎからなのだが、魔法郵便で届いた手紙がジャンヌの所に届いた。

手紙を広げると音声で読み上げてくれる。『王宮廷魔術師長ガゾロ様からのジャンヌ様への急ぎの手紙です。本日の授業変更知らせ～朝一番に魔法の授業をします。遅れない様に来て下さい』

金の離宮から魔法学校の校舎まで、普通に歩けば一時間はかかってしまう。それを魔法無しで移動する様にとガゾロやアウグスト様から言われているジャンヌは、朝から長いドレスの端を両手で持ち上げると走って魔法学校へと向った。

アウグストが看病してくれたお陰で、酷く捻っていた足首も普通に走れるくらいにまで回復していた。息が上がって来て、ジャンヌは木陰に隠れると、移動魔術しようと神経を集中していた。

「まさか、移動魔術をやろうなんて考えていないよね？　魔法は禁止だと言った筈だぞ」

その時にアウグストが、ジャンヌが隠れていた木陰を見つけてニッコリ笑って来た。彼の笑顔の下では、何を言っているのか良く分かる。

（あれほど、忠告したはずだ。何で魔法を使おうとする）

この人って、こんなキャラでしたっけ?ジャンヌがビクついていると、アウグストは溜息まじりでジャンヌの手を取るとそっと手の甲に口付けをした。

アウグストの唇が触れた所は、少しピンク色に光っている。

「一体、何をしたの？」

「君が隠れて魔法を使えば、僕に分かる様にしたのさ。ただし、授業以外でね。まあ、今日は特別僕が連れて行ってあげるよ。もう、時間がないからね」

アウグストに手を握られ、驚いているジャンヌは、彼が瞬時に移動魔術を使ってジャンヌをガゾロが待つ教室まで連れて行った。

この日のガゾロの服装は、先週までの彼の服装とは異なっていた。まるで何処かへ旅立つようなそんな服装である。

普段はマントを羽織、その下に紺のドレープがかかった服を着て居るのに、今朝の彼は獅子麝香の樹で作られた杖と白い三角帽子に白いマントを羽織っていた。

何で白い服を着て居るの？それって、何処かにお呼ばれとか招待された時に着ていく服装よね…？

それに、いつまで経ってもアウグストは、この教室から出ようとしない。それにも不信感が募る。何？私だけ知らない事？それに、後一人誰か此処に居るような気がしてならない。

ジャンヌの腕に抱かれていたスノーは、軽やかに床に下りた。スノーを見たガゾロは、一瞬顔を強ばらせたが、じっとスノーを見ていた。

「ジャンヌ様。どうして雪豹の子供がジャンヌ様と一緒に居るのですか？　雪豹は聖なる生き物だと先週も教えましたが、お忘れになったのですか？」

そうこの世界では、雪豹は神獣とも言われ、それを飼う事は、神を愚弄すると言われたい罪になる。ただし、それは雪豹を捕まえて飼うと言う事で。しかし、雪豹自身が人間と一度契約をし、その者を

守護する事もある。それは稀な事。

「ええ。習いましたが…。でも、この雪豹に名前を付けろって言われたんです。」

「名前ですか?!」

雪豹自身、自尊心が高く人に従う事などないし、ましてや人間から名を付けられることなど殆どない。だが、彼女の無垢で純粋さに、この雪豹が惹かれたのなら分かる。

「わかりました。では、本題に入りましょう。実は今日の魔法の授業を早くしてもらったのには、訳がございまして…。私ガゾロが、半年程この王宮には帰って来れません。魔術師協会の会議やら、講義やらが他の国でありますので…。で、それで私の代わりとしまして、ディートリッヒ王子にジャンヌ様の授業を見て頂く事になりました。彼は、とても優秀な魔術師でして、教員免許も既に持っておられます。私は、そろそろ迎えの雲が参りましたので、これにて失礼致します。では、ディートリッヒ王子。頼みましたよ」

いきなり何も無かった空間から、突如として現れたディートリッヒ王子は、悪戯好きな笑顔でジャンヌに笑いかけていた。

「どう?驚いてくれた?」

「ええ。とっても」

「じゃあ、授業を始めよう。先ずは基礎の基礎からするよ。ジャンヌ、そんな嫌な顔はしないの!君の場合　基礎がなってないのに、いきなり高等魔術とかするから倒れるんだって。だから、今は基礎を身につける事が大事だ。分かったね」

はいはい…。どーせ私は先週何も知らずに魔法を使い過ぎて倒れましたよーだ。

「先ず、ここに両足を…そう肩幅くらいに開いて、両手に気を集めるんだよ。自分の気と地面の気、そして周りの大気の気を少しずつ貰うんだ。初めは大きなボールくらいになるから、それを魔力で丸くする。マーブルくらいの小さな粒にしてごらん。これが基本だよ」

言われた通りに両足を肩幅くらいに開いて、色々な所から気を少しずつ貰って両方の手の中には引き千切られた綿のような物が畝っている。それを丸める為に１０本の指先に神経を集中させて、ようやく歪ではあるが丸っぽい物が出来た。しかも、ビーチボールの大きさだ。

今度は、それをマーブルくらいにまで小さく、そして丸くするのだ。額に汗を掻きながらもゆっくりと撫でる様に魔力を練り込んで行く。ようやく野球ボールと同じ位の大きさになった時にプシュ～と空気が抜けて、ヘナヘナになってしまった物体。

「ジャンヌ。其処までは上手にできたんだけどね。ちょっと気を抜いたでしょ？ジャンヌは、筋が良いから、直ぐに出来る様になるよ。じゃあ、もう一度やってみて」

この基本動作を何度も何度もやるうちに、ようやくマーブルくらいの小さな粒が出来る様になった。達成感と言うよりも殆ど意地だ。

「じゃあ、これを元にした物で自分専用の水晶玉を作ってみよう。これは高等魔術なんだよ。ジャンヌなら直ぐに出来るよ。ほら、こんな風にやってご覧」

いかにも簡単そうに魔術で水晶玉を作り出すディートリッヒ。しかも、色がついたり中には華が入っていたりと多種多様な物だった。この日の授業では、中々上手く自分専用の水晶玉を作り出す事は出来なかった。

銀の双眸を潤ませながら、悔しそうに楕円形の水晶玉を手にしたジャンヌは自分の魔力のなさに哀しくなった。

「ジャンヌ。誰もがそんなに直ぐに上手になる事なんて無いんだ。実際僕やアウグストだって、初めっから水晶玉さえも上手く作れなかったんだよ。だから泣く事はない。それに、殆どの者が丸く作れないんだ。それは、不安があるからね。先ず心を無にすることから始めるんだ。そうすれば、ジャンヌのことだから、すぐにでも水晶玉を作れる様になるよ。ただし、この魔法をする時は僕の前でやる事。練習にしてもそうだ。でないと、また倒れるよ」

何度も水晶玉を作ったせいか、ジャンヌの体が痺れて来ている。足にも力が入らず、震えて来てる。この魔法ってこんなに体力を奪う物なの？驚いた様にディートリッヒを見つめる。

「君なら簡単な魔法ならすぐにクリアしてしまうからね。基礎編と上級編を織り交ぜてみたのさ。そうすれば、君が飽きる事もないだろう？」

ディートリッヒに自分の性格まで見抜かれているなんて・・・悔しそうに俯くジャンヌは、溜息をつきながらも、教室を後にした。この後の授業は、歴史、マナー、馬術、ダンスの順になっている。溜息が出そうだが、ここまで体力を使う魔法は、初めてだ。負けたく無い！痛む膝を撫でながら、次の教室へと急いだ。

レッスン二週間目　後編

こ、腰が痛い・・・。腰だけじゃない、全身の筋肉が悲鳴をあげている。この一週間ずっと水晶玉を作る魔術をやっているが、中々出来ない。出来たと思っても、直ぐに割れたり、楕円になったり挙げ句の果てはスイスチーズの様に、穴ポコだらけの物が出来る時もある。　それを見たディートリッヒは、「そう言う物を作る方が、本当はもっと難しいのだがな・・・」と苦笑している。

イライラが募って来たジャンヌは、泣き崩れた。どんなに頑張っても無理な物は無理だと子供の様に声を上げて泣いていた。

家の為に成人の儀を受けないといけない・・その思いだけで突き進んでいたが、もうプツンと糸が切れてしまった。

ディートリッヒから言われた言葉に酷く傷ついてしまった。

「ジャンヌ。じゃあ、水晶玉の方は君の調子次第でと言う事で、今日からは、浮力の魔術をしよう。さあ、立ってごらん。こんな風に」

ディートリッヒに促される様に、その場に立ったジャンヌは、自分の足下が濡れている事に気がついた。

ーいつの間に・・ディートリッヒが魔術で魔法指導教室の床全体を泉にしてしまったのだ。指導教室の中にある棚や机などは、ディートリッヒの魔術で浮力しているし、水も弾き飛ばしている。

立てと言われて、階段を一段上る様に、右足で水面を踏む。少しだけ浮いている。

今度は、左足も・・・と思い、左足に集中し過ぎて、今度はひっくり返ってしまった。

バッシャ〜ン！！

ドレスも髪も水に濡れている。何度も何度もやってみるが、両足揃えて浮力するのが難しかった。

どうして出来ないのだろう・・？　落ち込むジャンヌにディートリッヒが真剣な顔をして言って来る。

「ジャンヌ。お前さ～魔力は有り余ってんだから、それを上手く使いこなさないと。これくらいの魔術なら、魔法学校に通っている８才の子でも出来るんだぜ。そいつらに出来てなんでジャンヌに出来ないかな？」

「８才の子供に出来るのか？」

「ああ。これは、浮力魔術の基本だからだ」

「基本・・・・」

泉の上に立つ浮力の魔術・・・・。
何度も何度も、転んでしまった。仕舞には、ドレスも水浸しになってしまうほど。
どうして、魔力が有り余っているのなら、簡単に出来ないのだろう？
８才の子供に出来るような基礎魔術が、どうして私には出来ないんだ？
哀しくて、悔しくて水に落ちた時に泣いてしまった。

「・・・たい・・」

「え？ジャンヌ何て言ったの？」

「・・・もう、止めたいの！　魔法も成人の儀も、何もかも！私を自由にさせてよ！」

其処まで怒ってディートリッヒに言ってしまった。

八つ当たりだと分かっている。だけど、自分の能力の限界もあるんだから・・・。泣きながら、ジャンヌは「転移」と一言呟くと掻き消す様に魔法指導教室から消えて行った。

ジャンヌが消えてしまった後、ディートリッヒは頭を掻きながら、指導教室の床にかけた魔術を解いた。床一面にあった泉は、消えて元の冷たい石畳に変わった。

「ジャンヌは、自分の魔力をコントロール出来てないから、出来る物と出来ないものが在るんだよな・・・。それを調べている最中なのにさ・・・あのお転婆娘め。また倒れでもしたら、アウグストに俺が怒られるじゃないか！」

溜息をつきながらも、床に散らばった魔術の教科書を拾い集めていた。ジャンヌだって一生懸命にやっているのは知っている。だが、彼女に早く浮力の術を覚えてもらわないと困るのだ。

あの夢ージャンヌの夢の中で見たもう一つの蒼い魔石は、幻と呼ばれる泉にある。　其処に行くには丸二日間もの間ずっと浮力魔術を使って、泉の中心までいかなければ成らない。ただ、この泉には曰くがある。泉の主と呼ばれるダンテに認められなければ、泉の底に沈められてしまうのだ。

焦ってしまう自分の気持ちが、ジャンヌにも伝わってしまったのだろう・・・・。再び、ディートリッヒは頭を掻いていた。

早くあの術を完成させなければ・・・。

その頃ジャンヌは、魔術を使って転移した。　此処は王宮内でも一番落ち着ける場所である。

木々が生い茂る中庭に、空間が歪む。芝生に降り立ったジャンヌは、自分のドレスや髪が未だ濡れているのに気がついた。
人差し指を立てると「乾燥」その一言で、髪はふんわりとした巻き毛に、ドレスも皺一つもなく綺麗になっている。
（こんな、魔法が出来ても・・・・浮力の術さえ出来ないなんて・・・）
銀の双眸からボロボロと流れ落ちる涙は、虹色に光っていた。
本当は、これから魔術の授業だけど、もう受ける気がしない。それにやる気も起きない。
ジャンヌは、王宮の中庭で魔法を使うと隠れてしまった。
魔術は禁止と言われていたが、もう限界だった。
苦手なダンスのレッスン、そして今は魔術自体も苦手となってしまった。
膝を抱えて泣き出しているジャンヌを見つけたアウグストは、結界の中に入ろうとするが、やめてしまった。今　中に自分が入ってしまえば、簡単だ。だが、それではジャンヌの為にはならない。
今は、ただジャンヌに時間を与えるしかないのかも知れない。

アウグストは、芝生の上に座るとゴロリと寝転がった。
風が、アウグストの金髪を撫でているようだ。
ジャンヌは、三角座りをして膝を抱えて考えていた。今までの事、そしてこれからの事。私の意志ではなくこの世界の掟で受けなければならない成人の儀。

初めは、両親も私の事を心配してくれていたけど、レゼンド王自ら私の後見人となってくれることになったから、父様も母様も反対する事が出来なくなった。
だけど、私は知っている・・・・。
父様が、本当は喜んでいる事を。本当は私の成人の儀を楽しみに

していたって事を私は知っている。だけど、長老様の予言が予言だけに、父様は成人の儀の事を言わなくなって行った。
その長老様から私だけに言って来た言葉は、予言ではなかった。

『眼に見える物だけが真実じゃない。感じなさい。心を配りなさい。人を愛しなさい。自分を愛し、自分の力を認めてあげなさい』

長老様にその言葉を言われた時、私は真っ赤な顔をしてただ下を向いていた。

「出来ません・・・。こんなバケモノみたいな力なんて、欲しく無かった・・・・。ただの娘で居たかった」

泣き出した私を抱き締めて慰めてくれたのは、いつも長老様だった。
それだけ蒼の魔石の力は強く、幼い自分でも屋敷の者達から、腫れ物を触るような感じで扱われている事を知っていた。
6才の頃ー私が、死にかけていた子鹿を助けたのを見ていた父様が青い顔をしていた。
私は、その時何も知らなかった。蘇生魔術は魔術の中でも上級者しか使う事が出来ない。それをたった6才のジャンヌは子鹿を助けたいと願っただけで、簡単に出来てしまったのだ。
父様が、ジャンヌに近づくと褒めてもらえると思っていたのに、父ベンジャミンが言ったのは、あの言葉だった。

『ま、まさか・・・・・どうして神様はそんな惨い事を私の娘にされたんだ・・・』

その言葉を聞いた時に、ジャンヌは自分の力は父様や母様を哀しませる力なのだと言う事に気付いてしまった。

その夜、父様が母様と話している声を聞いた時は、哀しかった。

『どうして、あの子だけがあんな途轍もない魔力をもってしまったのだ・・・。やはり長老様の予言はあたってしまった。銀の双眸と言うだけで、もうあの子への縁談の話が、来ている・・・しかも、相手は伯爵家だ・・・』

『あ、あなた・・・伯爵家って、もしかしてバトラー伯爵なの？』

『ああ。成人の儀が終わり次第、結婚したいと言って来たよ』

『そんな・・・』

『だから、もう決めたんだ。ジャンヌは、成人の儀を受けさせない・・・。それしかあの子を守る事は出来ないと・・・』

父様が泣いていた。母様も泣いていた。

私の魔力が2人を苦しめているんだと知った時、本当に哀しかった。父様は、自分の得意なダンスをジャンヌに教える事など無かったし、ジャンヌも父様の決心を知っていたから、何も聞かなかった。全ては、自分の希有な銀の双眸の所為だ。

その時、風の声が聞こえた。

「泣かないで・・・。怖がらないで・・・・」

風だけじゃない。中庭にある樹木達からも聞こえる声。

「ジャンヌ・・・昔みたいに楽しく魔法で遊ぼう。キラキラ玉を作った時の事を思い出して」

芝生からも声が聞こえる。

「またいつもみたいに、魔法で楽しく遊ぼう」

いつからだろう・・・あんなに楽しかった魔法や魔術が嫌いになって行ったのは。

多分、あの夢を見る様になってからだ。

零れ落ちる涙を拭くと、ジャンヌは結界を解除させた。

「アウグスト様・・・・大丈夫ですから、もう。行って下さい」

アウグストの大きな手が、ジャンヌの頭を撫でて来る。

何か言われるのかと思ってしまった。

「僕は、君の瞳は綺麗だし、好きだよ。僕の孤独を分かってくれたのは、ジャンヌだけだったからね。僕としては、ずっと側に居て欲しいな・・だめ？」

優しいアウグストの大きな手がジャンヌの頬を撫でる。

気持ち良い・・・。ずっと一人で背負って来た希有な瞳に蒼い魔石の力で、ジャンヌは自信を無くしていた。

子供でも出来る魔術が自分には出来なくて、蘇生魔術は簡単に出来てしまった。これって矛盾している。

そんな考えをずっと頭の中で巡らせていると、ジャンヌはいつの間にか百面相をしていたらしい。

アウグストから、抱き締められた。

「どうしたの？　さっきから、難しい顔をしたり、泣いたり、思い出した様に微笑んだりって、ジャンヌ・・君って本当に、素直だし

可愛いね。君の魔力が不安定なのは、ジャンヌ自身がその魔法を必要だと思っていないからなんじゃないのかい？」

「私自身が必要だと思っていないって・・・」

「君の思考は、タダ漏れの様に僕の中に入って来るからね・・・６才の頃に蘇生魔術をやったって言っているけど、その時はその子鹿を助けたかったんだろ？」

コクリと頷くジャンヌにアウグストは、言葉を続けた。

「それは、君が心から助けたいと願ったからだよ。浮力魔術は、海の上や幻の泉の上を渡る時に使うのさ。水面すれすれから見える海は、気持ち良いんだよ。僕としては、一緒に海に連れて行きたいけど、何なら今から行くかい？今日のダンスの練習は浜辺でやればいいし。どう？」

「海？それって、何？　私何も知らないの。だって、私は自分の領地から出た事なんて一度も無いから・・・・あ、でも一度だけあったわ。ディートリッヒ様を助けた時だけ。でも、行ってみたい。海を見てみたい。海って何色なの？お水なの？」

アウグストは、ジャンヌの手を取ると、移動魔術で海へと出た。七色の虹の色の砂、そして海の色はエメラルドグリーンだ。大きく深呼吸をしたジャンヌは、ケホケホと咳をした。

「大丈夫？」

「うん。大丈夫。ちょっとビックリしただけよ。海の香りって初めてだったから、ビックリしたの。ねぇ、アウグスト様は浮力魔術と

か出来るの？」

「ああ。一緒にやってみるかい？　だけど、海に落ちたらもっとビックリするだろうな。」

「どうして？」

「海水の味に驚くからさ。」

「どんな味なのかしら？　ウフ・・・落ちてみたい・・・」

ニッコリ笑ったジャンヌにアウグストが手を差し出すと、行くよと一言呟くとそっと波打ち際へ向った。階段を上る様に一段一段そっと上り詰める。少し不安な表情をしていたジャンヌにアウグストは、そっとジャンヌの頬に口付けをした。

「頭で考えてはいけないんだ。体で感じてごらん。ジャンヌ、君は海を見たかったんだろう？」

コクリと頷くと「なら、答えは簡単さ」茶目っ気たっぷりのアウグストの笑顔に、ジャンヌも肩の力を抜いた。
浮力魔術を習う様になってから、全然上手く水面の上で浮く事が出来なかったのに、今日・・・と言うか今は出来ている。溢れるような笑顔でジャンヌが水面の上を踊っている。途中ふらついていたが、海に落ちる事は無かった。
念願の海の水を両手ですくって口にするジャンヌは、あまりのしょっぱさに顔を顰めた。

「しょっぱい！どうして、海の水ってこんなに塩辛いの？」

アウグストはただ笑っていた。この海の味は君の涙の味だと、いつか分かるのだろうか・・・？フレデレリック王の時代では、海はなかった。ただ何処までも果てしなく続く大陸があっただけ。だが、伝説のクリシャーナ王女が流した悲しみの涙が陸を覆いやがて海になったと言えば、ジャンヌは悲しみだろう・・・・。自分と同じ希有な瞳を持つ者として・・・。

「さあね？　どうしてだろう？」

「ねえ・・・・アウグスト様・・・誘って頂いて嬉しかった」

「そう。良かった。君の場合は習うより慣れろの方だな」

「え？」

「だってさ、子供の時の事も、僕とあった時に使っていた魔術も全て上級者でも、一握りの人間しか使えない魔術なんだよ。ジャンヌはそれを心で思い描く事で出来るのさ。例えば、今日みたいにディートリッヒの授業で上手く浮力の魔術が出来なかったんだろ？」

「ええ。出来ませんでした。哀しくて、イライラしちゃって・・・もう、魔術も成人の儀も止めてやるって言っちゃいました」

「そうだったね、だけどさっきは出来ただろう？　それは君が心から海を見たい。海の上を歩きたいと願ったからだよ。水晶玉も君が願えばすぐに出来るさ。それに水晶玉は、真実を写すと言われているんだから、知りたい事悩んでいる事を知る為に人は、自分専用の水晶玉を作るんだよ。作れない人は、他の人のを使っちゃうけどね」

「真実・・・？」

知りたい・・どうして自分があの胸が苦しくなるような荒れ果てた大地に、居なきゃいけないのか。その理由を知りたい・・・。

「そう。真実だよ。　君なら出来るさ。何て言ったって、僕の本当の笑顔を引き出してくれた人なんだから」

踊ろう・・・そう言われて、ステップを思い出しながら、２人で踊っていた。

虹色の砂浜には、同じ様にある男女の足跡。

もう少しだけ頑張ってみよう・・。少しだけ前向きになってきたジャンヌだった。

異変　（改）

遥か北の国　ラグーニでは、奇妙な事件が立て続けに起こっていた。
そんな事件を耳にすれば、彼はいつも率先して動いていた。何しろ彼は王宮廷魔術師長だからだ。例え世界の果てと言われるラグーニで起こった些細な事件でも、見逃してしまえば、後々厄介なことになってしまうからだ。
それを彼は欲知っている。
ダストデビルと呼ばれる旋風が剥き出しの岩肌を舐める様に削って行く。
砂塵を巻き上げて行く旋風を視界の端に捕えていたガゾロは、ゆっくりと革袋の水を口に含んでいた。

「嫌な風だ。それに変な地鳴りのような音も聞こえて来るが・・・？」

足下の小石達が踊っている様に動き出す。それを確認したガゾロは、ヒラリとトゥダに股がると「は！は！」とかけ声をあげながらトゥダを全力疾走させた。
トゥダは、主に太古から砂漠や荒野での移動時に使われる動物で、ラクダに似ているが気性は荒く無く、従順だ。ラクダと違うのは、背中のコブはあっても、二本足であると言う事だ。前足と呼ばれる物には、砂漠のような強い日光から地肌を護る為の特別な羽毛が生えている。ダチョウの様に飛べない鳥に見えるのだが、翼は広げると鷹や鷲と同じ様に大きな翼を持っている。トゥダは、非常時になると、この翼を使って数十キロ先まで優々と飛んで行く。
　トゥダは、そもそも野生の動物である。
王宮廷魔術師と言う位にもなれば、自分専用のトゥダを一頭は必ず所有している。

このトゥダを所有すると言うのは、すなわち野生のトゥダを拿捕し、契約を結ぶのだ。いくら気性は荒く無いと言っても、いきなり拿捕されれば、暴れるのは当たり前だ。

トゥダは、自分と同じ・・・いや、それ以上の魔力を持った者としか契約はしない。たまに野生のトゥダを拿捕する際に、契約に失敗して命を落とす魔術師もいるのだ。契約の仕方は、トゥダの首筋にある一本の長い毛に自分の魔力紡いだ紐を合わせるのだ。野生のトゥダを支配する為に繋ぐ紐は、三つめの目から出される。それは、額の中央に位置する所から出てくる太い紐状の物だ。

初めは、異常気象から来る不作だとか言われていた。

しかし、それだけではない今まで発生する事が無かった、虫鯨が大発生した。これこそが、異常気象である。

虫鯨とは（バッタよりも大きく陸上、水上で生息する虫。カマキリのように大きな鎌を持っている。現代のイナゴと似ているが、色は黒く腹には鯨のような白い筋のように見える線があることから、虫鯨と呼ばれる）

この虫鯨が、異常発生したのは今回だけではない。　太古の昔にも以上発生していた。その後、魔王の手下が黒い霧を使って地上を覆い、町や村を次々と呑み込むと、霧は消えて行ったと古文書には書いてあるのだ。

霧が晴れた後には、廃墟と化した国ラグーニが残っていた。それはまるで古文書に書いてあった通りの事柄と同じ事がこの国で起こってしまったのだ。

其処には、辛うじて建っている家屋やこの北の大地を治めていた貴族の城さえも、石垣だけが残っているだけだった。

風塵が舞い、洗濯物を干していたのであろうカラカラと洗濯バサミが竿に絡まりクルクルと回っている。元々は綺麗に洗われて白くなっていた筈のシーツやタオルも、風塵で所々茶色に染まっている。

「また……街が一つ消えた……」

異変？

「まさかとは思っては来てはみたが・・・・・やはり遅かったか・・・」

ガゾロは、眉間に深く皺を寄せると目の前に広がる廃墟となった街を見ていた。
木も草も何もないただ、瓦礫だけがこの土地を覆い尽くす場所だった。風が吹く度に、砂塵と一緒になって虫鯨の死骸が粉となって舞い上がる。

ここは、ガゾロの親友であるガンマが住んでいる街なのだ。本来ならば、彼も今回の魔術師教会の会合に出席する筈だったのだが、此処半年程連絡が取れなかったのだ。

もしやと思い、足を運んでみれば、彼が居た街は崩壊していた。建物からは、原型を留める事無く壁だけが辛うじて残っているのが多かった。そしてそれらからは鼻を劈くような異臭が出ていた。その異臭は、街を襲ったと思われる大量の虫鯨の死骸から出るものであった。

風塵を避ける様に、奇妙なマスクを被った老人が、トゥダと言うラクダに似た動物に股がると朽ち果てた街の中に入って行った。
周りを見渡しても、人っ子一人いやしない。家屋の屋根は半分以上剥げ落ちている。
街の入り口近くに残っていた家と見られる所に入った老人は、奇妙なマスクを顔に付けている。そうでもしないとこの風塵を少し吸ってしまうだけで、呼吸器官が腐ってしまうのだ。この風塵の原因は、虫鯨の死骸である。

無人の廃墟となった家の中に入った彼は、砂の中から一つの人形を取り出した。
この家に住んでいた子供が遊んでいた物なのだろう。赤い毛糸を髪の毛にみたてて作られている人形には、顔や胴体の部分を布で作ってあった。藍色の瞳は、トゥダの爪から採れるボタンで作られている。
トゥダの爪は、生え変わる度に古い物がポロリと落ちる。取れてしまった古い爪は、加工されてボタンやビーズなどの装飾品へと変わる。この北の果ての土地では、そのトゥダの爪を使った加工が盛んであった。トゥダは、その昔乱獲されて、絶滅危惧種となった事が在り、トゥダの乱獲を止めさせたのがレゼンド王の曾祖父であるリチャード王であった。トゥダの数も昔の様に増え始めた時にトゥダを移動手段としてだけ使う事を許したのが、レゼンド王
老人がその人形を砂から取り出すと、中に入っていた綿が抜け落ち、その中からも虫鯨の死骸が溢れ出る様に、彼の足下に落ちて来た。
建物から出た老人は、外を見渡すと、目を潤ませていた。

異変？　廃墟の街

老人は、貴族が住んでいたと思われる小高い丘にある石垣までトゥダに乗って行った。三本の大きな爪を持つトゥダは、階段の名残と思われる石段を三段飛ばしで、ヒョイヒョイと上がって行く。
石段を上り切った後、そこに広がるのは一面灰色の世界だった。所々に辛うじて建っている壁が残っているのが分かる。あちらこちらに転がっているのは、もう既に動かなくなった魔導師の騎士達の鎧と衣服が灰と化した砂に半分埋もれていた。

「何て事だ・・・」

この街に住んでいた魔導師達は、ガゾロやガンマの愛弟子達であった。ガゾロは、彼らが着衣していたであろう魔導師の礼服をそっと砂塵の中から取り出した。魔導師の礼服には、それぞれ自分達の名を示す刻印が入っている。
それは、決して誰にでも読める物ではなく魔導師として教育を受けた者だけが、授かる能力の一つである。
普通の人間にとってその刻印は、宝石の周りに付いた模様の様にみえるだけなのだ。赤い魔石の周りに刻まれているのは、この老人の愛弟子の名前だった。（シャロン・・・。お前までやられてしまったのか・・・）

彼の瞳は鋭い眼光で、周りの状況を確かめていた。ガゾロは、怒りよりもこの悲しみを作り出した張本人を探し出す事を考えていた。
サクサクと小気味良い音を立てながら、建物だったと思われる所へ入ってくガゾロ。
彼が一歩踏み出す度に、足下で舞う砂塵は彼の肩や背中に優しく付いて行く。空を見上げたガゾロは、天からも粉雪の様に灰が待って

来ているのを知ると、肩や背中に付いていた灰をそっと魔法で払うと、またゆっくりと前へ進んで行った。

漸く大広間と思われる広い部屋に入ると、ガゾロは嘗ては贅沢な分厚い絨毯で覆われていた床の土埃を払うと、手袋を嵌めた手で亜空間の中から分厚い本を取り出した。そして本をゆっくりと開く。其処には、嘗てこの貴族の城で栄えていた事を示す絵が飛び出して来た。その絵の中の人物達は、魂を持っているかの様に動き出した。

緑豊かな街ー北の果ての土地は、魔導師を育成する為には格好の場所であった。

商業も産業も盛んで、街はとても潤っていた。戦争も略奪も内乱も何もない平和を絵に描いたような街だった。ガゾロは、去年の夏には、此処に来て自分の愛弟子達の成長を確かめる様に、講義や特別授業をやっていた。今でも目を瞑ればあの光景が昨日の様に見えて来る。さっき建物の近くで見つけた魔導師の礼服の持ち主だったシャロン。

シャロンは、ガンマの娘アリーシャと一昨年結婚したばかりで、今年の夏にも子供が産まれると喜んでいたシャロン・・・。

何と惨い事だ。

ガゾロは、俯くとシャロンの手袋を握りしめ、肩を震わせた。シルベスターと言い、シャロンと言い、自分の息子達はどうして親の私よりも先に旅立ってしまったのだろうか・・・。

絵の中の人達は生き生きと動き回っている。次のページを捲ると其処から６ページ程破られていたのだ。恐らく、故意に誰かが破ってしまったのだろう。

ガゾロは、眉間に皺を寄せると、皺の中から鋭く光る蒼い双眸を凝らした。

異変？　虫鯨の大群（改）

彼は咳払いを何度かすると、呪文を唱え始めた。
　床の上に丸い魔法陣がポゥと青白く浮き出て来る。その魔法陣の中心に浮かんで来るのは、背格好も老人である自分と同じ位の初老の男であった。

「ガゾロか…もし、これを見ていたら、早く王宮に帰るのだ。魔王が目覚めたのだ」

「ガンマ…」

ガゾロは、懐かしの級友であったガンマの映像を見ていた。たまに背景が乱れている所があるが、ガンマは魔王が目覚めたと言って来た。その一言を聞いたガゾロは、目を見張った。

「魔王は退治されたんじゃなかったのか？」

　ガンマの画像は、哀しそうに首を横に振っている。そんなガンマの背後には、空を黒く埋め尽くすような虫鯨の大群が。
彼（ガンマ）が何故あんなにもフレデレリック王の時代にあった古文書を狂った様に調べ始めたのかが、漸く分かったガゾロは、「どうして、あの時儂に言ってくれなかったのか・・・・」そう哀しそうに呟いていた。

遺跡の中から漸く見つけた一冊の本には、呪われた国の事が書いてあった。それを手に取った時にガンマはある事に気がついたのだろう。その為に・・。ガゾロは杖を握りしめた。
　その光景は遥か昔、あのフレデレリック王が治めていた時代と同

じ現象が始まるのか？
魔王が現れる何年も前に、いきなり湧いて出て来た様に一匹の虫鯨が出て来た。
その虫鯨は、朱色の羽を付けた珍しいカマキリのような虫だった。
それを物珍しそうに捕まえた第一王女のカリーは、掌にその虫鯨を乗せると微笑んでいた。　カリーの負の気配を読み取った虫鯨は、カリーの指に噛み付くと今にも飛び立つ所だった。

「痛！この虫の分際で生意気な！こうしてやるわ！」
そう言うと、カリーは、今にも飛び立ちそうだった虫鯨の羽を引きちぎると地面に叩き付けて、踏みつぶしてしまった。
息も絶え絶えになった朱色の虫鯨は、弱々しく羽を震えさせた。これがそもそもの始まりだった。
踏みつぶされた虫鯨を見つけたクリシャーナは、姉のカリーを見て叫んだ。

「お姉様。何と言う事をされたんですか！」

カリーに取っては、たとえ幸運を運ぶと言われている虫鯨も、ゴミ同然の扱いである。

「私に噛み付いたから成敗してやったのよ」

クリシャーナは、父親のフレデレリック王に、この事を告げるが、この時にはもう彼の中に魔王が入り込んでいた後だった。空一面を覆い尽くすような虫鯨の大群は豊作だった作物を1月も経たずに、全て食べ尽くしてしまった。
ガンマは、古い古文書を開くと涙ながらに、その文章を一つ一つ読んで行く。

「ガゾロ・・・フレデレリック王の時代と全く同じ事が起ころうとしているんだ。魔王が目覚める時に起こる兆候が、出て来たんだ。これを見てくれ『虫鯨だ』初めは、一匹飛んで来たんだ。それを貴族の子供が踏んでしまった・・・」

映像の中のガンマの手の上にあるのは、虫鯨だった。
青い顔をして虫鯨を見つめるガゾロは、ガンマを見つめていた。
この虫鯨は、最初に出て来るのは守護を司る虫だ。
しかし、その虫が邪見にされたり、ましてや理不尽にも踏み潰されたりした時は、何千何万と言う虫鯨の大群が押し寄せて来る。だが、残念な事にその事を詳しく知る者は、あまり居ない。

「私は、ここから離れる事は出来ない。だが、ここがどのように朽ちて行くのか、そして人々がどのように消えて行くのかを親友である君に伝える使命がある。だから、私は此処を出ない。分かってくれ」

画像は、次第に外の状況を見せている。初めは一匹の虫鯨がこの村に来た事から始まったとガンマは言っていた。

「ガゾロ…信じられないが、魔王はすでに目覚めている。それもこの街の出身の者だ。あの者を早く捕えて魔剣でとどめを刺してくれ。例え、それが女や子供であってもだ…うわぁああ！！！！」

次の瞬間、画像の中のガンマの体は虫鯨に埋め尽くされ、黒い虫鯨がガンマの体の上を覆う様に犇めいている。次第に小刻みに動いていたガンマの皺だらけの手が、大きく弧を描く様に一度動くと虫鯨の大群がガンマの身体から、一度はザァーっと音を立てて一斉に引いて行った。

「もう・・・・よい。ガンマ・・・・・わかったから・・・・もう、よい・・・・・」

ガゾロの鋭い眼光は、親友の最後を見定める為にもう一度、床で仄かに漂う様に光っているガンマの画像を苦しい表情で見つめた。虫鯨の大群が引いたガンマの身体殻は、所々に皮が食い千切られているのが目視でもハッキリ分かる。

彼は、今気力だけで何とか立っているのが分かる。これでもし、また床に膝を付いてしまえば、虫鯨の攻撃はもう避ける事は出来まい。

異変？　魔王の目覚め一前兆　（改）

「ガゾロ…信じられないが、魔王はすでに目覚めている。魔王に取り憑かれた人物は・・・恐らくもう、此処には居るまい。」

魔王に取り憑かれた？　ガゾロの眉間に皺が深くなった。古代では、フレデレリック王が魔王に取り憑かれていたが・・・。今度は、魔王は誰に取り憑いたのだ？　此処には、王宮関係者など住んでいないのに、何故　魔王はこの街を選んだのだ？

「ガゾロ・・・魔王を召還した人物は、お前が欲知っている人物だ。それもこの街の出身の者だ。あの者を早く捕えて魔剣でとどめを刺してくれ。例え、それが女や子供であってもだ…うわぁああ」

ガゾロの鋭い眼光は、親友の最後を見定める為にもう一度、床で仄かに漂う様に光っているガンマの画像を苦しい表情で見つめた。虫鯨の大群が引いたガンマの身体殻は、所々に皮が食い千切られているのが目視でもハッキリ分かる。
彼は、今気力だけで何とか立っているのが分かる。これでもし、また床に膝を付いてしまえば、虫鯨の攻撃はもう避ける事は出来まい。

「何故こんな大事になってしまったのだ・・・どうしてあの時にこの事をもう少し早く儂に教えてくれなかったのだ！ガンマ！！」

黒い波が周りから押し寄せる様に、ガンマの足元に吸い寄せられた。そこからカサカサと音を立てながら這い上がって行く虫鯨の黒い波は、今度こそガンマの身体全体を覆い尽くした。
ガゾロは、息もするのを忘れる程食い入る様に、魔法陣に映し出さ

れるガンマの画像を見つめていた。
ガンマの断末魔が響き渡った。ガンマが着ていた服だけが揺れる様に床に舞い落ちた。ガンマの身体を食い尽くした虫鯨は、灰と化して床に白い粉の山を積もらせていた。

崩れる様に両手と両膝を床に着いたガゾロは、今は亡き友・・・・・ガンマの壮絶な最後に涙した。
本来ならば、魔術師協会に出席する筈だった親友…ガンマとの連絡が取れない事に胸騒ぎを覚え、この北の街に来たのだが…。最後に彼と会話した時に、奇妙な事を言い出していたから、気になっていたのだ。

「ガゾロ・・・歴史は繰り返されるとよく物語で言うが、実際にそれが起こる事になったら、お前はどうする？」

「歴史？どうしてそんな事を言うんだガンマ？」

「まあいい。運命の歯車は既に回ってしまったのだ。もう、誰にもそれを止める事など出来ないのだ・・・。ガゾロ、もし私に何かあれば北の果てに来て欲しい。自分の足で来てくれ。決して移動魔術は使わないでくれ」

「何を言っているんだ？」

怪訝そうな表情で水晶玉を見つめるガゾロは、彼の言っている意味が一体何を示しているのかをまだ把握していなかった。

「何だか分からんが、とにかく旅に出ろと言うのか。まあ、良かろう。半年後の魔術師協会の時にでもトゥダに乗って、お主に会いに行くとする」

それを聞いたガンマはフッと柔らかく微笑んだ。

「ああ。待っているよ。間に合ってくれたらな・・・」

「全く、この老いぼれに長旅をさせるとは、酷い親友だ」

「スマンな。ガゾロ。これも世界の為だ」

これが水晶玉で彼との最後の会話だった。

その時は、一体ガンマが何を示唆して言っているのか、まだガゾロには分からなかった。どうして彼が移動魔術を使わずにトゥダで来る様に仕向けたのか、この場所に来て漸く分かった。

この世界の古代書物にも度々出ているのが、虫鯨だ。彼らは、魔王が目覚める時に必ず地の底から這い出て来る。コイツらは魔王が何処から出て来るのかを知っているのか、いつも魔王が現れると言われる場所から這い出て来る。

元々虫鯨は、無害な昆虫だ。だが、誰かに踏みつけられたりすると威嚇する様に羽音を立てて、仲間を呼び集める。だから最初が肝心なのだ。ガンマは、この街の貴族の子供が地上に這い出て来た一匹の虫鯨を見つけて踏みつぶしてしまった事から始まったと言っていた。虫鯨は、神虫とも言われるが、扱われ方に寄っては魔虫にもなる。

最初は、イナゴの様に作物を全て食べ尽くす虫鯨は、食べる物が無くなると、今度は家畜へと目標を変えて行く、それも無くなると遂には、人にまで及んで来るのだ。

もし、貴族の子供がその虫鯨を踏まなければ、ここはもっと栄えていた筈なのだ。虫鯨を殺せばその代償として、その国や村、街が消えるそれが、この世界の暗黙の掟なのだ。

溜息をついたガゾロは、トゥダに股がるとこの廃墟と化した街を離れた。

「急がねば…ジャンヌ様にこの事を知らせねば…。決して虫鯨を殺すなかれとお伝えせねば…そして、探さねばならぬ！一体誰が朱色の虫鯨を踏みつぶしたのかと言う事を．．．」

ガゾロのトゥダが砂煙を上げながら、王都へと向う。
移動魔術を使えば簡単なのだろうが、虫鯨が居る場所ーいや．．．．虫鯨に襲われた場所で行うのは、第二、第三の虫鯨の死骸に寄る被害が拡大するからだ。ならば、古と同じ方法で行くしかあるまい。

「ジャンヌ様．．．．．！どうか、この老いぼれに力をお貸し下さい！」

土煙を上げてガゾロを乗せたトゥダが走り去って行く。ジャンヌ達が住む王宮へ。

幻の泉

ふーっと深呼吸をして、私は目の前にあるツタの絡まる魔法学校の石作りの建物に不似合いなピンクのドアをそっと押した。
毎日見る度に思うのよね～一体誰の趣味なの?!　このピンクの扉って?!
まさか、ガゾロさん?
プププ～　ち、違うわよね・・・。
先週一週間ずっとディートリッヒの魔術の授業はサボりまくっていたジャンヌ。でも、他の授業はキチンと受けていたから何もディートリッヒには言われていない。　一人で浮力魔術の練習を湯船でやっていた。
アウグストから「家で浮力の練習をするんなら、これを使うと良いよ」そう言って渡されたのが、マーブル玉だった。なんでもこれを湯船に入れて真上から見ると自分が見たい物が見れるそうだ。
これなら、私もやれるかも!そう思ってこの一週間私だってやれる事はやりましたよ!
家での特訓では、マーブルを使って覗いていたものは、ディートリッヒの事だった。
魔法指導教室の窓際に寄りかかる様に片方のお尻だけ器用に低い棚の上に乗せて、外を見ている。
外から何が見えるんだろう・・・。そう思っていたら、私が住んでいる別邸が見えてる。
「ごめんな・・・」
ポツリとディートリッヒが呟いている。思わず私はマーブルに映し出されたディートリッヒから、顔をそらした。
上手く謝れないのは、私も同じだ・・・。2人して意地はってばかり・・・・・。
浮力魔術を物にしたら、必ずディートリッヒに謝ってやるんだから!

（どこまでも、上から目線のジャンヌ）

週末は、ゆっくり別邸の自分の部屋で休んだジャンヌだったが、相変わらず悪夢にはうなされているようだ。でも、本人は、「あんなの夢よ夢！そんなピンクっぽい虫が潰されたからって、村一つとか、国一つが無くなるわけないじゃない。　馬鹿馬鹿しい」そう呟きながら、ピンクのドアを押すと入って行った。ジャンヌは、知らなかったのだが、この魔法学校のピンクのドアの由来ーそれは虫鯨を差している。

この日ジャンヌは気がつかなかった。このピンクのドアの形が虫鯨の紋章を象っていた事を。

そして、その虫鯨の目となっているダイアモンドが、光り輝いていた。

生温い風がジャンヌの頬を撫でて来る。

風が何かを恐れているようだわ。

ジャンヌは、閉めかけたピンクのドアをそっと閉めた。

いつもよりも、風が大気がざわついている。何かがこの世界で産まれようとしているのかしら?

ピリリと身体が痺れて来る感じがして、思わずジャンヌの身体が蹌踉けてしまう。壁に凭れながら、自分の身体の変調に首を傾げていた。

今日は、先週ジャンヌが怒りとイライラで投げ出してしまった浮力魔術をやる事になった。

ディートリッヒは、窓際の低いテーブル兼本棚に座って、人差し指でクルクルと簡単な魔法を使いながら、自分の大好きな紅茶を何も無い空間からティーカップに注がせると、紅茶の甘い香りが、部屋全体に広がった。

「そろそろ、時間か。今日は来るのかな?　子猫ちゃんは」

「誰が、猫なんですか？」

独り言を聞かれていた事に、何も悪びれる事無く肩を竦めて笑っているディートリッヒは、時間通りに魔法指導教室に入って来たジャンヌを見て、にっこり微笑んでいた。

「おはよう。おや、今日は逃げなかったんだね。良かったよ～　今週も逃げられちゃったら、どうしようかと思ったからね」

口調はあくまでもやんわりだが、（逃げんなよ～！分かっているんだろうな。ジャンヌ！お前　自分の役目くらい知れよ！ったく先週一週間も丸まる休んでくれて、こっちはスケジュールを微調整しなきゃならないんだからな！）そうディートリッヒの目が言っている。ジャンヌは、顔を引き攣らせながら、「笑うか怒るかどっちかにすれば良いじゃない」呆れていた。

「其処まで言うのなら、ちゃんと出来るんだよね。浮力魔術。なら、やってもらおうじゃないか。今日は、特別に泉に転送するからね」

コイツ、本当に意地悪だ・・・・。

王子だって言われていても、優しい顔をしても、魔術指導師としては、本当に厳しいディートリッヒ。

諦めかけた様に、肩を竦ませたジャンヌは、荷物を机の上に置くと首をコキコキと鳴らした。

「さあ、良いわよ。泉でも魔窟でも、もう逃げないんだからね！」

そう意気込んで言うジャンヌを見て、ディートリッヒは、クスッと笑っていた。

「よろしい。では・・・」

そう言って、手を空中に翳した。、ディートリッヒは、瞬間移動魔術で、ジャンヌを泉の中央に移動させた。

ぞわりと体中を猫のザラザラとした舌に舐められているような感覚が、頭の先から爪先まで感じる。思わず眉間に皺を寄せるジャンヌは、風が頬を撫でているのに気がついた。

「ここは・・・？！」

目の前に広がるのは、まるで夕焼けの空が泉に映ったように朱色の泉がある。初めて見るこんな不思議な色の泉をジャンヌは、息を殺しながら、じっと見ていた。

「血のように赤いわ・・・」

「ここは、幻の泉と呼ばれる場所です。ジャンヌの運が良ければ、女神に会えるかも知れないよ。だけど、泉に引きずり込まれない様にね」

え？今、何かさらって恐ろしい事を言っていたような気がするんだけど・・・。スルーしなきゃダメかしら・・・。

実は、ジャンヌ金槌で、泳げません。だけど、そんな事を今更ディートリッヒに言っても何も始まらないから、もうやるしか無い！

幻の泉と呼ばれるこの泉は、魔力に寄って見える物と見えない物があると言われている。

ディートリッヒは、一体ジャンヌがこの泉で何を見る事が出来るのかとワクワクしていた。

昼間でも霧が立ちこめるこの泉には、未来や夢を魅せる女神が居る

と言われている。だが、その女神は何でも相当な気分屋だと言う事は、ガゾロからも聞いているし、女神に会った時に自分も体験したから分かっている。
今回は、女神は一体何をしてくれるんだろうな・・・。

目を瞑って精神統一しているジャンヌは、アウグストに言われた事を思い出した。

『ジャンヌは、習うより慣れろだろ？　自分がやりたいと思わないとね。ジャンヌ幻の泉を観に行きたいなら、行ってみたいからこれをやりたい！って思える筈だ。やってごらん』

すーぅと深呼吸をし始めたジャンヌは、階段を一段一段上るように右足で上に上って行く。
足下がふらついて来ているが、ジャンヌは心の中で水面の上を歩きたい！そう強く願った。今までは、左足で踏みしめた途端に、体がぐらついて水の中に落ちてしまっていたのだが、今日は落ちる事無く広い泉の上をゆっくりと歩く事が出来たのである。
それをみたディートリッヒは、パンパンと拍手をするとジャンヌを褒めた。

「よく頑張ったな。ジャンヌ！」

「・・・・・」

「ジャンヌ？」

水面の上に立ったままで、動かないジャンヌは、誰かに呼ばれたかの様に、ふと空を見上げた。
徐に目を瞑ったジャンヌは体を小刻みに震わせると一言呟いた。

「・・・・・来る・・・・・」

「？　何が？どうしたんだ！　ジャンヌ！」

その言葉を発したジャンヌの体は電撃を受けた様に、眩い閃光を体から発した。

「キャ・・」短い悲鳴をあげた後、ジャンヌの体はゆっくりと水面の上に倒れて行った。例え倒れてもまだ浮力する力は残っているらしく、ジャンヌは仰向けになった。

ジャンヌの目は遠くを見つめている。その銀眼は、静かに光を讃えていた。それはまるで湖に浮かぶ月光のようだ。痙攣しているのか、たまに小指がピクピクと動いている。

脈は・・・・そう思い、ディートリッヒがジャンヌの首筋に手をやると、弱々しいが規則正しく脈を打っている。

横たわったジャンヌの身体は蒼い魔石の輝きに満ちあふれていた。泉の女神が音も無く水面に出て来ると、眉を少しだけあげて横たわったジャンヌを見ていた。

ジャンヌは、朦朧とした意識の中で、誰かの声が聞こえて来る。

肩までに切り揃えられた深紅の髪に銀の瞳を持った少女が、ジャンヌの髪を撫でながら呪文の様に囁いている。５才くらいの少女だろう。腕には、腕輪が嵌められていて、其処には魔法学校にあるあのピンクのドアに刻まれている紋章と同じ物が刻まれてあった。

薄緑色のポンチョを着ている少女は、サクランボの様に赤く小さな唇でそっとジャンヌの額に口付けをした。

ジャンヌの身体は、まだ痺れていて指一本動かす事も出来ない。そんな時に、まるで子供にあやされる様に、額に口付けされたジャンヌは、顔を真っ赤に染めた。

少女は、額に口付けをすると共に、ジャンヌの記憶を少し辿って行った。

「ジャンヌか・・・。『歴史は繰り返される』そうレゼンド王に伝えよ『二つの力が一つに成る時に真実が見えて来ると』」

ジャンヌは、自分がまるで運河の上の小舟に乗せられているような気がしていた。

歴史は繰り返されるー

朱色の虫鯨が王都に飛来して来る。それは、この世界を滅ぼそうとしている者達が放った一つの罠。

誰の目にも留まらせる事無く朱色の虫鯨を殺す事なかれ。」

頭の中に響いて来る不思議な声は、ジャンヌの身体を使って彼女の側に居たディートリッヒに伝えられた。

女神の予言

「歴史は繰り返される」

そう言っていた。

ディートリッヒは、まだ水面の上に横になって浮いているジャンヌを見つめていた。

「女神に会ったのか・・・・」

ディートリッヒが女神に会ったのは、彼がまだ6才の少年だったあの夏だった。周りの木々が、生温い夏風に枝を踊らせる様に揺らしていた。幹には赤い目をした蝉達が停まり、一斉にミンミンと大合唱している。空を見れば、ムクムクと遥か彼方の地上から沸き出したかの様に見える入道雲は、風に押されて形を変化させて行く。小さな王子は、自分の腹心であるアルフレッドに連れられて、この赤く不気味な泉にやって来た。性格に言えば、連れて来られたのだ。しかも無理矢理にだ。この世界で幻の泉の事を知らないものはいない。

彼らが恐れるのは、泉よりも泉に住んでいる女神だった。

女神は子供の様に気まぐれで、彼女はやってくる者達に対し、自分が気に入ったら予言をしてやっていた。

もし彼女が彼らを気に入らなかったら、泉の底へ引きずり込むのである。

最初、ディートリッヒは驚き泣きわめいた。無理も無い。まだ子供だったのだから。

無理矢理、アルフレッドに泉の中心へ移動魔術によって移動させられたのだ。

肩を震わせて泣いていたディートリッヒの周りに霧が立ちこめると、

その霧は段々と人の形になると可愛らしい少女が出て来た。
その少女は、ディートリッヒを一目見ると指を指して言った。

『面白い事をしたものだな』

確かにそう言った。女神は予言をくれずに只、その一言を発して泉の中へ消えて行った。
一体どんな意味があるのだ？
一昔前の回想に頭を振ると目の前にまだ横たわっているジャンヌを見ていた。

『二つの力が一つに成る時に真実が見えて来ると』

ジャンヌの口から女神の言葉が出て来ていた。一体どう言う事なのだ、それに歴史が繰り返されるとは・・・まさか、考えたく無い最悪な事態が頭の中を駆け巡る。
こうなったら、移動魔術でこのままジャンヌを連れて王宮に帰るしか無い。そう思ったディートリッヒは、移動魔術でジャンヌを王宮に転送させた。
まだ浮力魔術を使っているジャンヌは、寝台の上に寝かされていても、ずっと身体が浮いている。
それを見て心配した様に雪豹が、ジャンヌの側で見ていた。今日は、このまま青の宮殿に停まらせる事にするか、そう決めたディートリッヒは直ぐに使いのものを別邸に寄越した。

帰郷1（改）

遠くから見ると、一筋の疾風が果てしなく続く砂漠の上を走っている。
砂煙を上げながらトゥダを走らせていたガゾロは、オアシスを見つけると其処へ立ち寄った。
あまりの喉の乾きとそして、北の果ての国ラグーニで起こった事が、サシュルート王国にも同じような惨劇が起こりうるかも知れないと言う焦りからか、ガゾロはこのオアシスが本当に安全なのかどうなのかを確かめる事を怠ってしまったのだ。

オアシスまで後2キロと言う所で、今まで大人しかったトゥダが暴れ出した。
あまりのトゥダの暴れぶりに、ガゾロはトゥダから落ちると魔法で身を護った。

「一体何が起こったと言うのだ」

オアシスまで後少しと言うのに・・・・
ガゾロの額に焦りの色が出て来る。
そんな中、暴れ回るトゥダの足下の砂地が、勢い良く凹み始めた。

「流砂か？　いや、違う・・」

砂の中から出て来たのは、巨大化したあり地獄だった。
ガゾロがオアシスだと思っていたのは、あり地獄の背の部分であった。

「ワシとした事が、あまりの焦りに本物のオアシスと偽りのものと

間違えてしまうとは・・・」

自分のトゥダを助ける為にトゥダに移動魔術をかけはじめた。だが、この巨大あり地獄では、魔術をかけた方も命取りとなるので、ガゾロは、自分のトゥダがあり地獄の鋭い前足に喉を突かれるのを黙って見ているしか無かった。あり地獄の中心に蠢く巨大な虫は、前足に毒を仕込んでいる。トゥダが擦れる様な？(いななき)を耳にしたガゾロは、眉間に皺を寄せると、沈み行くトゥダの身体に巻き付いた黒い虫の足を見ていた。

「すまぬ・・・・。許せ・・・」

ガゾロは、ゆっくりと立ち上がるとサシュルート王国を目指した。照りつける太陽が、ガゾロの体力を徐々に奪って行く。足下をぐらつかせながら、とうとうガゾロは倒れてしまった。

一筋の影がガゾロの前に現れた。

照りつける太陽を撥ね除ける為に着ているのだろう。黒く長いマント、そして頭はフッドを被っている。

薄れ行くガゾロの意識の中で、女の白い手がガゾロの皺だらけの腕を掴んでいた。

ブラックアウトした後でぱちゃぱちゃと水で誰かが遊ぶ音が聞こえて来る。

空耳だろうか？

ガゾロはそう思った。

だが、自分の顔にも幾度も水がかかってる。

砂だらけの手で、何度か目を擦って起き出したガゾロは、自分の目の前に美しいオアシスが広がっているのを見て、驚いていた。

「此処は、一体何処なのだ？」

泉の中央で自分を助けた者が、水浴びをしているようだ。
真珠のように透き通った白い肌には、なだらかな膨らみがあった。
黒く長い髪は夜の闇の様にしっとりと美しい。黒髪から滴る様に泉の水が真珠の様に光り輝きながら水面に落ちて来る。
魔か、人か？思わずガゾロが立ち上がって、泉の方へと近づいて行くと足下にあった小枝を踏んでしまった。
ポキリと言う軽い音が、静かなオアシスの中で響いた。
自分を助けてくれた人は、両手で胸を隠すとこちらを振り向いた。
片方が銀の瞳でもう片方は金の瞳をしていた不思議な少女は、ガゾロを見据えている。

「お気付きになりましたか？」

「やはりお主が助けて下さったのか・・・」

「はい・・」

「名を・・・名を教えては下さらんか？」

女は、ためらいながらも頭を振った。ガゾロは、この世界では人や精霊以外で名を持たぬ者はいない。だが、名を教えてもらえないのなら、この目の前の女人は、やはり魔なのか・・・・。

「ガゾロ様・・・・私には、名は在りません。私はある方を探しているのです。私はそのお方の半身なのです」

女は、少しずつガゾロがいる方へ歩み寄って来ると、魔法で身体に布を纏わせた。
半身？一体どう言う事なのだろうか？

「其方は、どうしてワシの名を存しておるのじゃ？　名がないとは、お主は人間では無いのか？」

「私は、意志を持つ魔石です。あなた達から見ると私は、魔石の化身とでも申しましょうか」

「魔石の化身ですか・・・」

「ええ。蒼の魔石と申し上げれば、お分かりになられるでしょう」

ピクッとガゾロの眉が微かに動いた。女は、漆黒の髪を束ねてガゾロの出方を見ている。

ーそうあなたは、私が求めている方を知っている。私の主を知っている。さあ、全てを話しなさい、そして私に平伏しなさい。

女は口角をややあげて、ガゾロを直視している。２人の間に漂うのはどす黒い空気だけだった。それは、魔力にはさらに強い魔力で力を見せて無理矢理に契約を結ばせると言う言うなれば、ハブＶＳマングースの戦いの様であった。

２人の周りにいた精霊達は、ガゾロ達の魔力の強さに吹き飛ばされてしまった。

２人の勝負が漸く着いた時には、もう太陽が二回も上っていた。

「流石、世界を魔王から護ったと言われる救世主の一人、ガゾロ様ですね・・・」

「お主も、この老いぼれに此処まで戦わせるとは・・・・ジャンヌ様と同じ様な石の輝きを持っておるは、頷けないが」

「ジャンヌ様と仰るのですか。あなたの気から私の半身の香りがしました故に、少し試させて頂いたのです。御無礼を承知しております。私の名はアクアとでも言いましょうか。もちろん本当の名ではありませんが。差し支えなかったら、そう読んで下さい」

アクアは、ガゾロに向って少し膝を折って、淑女の挨拶をした。

「ワシから？」

コクリと頷くアクアは、全身を青く光らせた。その光は、優しく慈愛に満ちた光だった。前にも一度この光を見た事があった気がするのだが・・・・。やはり、彼女はジャンヌ様の半身なのかも知れない・・。そう思ったガゾロは、アクアが自分から自分の半身の香りがすると言っていた事を思い出し、王都へ一刻も早く戻る事を決意した。

暫く考えたガゾロは、女に一緒にサシュルート王国に行く事にした。だが、砂漠の彼方で蠢く影と煙を見た時に、その選択はしない方が良いと判断した。ガゾロとアクアが空中に浮くと、砂煙を上げて砂漠の中から、黒い大蠍が出て来た。

鋭い毒針と前足のはさみを持って素早く砂漠の中を泳ぐ様に移動して行く。

此処で、思わぬ敵に出会ってしまったガゾロは、額に汗を掻きながらも大蠍（おおさそり）の弱点である４つの目に向って、銀の稲妻を落とした。大蠍は、４つの目の内、２つをガゾロからの攻撃で丸く感情も何も表さない球に稲妻が落ちた。飛び散る液体が、ヤシの木の幹にかかるとジュッと音を立てて、木の幹が溶けていく。

それを見たガゾロは、額に深く皺を寄せると目をやられ威嚇する音を立てながら、ガゾロではなく青い魔石の化身へと突進して行った。

ガゾロは、移動魔術を使う為に近くの神殿まで行く事にした。砂漠

の上でむやみやたらに移動魔術を使うと先程のような魔物までも王都に呼び寄せてしまう恐れがあるからだ。ガゾロは女と一緒に一度此処から西の国ドルバー公国を目指す事にした。ドルバー公国には、嘗て自分が教鞭をとっていた魔法学校がある。其処から、移動魔術を使えば安全に自分とこの魔石の娘を連れてサシュルート王国まで瞬間移動出来る。

（もし、上手く西の国ドルバー公国に行けたならの場合じゃがな・・・）

果てしなく続く砂丘を見つめるガゾロは、沈む夕日が空を真っ赤に染めているのを黙って見ていた。

帰郷　2忍び寄る足音（前書き）

残虐な表現があります。

帰郷　2忍び寄る足音

明るい筈の昼間でも、この鬱蒼と茂った森には、太陽の木漏れ日さえも地面に辿り着く事は出来ない。まるで暗い地下道を歩いているような気にさせる程だ。
その暗い森の中を一筋の太い鎖に繋がれた者達が、重い鎖を引きずる様に歩いて行く。
　トロル達であった。　彼らの身体的特徴は、人間達よりも背が低く、耳が異様に大きい。　嗅覚に優れていて、魔具を作る際に仕込まれる魔キノコを土の中から掘り出す時に、彼らは自分達の嗅覚でそれを探り当てる。
ほんのちょっとした香りなのだが、彼ら以外には普通のキノコとの分別が着かないのだ。　普段は平和を望み森でひっそりと暮らしているトロル達は、魔族達に追い立てられて次々と掴まってしまったのだ。

彼らの腕には、鎖とは違う魔具を着けられている。　一見ヘビメタ風のリストバンドの様に見えるが、これは彼らが、魔族の言う事を聞かなかった時に、真っ先に生け贄として、火山の火口に放り込まれる様に移動魔術がかけられているのだ。

次々と追い立てられる様に連れて行かれるトロル達、そして彼らを黙って見ている『二つの赤い光』があった。　その赤い光の持ち主は、大きく左右に裂けた口を持っている。その口には、鋭い牙が何本も並んでいて、地獄の獅子でさえも、食い破ってしまうと言われる程、強い。　体中には、赤い炎の鱗がある。人は、これを火龍と呼んでいる。火龍は、鋭い爪を持っている。これで逃げ惑う獲物達を捕まえ、身体を引き裂くのだ。火龍の背には、大きな翼がある。その翼を広げると森が火龍の火の翼の影響で燃えてしまうのだ。

地の底から犇めくような、低く不気味な音を立てながら、獲物がその音に怯え逃げ惑うのを喜ぶ様に見ている火龍。

トロル達が森から連れて行かれると、魔族達は、トロルの森に火龍を放った。　火龍は、黒い火を放つと森は一瞬にして黒い光に包まれて行った。

トロル達は、泣きわめきながらも、自分達が育った森を見つめていた。まだ歩けない子供のトロル達は、火龍のエサにされてしまったのだ。真っ赤な口を開けた火龍は、逃げ惑うトロルの子供達を崖まで追い詰めた。舌なめずりをしながら、火龍は、長い舌で一人一人を巻き取る様に、口の中へと入れて行った。　トロルの子供達は、泣き叫び助けを乞う。その叫びさえも火龍の嘶きにより、掻き消される。

彼ら親達の涙は、地面に幾つもの水滴を落とした。

まだ、トロルの森、地下深く眠る緑の魔石は、目覚めようとはしない。

帰郷3　西の国へ

ガゾロ達は、一旦西の国ドルバー公国に向けて歩き始めた。途中で立ち寄った街でトゥダを新しく2頭買う事にした。　アクアは始め「私は人ではないので、疲れないし、金の無駄遣いだ」と言い出したが、ガゾロは頑にアクアをトゥダに乗せると目的地に向って走り出した。

「ガゾロ様。一体、どうしてトゥダを買おうなんて思われたのですか？」

「ああ。実はな、これからトロルの森を通らなきゃなんないんじゃよ。彼奴らは、人間が嫌いでな。じゃが、トゥダと心を通わせておる人間なら、トロル達も悪さはせんのだよ」

目を細めて遥か西の方を見ているガゾロは、人の良い微笑みを作ると目尻に皺を寄せていた。

「そうですか。　私はてっきり　そのトロルの森に誰か大切な方がいらっしゃるのかとおもっていましたけど・・・ね」

アクアの言葉に、ガゾロの肩がピクンと揺れる。大げさに溜息をついたガゾロは、クシャッとした哀しい笑顔を見せた。

「実はな、西に行くには別にトロルの森は通らなくても良いのじゃが、何だか胸騒ぎがするのじゃよ。ヴォール　いや、トロルの村の長からの季節の羽衣が来た時に、手紙ももらったのだ。それには、『トロルの森の外れに黒いキノコが発生して来た』ときいたからの・・・・　何も無いと良いんじゃが・・・・」

「トロルの森とは、どう言う所なのですか？　ガゾロ様」

緑が深く、木々が生い茂り、昼でも日の光が地表を照らす事などない場所なのだが、トロル達が季節の羽衣を作っているのだ。

季節の羽衣とは、トロル達の毛髪から出来るのだ。それは、たった1本の毛髪から、その1シーズンの羽衣が出来る。出来上がった羽衣達は、鳥達がそれを銜えて大陸各地へと運んで行く。各地に運ばれた羽衣は、パチンと弾ける様に空中で霧の粒となって消えるのだ。そこから季節が産まれる。

トロル達の仕事は、年中無休。だが、今年の夏が中々来ない。普通なら、ギラギラと照り着く太陽が、大陸の各地に送り出されても良いのだが、まだまだ春の過ごしやすく不安定な気候が続いている。

その事に、ガゾロは一抹の不安を感じたのだった。

帰郷４　トロルの森　？

黒いキノコの事をしきりに気にしていたヴォール。ガゾロは、どうしても彼の手紙の内容が、気になってしょうがなかった。
トロルの森には、様々な種類のキノコが生える。しかし、黒いキノコは、聖なるトロルの森で生える筈がないのだ。
どうして、今になって聖なるトロルの森に、黒いキノコが生えて来るのだろうか？
ガロゾの眉間の皺が、深くなる。

「ガゾロ様？　どうなされましたか？」

ガゾロが持つトゥダの手綱が、プツンと切れてしまった。その事に、ガゾロは驚き遥か先に見えるであろうトロルの森を見つめている。
まだ、日も高いと言うのに、夕方に飛び交う渡り鳥達が、騒ぎ始めている。
しかも、その鳥達は、普段ならトロルの森で春を過ごす鳥達だ。
あまりにも、今回の出来事は重なり過ぎているのではないのか？
ガゾロは、切れた手綱をトゥダから外すと、新しい手綱を取り付けた。

（何かが引っかかるのだ．．．）

初めに、北の果ての国ラグーニで起こった奇妙な事件。
農作物が次々と食い荒らされて行き、次に、家畜まで忽然と姿を消して行く。最後には、人までも。
その裏には、魔王の出現と関係が深い『虫鯨』の存在がガンマの残した魔法陣の記憶画像に残っていた。あれが無かったら、今回の北の果ての国ラグーニでの事件が、全て神隠しと言うあやふやな言葉

で、片付けられてしまっただろう。
そう思うと、ガンマが命を賭けて自分に伝えてくれた、ラグーニの滅亡の真実は、これからこの世界で始まる恐ろしい何かを意味しているのであろう。
ガンマが残した言葉ー　『ガゾロ…信じられないが、魔王はすでに目覚めている。それもこの街の出身の者だ。あの者を早く捕えて魔剣でとどめを刺してくれ。例え、それが女や子供であってもだ…うわぁああ!!!!』
未だに、彼(ガンマ)の断末魔が耳に残っている。
まだ大陸各地に届かないトロル達が作る季節の羽衣。
そして、ヴォールからの手紙。
決して聖なるトロルの森で生息する事の無い、黒いキノコが発生した事。
黒いキノコは、虫鯨が唯一生息する事が出来る場所。其処を拠点として、朱色の虫鯨が一番始めに羽化する。だが、誰も朱色の虫鯨が何処で羽化するなんて言うのは、知らない筈だ。
もし、知っているとしたら…　『魔王』くらいだろう。

トゥダの手綱を強く握ると、ガゾロは真っ青な顔をして、トロルの森がある方向へとトゥダを走らせた。
アクアは、ガゾロの様子がおかしいのをいち早く感じ取ると、自分のトゥダの手綱を握って、ガゾロの後を見失わない様に走らせた。

ガゾロは、黒いキノコが自然に発生する事が無いと言う事を知っていた。それは、もしかすると誰かが別の目的で黒いキノコをトロルの森に発生させたと考えるのが、自然だろう。
黒いキノコは、火龍の消化器官が消化出来なかった物から、生えて来る。
ま…　まさか、誰かが火龍をトロルの森に連れて来たと言う事か?!

何と言う事だ！

元々火龍は、北の果ての国ラグーニの火山地帯に住んでいる筈だ。
それなのに、一体誰が・・・・？

「ガゾロ様！　も、森が・・！」

ガゾロの後からアクアの叫び声が聞こえた。トゥダを止まらせたガゾロは、トロルの森を見ると愕然とした。あまりの驚きに、彼はトゥダから崩れる様に降りると、砂地に両手と両膝を着いて涙を流した。

「ヴォール！！！」

あんなに緑豊かで美しかったトロルの森が、跡形も無く消されていた。
目の前にあるのは、焼かれて黒こげになった木々から、燻っている白い煙と何か巨大な生き物がいた事を思わせるように、黒いキノコが其処ら辺にびっしりと生えていた。魔具を作る為にある聖なる神の力を宿すと言われる石さえも、粉々に割られていた。
ガゾロの悲しみに暮れる叫び声が、黒こげの森と化したトロルの森に響く。

「わしは、師さえも失ってしまったのか・・・」

トゥダから軽やかに下りたアクアは、微かに聞こえる声に集中していた。そして、砂地に座り込み涙するガゾロに、アクアが近づくと「ガゾロ様。子供の泣き声が聞こえます」そう呟いた。
ガゾロは、驚いた顔でアクアの方を振り返ると、耳を澄ませた。すると、確かに聞こえるのだ、トロルの子供の泣き声が。

2人は急いでトゥダに股がると、泣き声が聞こえる方へとトゥダを走らせた。
二頭のトゥダは、微かに匂う生きているトロル体臭を探し当てると、トロルの森の中央に位置する神殿で動きを止めた。固い緑柱石で作られていた神殿の柱が、何者かの強い力で二つに折られている。トゥダは、前足で神殿の崩れた柱を引っ掻いていた。
トゥダを使って、柱を退けさせると地下室への入り口に通じる穴が見えて来た。
どうやら、その中にトロルの子供が隠れているようだ。

帰郷5　トロルの森？

森のあちらこちらから、白い煙が立ちこめる。
一体何人のトロル達が犠牲になったのだろうか・・・。
ガゾロは、眉間に皺を寄せながら、白髪の長い髪を煙と一緒に立ちこめる熱風に靡かせた。
もしかするとまだトロル達を襲った敵が、居るやも知れん。　彼は、目を瞑ると長い白髪に魔力を送った。　ガゾロの髪は、フワリと毛先が広がると傘を開いた様に、バッと髪が四方八方、放射線状に広がった。
　トロルの生存者は、今の所神殿の地下に隠れていたモンクと言う男の子だった。　モンクが言うには、ドイルと言う幼馴染みも何処かに隠れていると言っていた。
ドイル・・・・確かヴォールの孫娘だったな。
次世代のトロルの森を任せられる魔力を秘めている娘だと、ヴォールが自慢げに自分に行って聞かせていたのをガゾロは思い出した。

　普通、トロル達は深い緑の瞳をしているが、稀に森を護る魔力を持って産まれて来るトロル達もいる。
彼らの瞳は、その他のトロル達とは違って、赤い瞳をしているのだ。髪も白く肌も白い。そんなトロルが産まれて来るのは数百年に一度と言われている。
トロル自体、寿命が長く、２００年から３００年生きると言われている。
彼らの天敵は、人間では無く魔族であり、火龍なのだ。
火龍は、森の精を食べ、その力を内に宿し、口から火を噴く。その火は、火炎よりも赤く火山の炎よりも熱い。
誰かが、トロルの森に魔力を持った子供が、産まれたと言う事を魔族に教えてしまったのだろう。

そんな事を考えながらガゾロは、ゆっくりと黒こげになった大地を見渡した。
一房のガゾロの髪が、フワリとある方向を刺している。ガゾロは髪が指し示す方向に向かって行くと、そこには藤の幹が岩に絡み付いていた。
ガゾロが、藤の樹にそっと手を触れると樹が、ざわつく。　ガゾロの手を押しのける様に藤の蔦がガゾロの腕や身体、そして首に巻き付いて来た。　ガゾロは、蔦に攻撃などせずになすが侭にさせていると、首に巻き付いていた藤の蔦から花が咲きこぼれて来るとガゾロに話しかけて来た。

「お主は誰だ？　トロルに害する物なのか？」

この藤から発せられる声は、風を使い藤の花を揺らして響く。普通の人間では聞こえる事が出来ない声。藤の樹は、トロル達に取って神聖な樹木だ。　その昔、トロル達の先祖は藤の花から産まれたと言われている。　藤の花は一つの蔓から沢山の花が咲き誇るが、一つ一つは小さくても集まれば周りを圧巻させるほど、神聖だ。

「我は、ガゾロ。トロルの森の長ヴォールの弟子だ。」

ガゾロの身体に巻き付いて来た藤の蔓は、ゆっくりとガゾロの身体から離れ始めると、藤の幹に絡み付かれていた岩が支えを無くして、ゴロゴロと横に転がって来る。
その岩の影に隠れる様に丸まっていたのは、白い髪をした少女だった。
トロルとは、全く違う身体をしてる。少女は、藤の蔦に肩を叩かれ、ようやくガゾロの方を見上げた。

「・・・・・・・・・・・・だ・・・・れ・・・・？」

「ヴォールの弟子、ガゾロです。君が、ドイルかい？」

コクリと頷く少女は、深紅の双眸でガゾロを見上げた。
藤の蔦がドイルを岩陰から、外に誘導する様に優しく出すと、ドイルは藤の樹木に向って両手を胸の上で交差させるとトロル達が祈りをする時のポーズで、祈り始めた。
その祈りは、人語ではなく、風の言葉だ。
風は、吹く度に火を起こさせるだが、ドイルの風は、彼女が泣いているせいもあるのだろう。少し湿った風が吹く。やがてその風に押される様に、雨雲がやって来て、トロルの森に恵みの雨を降らせる。

ドイルが起こした雨は、不思議と温かく感じる。ガゾロは、火龍に寄って燃え尽きてしまった森林を見ると哀しそうに頭を振った。
ドイルの祈りが終わる頃、燃え尽きた樹の屑や、葉、そして炎で真っ黒だった大地から、新しい力が湧き出て来た。　緑の新芽が重い頭を擡げる様に、黒い大地から一斉に出て来ると天を目指す様に、我先に伸びて行く。

「すっげー。ドイル　」

　いつの間にかガゾロの側に来ていたモンクが、目を輝かせてドイルの魔力を見ていた。自分の隣にいるモンクには、何か別の魔力が備わっているのに、この少年がその事に何も気がつかないのはおかしいと思い始めたガゾロ。
ガゾロは、モンクの肩を掴むと彼の額に自分の額を着けた。
こうすれば、彼が持っている魔力の情報が入って来るのだ。
モンクの魔力は、守護だった。しかも、彼がいるからドイルの魔力が使えると言う事が分かった。
どうやら、彼らは2人でワンセットの魔力らしいな。

神も、なんて粋な事をして下さるのだろうか。
微かに微笑んだガゾロの顔を　怪訝そうな目で、見上げているモンク。

「どーしたんだよ。ガゾロさん？　気味悪ーよ」

　目尻を下げたガゾロは、２人を見て逞しくなって欲しいと願った。
恐らく大人のトロル達は、無事にこの森に戻って来る事は無いだろう・・・。
魔族達の食事は、トロルの血と肉そして、命だと言う事をガゾロは知っている。
もし、その事を彼らに少しでも話せば、折角生き残った彼らさえも、命の危険が付きまとう魔王退治に、己から名乗り出るだろう。
ヴォールは、それを良しとしない事をガゾロは、知っている。
今は、トロルの森を復活させることが、彼らの第一の使命である事を。だから、彼らには悲惨な事をこれ以上話して、心を惑わせるわけにはいかない。
そんなガゾロの思考を読んだアクアは、黙ってモンクとドイルを見つめていた。

「モンク。お前の魔力はドイルの力を引き出す力の様じゃな。２人で協力してこの森をふっかつさせるのだ。分かったな」

　ガゾロに優しく促される様に言われたモンクは、黙って俯いていた。
そんなモンクの手を藤の蔦が誘う様に巻き付くと、ドイルの方へ連れて行った。
ドイルは、深紅の瞳を潤ませながらモンクに抱きついていた。彼らの心が通った時に、森の中から神々しい光が刺して来た。
驚いた４人は、急いでその光の方へと走って行った。

黒い大地の中から、強い力が土や岩を押しのけて上へ上へと伸びて来る。
４人の目の前に出現したのは、大きな一枚岩で彫られたレリーフだった。そのレリーフを見たガゾロは、震え出した。

「ま、まさか・・・・。こんな事が起こっていいのか？」

自分達よりも博識で、魔力もあって、その上トロルの長だったヴォールの弟子であるガゾロが、此処まで動揺している事に驚いていたモンクとドイル。
アクアは、無表情でそのレリーフを見ているだけだった。
レリーフに刻まれた文字は、古代エジプトで使われているような象形文字だ。その文字の中に、虫鯨の文字が何度も刻まれていた。そして、レリーフの一番上には、こう刻まれてあった。

『世界が破滅に向う時、神は異世界から聖なる魂を連れて来る。魂が宿りし身体には、蒼き魔石宿る。神獣をも従わせる力に、皆平伏す。その者、月を纏った双眸をし、金の髪を靡かせ空から舞い降りる。蒼、深紅、緑の魔石を『魔剣』に・・』

此処で、レリーフが欠けていて読めなかった。魔剣・・・・・。
魔王出現の記述も刻まれていた。
ラグーニの人形使い。
魔族の中に確かに、人形使いに長けていた者が居たが、あの様な者達が王宮や王都に入れるわけがなかろう。ならば一体何故今頃になって・・・・。
ガゾロが、真剣な眼差しでレリーフに刻まれた文字を解読していると、ドイルがレリーフの両脇に埋められていた石を取り出すと、ガゾロの大きな皺だらけの手をとり、その上に乗せた。

「ドイルどの・・。これは・・・」

「藤の花が、あなたにこれを渡す様に言ってました。魔剣の君がこれを必要としているそうです」

「すまぬ」

「いいえ。ここからの出口は、藤の樹の穴に入って下さい。全ては藤の樹が教えてくれます」

ガゾロとアクアは、ドイルに言われた通り、巨大な藤の樹に開いていた穴を見つけると、2人は藤の蔓に誘われる様に、樹の穴の中に入って行った。

中は空洞で広くて暗い。反対側から光が差し込んで来たから、それを目指して2人は歩いて行った。

暗い穴から出て来た2人は、目の前の景色に驚いていていた。

此処は、既に西の国ドルバー公国の外れにある藤の樹だった。どうやら、トロルの森にある藤の樹とこのドルバー公国にある藤の樹は、どうやら同じ樹らしい。藤の樹を通して二つの場所を行き来しやすくなっているようだ。

そう言えば、ドルバー公国の何代か前の王は、ヴァールの一番弟子だったと、ヴァールから聞いた事があった。

そんな事を考えながら、ガゾロは藤の樹の穴から出て来ると、背伸びをした。2人の目の前には、トロルの森に置いて来たトゥダが二頭いて、ガゾロとアクアの2人を待っていた。

今更ですが登場人物の紹介デス（前書き）

少しネタばれも有ります。

今更ですが登場人物の紹介デス

ジャンヌ＝　トスポートル　（本名は　ジョセフィーヌ＝　シュスラード＝　フォング＝　ミハエル＝　トスポートル）
金髪銀眼　気が強く、お転婆な所がたまにキズ。
本人は薬師　を志していた。
蒼い魔石に出会う。お調子者で負けず嫌い。

ベンジャミン　＝　トスポートル
ダンスの名手。男爵。ジャンヌを自分の領地内の者と結婚させる事を夢見ていた。
平和が１番と言うのが、ベンジャミンの口癖。

ジャックリーン＝　トスポートル
男爵夫人。体が弱く夫のベンジャミンと結婚１０年目にして初めてできた娘を溺愛している。
ジャンヌに、薬師の面白さを教えた人。
性格は、社交家で明るい。ミーハーな所がたまにキズ。

マーサ
ジャンヌの侍女。
ジャンヌに、ズケズケと容赦なく言える人。
歳の離れた兄がいる。

レゼンド王
サシュルート王国を治めている。面白い事を常に探している困った人。
戦略家で、戦に強い。若き頃は、地獄の獅子と呼ばれていた。

アウグスト王子
第一王子。
体が弱いと噂されている。日中は、もっぱら本の虫と言う噂。
金髪碧眼。一見、女人と見間違う程に、美しい。太陽の君と呼ばれている。
笑顔がトレードマーク。
ジャンヌに、偽りの笑顔だと見破られる。ダンスの名手。学問では、ディートリッヒよりも秀でている。

ディートリッヒ　王子
第二王子。
２２歳　花嫁募集中。
腰までの長い銀髪。碧眼で、見目麗しい。いつも笑顔がトレードマーク。人々には、氷の君と呼ばれている。
以前、王家の森で鎖蛇の毒が仕込まれた矢を受け、負傷していた所をジャンヌに助けてもらった。
魔術が得意。

アルフレッド
氷の君と呼ばれるディートリッヒの教育係兼騎士。姉が１人。

シルベスター
アウグストの護衛騎士。アウグストを守る為に、自ら毒入りの水差しの水を飲み、死亡。
大天使シェスラードに寄って、黒い銀のトラじまの猫の姿になる。

ガゾロ＝　ディーハルヒ
王宮魔術師長。白髪交じりの長い髪と山羊のようなあご髭を持つ。
薄紫色の双眸を持つ。シルベスターの父親。御歳、２８９歳。トゥ

ダに跨り旅をするのが好きな老人。

ガンマ
王宮魔術師ー後輩達を育てる為に、北の果ての国ラグーニで魔導師長として教鞭に立つ。
古代フレデリック王の古文書を狂った様に調べ出す。

バトラー伯爵
ジャンヌの事をレゼンド王に売り込んだ人。
元々は、ジャンヌに求婚を迫っていた事もある。少し腹が気になる３０歳独身。妻は居たが、ジャンヌを娶るために、離縁した。ギラつく茶色の瞳に、魔女のようなわし鼻の先には、大きなイボがある。タラコ唇の持ち主。ジャンヌ曰く「　アンコウ　の所には、死んでも嫁がない！」と宣言している。

目醒め

未だジャンヌは、目覚めぬまま、青の宮殿で眠りの住人となっている。

２人の王子達が、ジャンヌの左右の手を握りしめて、彼女の目覚めを今か今かと待っている。

雪豹のスノーは、そんな２人の王子よりも、この部屋の外の方に対して全身の毛を立てて威嚇するかの様に、うなっていた。

ガルルル・・・・・！

漸く、王子達もスノーの威嚇の声で、その異変に気が付いた。

誰かが廊下を走って来る音がして来た。

それも１人ではない。５、６人だろうか。

ドアがイキナリ開けられると、バトラー伯爵が前触れもなく、この青の離宮にやって来たのだった。

伯爵は、ベッドに横たわっているジャンヌを見ると、すぐに２人の王子達を見た。

「これはこれは、アウグスト王子に、ディートリッヒ王子。ベンジャミン男爵から、事情を伺いましたので、こちらに来たのですが、一体ジャンヌ様は、どうなされたのですか？」

２人は、意外な人物の登場に、目で牽制する様にバトラー伯爵を見ると、２人は苦虫を噛み潰したような表情を一瞬だけすると、普通のにこやかな表情で会話をし始めた。

「私の離宮に、勝手に入って来るなり、あなたの失礼にもほどが有

りますが？　今回は、どんな要件ですか？　事と次第に寄っては、どう言う事になるのか、判っているのですか？」

バトラー伯爵は、そんな2人の王子達に守られる様に、横たわっているジャンヌを見ていた。
彼が、懐から取り出した皮袋をスノーが、飛び付いて掠め取った。
突然、雪豹に手を掠られたバトラー伯爵は、驚愕のあまり腰を抜かした。
雪豹を見るなり、指を指すと「や、やはり、双子の王子は、この世界を滅ぼす。神の審判が下るぞ！　神の使いと言われている雪豹を此処に隠すなど、末恐ろしい！」そう言い出した。

アウグストが何か言おうとする前に、ディートリッヒが目で「黙っていろ」とアウグストにアイコンタクトをして来た。
皮袋を前足で踏んでいる雪豹が、白い光を放つと、大天使シェスラードの姿になった。
シェスラードの手の中には、バトラーが持っていた皮袋があった。
綺麗な眉を潜めながら、皮袋の中身を取り出すと其処には、虫鯨が入っていた。
しかも、ピンク色。
それを見たシェスラードは、バトラー伯爵に詰め寄った。

「随分と面白い物をこの離宮に持って来たものだな。　誰に頼まれたのだ？」

バトラー伯爵は、口をパクパクさせると、何か言葉を発していた。
「そ、それは・・・ウガァ？」
突然、何者かの見えない力で首を締められたかの様に、もがき苦しみ出すと、口から泡を吹いて床に倒れた。バトラー伯爵と一緒にやって来た者達も、口から泡を吹いて床に倒れると、息絶えた。

彼等の姿は、ただの操り人形（マリオネット）となって床にバラバラになる様に砕けていた。

「「人形使い？」」

北の果て国ラグーニで、伝わる古来からの魔術ー　だが、其れを操れる者は誰もいないと聞いたが・・・・。2人の頭の中では、過去に2人揃って受けた、ガゾロとガンマの魔術師の歴史を思い出していた。　ガゾロが言っていた滅びた魔術の一つに、人形使いと言う魔法があったが、それは遠い昔に禁止された魔術。その魔術書も、全て時の王に寄って燃やされたと言う。今では、その言葉さえも忘れられてしまった。なのに…なぜ、今になってこの恐ろしい魔術が復活するのだ！！？

2人は、顔を見合わせるとシェスラードの方を見た。

「貴方は何かご存知のはずではないのですか？　シェスラード様！」

シェスラードは、ピンクの虫鯨を掌に乗せると、「今のお前の使命を果たせ」そう言うと虫鯨を羽ばたかさせた。

ピンクの虫鯨は、部屋の中を彷徨うと、ジャンヌの額にぺたりと貼りついた。

虫鯨の姿が溶ける様に消えると、ジャンヌが目を覚ました。

シェスラードは、2人にこのピンクの虫鯨は、ジャンヌを目覚めさせる為に来た。だが、次に出て来るピンクの虫鯨は、この世界を滅ぼす事も、栄えさせる事も出来る。全てはお前達次第だ。

その事だけ伝えると、シェスラードの姿は元の雪豹に戻った。

帰郷6　西の国の奇病　前編

西の国ドルバー公国に入ったガゾロとアクアは、此処におそらく眠っているであろう緑の魔石を探し始めた。
2人が、ドルバーの都に入ると、普段は賑わう筈の市場には、人っ子1人居ない。
何処も彼処も、居ないのだ。
不思議に思った2人は、町外れにある宿屋に立ち寄った。
其処には、他の国から来たと言う騎士や、腕自慢の荒くれ者達が犇いていた。
がゾロは、店の亭主にこの国の事を尋ねると、店の亭主は、周りを確かめる様に、目で見渡すと「あんたもしかしかして、ガゾロさんかい？」そう聞いて来た。
ガゾロは、頷くと店の亭主から手紙を受け取った。

「ガンマって人が、あんたが恐らく此処に来るから、此れを渡してくれって頼まれてたんだよ」

「それは、何時の事だ？」

「ありゃー、半年くれー前だったかんなー？」

そう言いながら、厨房で重そうな大きな黒い中華鍋を軽々と振っていた。

「どうして半年前だとわかるのだ？」

「そりゃー、分かるさ。なんて言ったって、オイラの娘アンナの結婚式だったからな。　忘れるわけないさ。女だてらに魔導師になる

っていってなー。出来た娘なんすよ。ガンマ先生の所で頑張って漸く魔導師になれたんですよ。シャロンさんの友人でトミーと言う魔導師が、オイラの婿だよ。大事な一人娘を攫って行ったんすから、覚えていますよ！」

ガゾロは、其れを聞くと眉間のシワをより一層深くさせた。
そんなガゾロの様子に、店の亭主は怪訝そうなかおをしてガゾロを見た。
「あんた達、ラグーニに立ち寄ったのか？」
アクアに聞いて来た亭主に、アクアは、一言「ああ、そうだ」と告げた。
その途端、彼はアクアの手を掴むと目に涙を溜めて、言って来た。

「あ、あんたもしかしかして、何か知っとんのか？　ラグーニの事を何か、知っとんのか？　教えてくれ！　誰に聞いても、何も言わんのじゃ！　何でもええから、教えてくれ！！」

店内は、先ほどまでの騒ぎが一変して、水を打ったかの様に静まり返った。
店の中にいる客達の脅威の眼差しがガゾロ達に集まって来ている。
ゴクリと唾を飲み込む音でさえも、響きそうな静けさだ。
ガゾロは、目を伏せると溜息をついた。

「お前さん、名前は？」

「わしゃ、宿屋のザックだぜ」

「そうか。　ザック、よく落ち着いて聞くのだ。ラグーニは、滅びた。アンナもトミーも、死んだんだ」

ザックの手から大きな中華鍋がスルリと落ちると、大きな音を立てて床に落ちた。カラカラと音を立てると中華鍋が床の上でまわっていた。

「シャロンさんやガンマ先生は？　あの方達が生きていらっしゃるならば、オイラの娘もトミーも・・・・・」

「シャロンもガンマも、死んだ」

某然と魂が抜けた様になったザックに寄り添う様に、彼の妻のマリンが彼の背中を撫でてている。
波打つ様に背中を揺らして泣いているザックは、嗚咽するとその場で崩れる様に蹲った。

「アンナは、漸く念願の魔導師になれたのに・・・・・これから、い、色々な国を・・・・・夫婦で・・・・・わ、渡り歩いて・・・・い、行くんだって、楽しみにし・・・・・」

ガゾロは、ガンマからの手紙に目を通すと、溜息をついた。

ガンマの手紙には、西の国の奇病について調べて欲しいと書いてあった。彼が調べ始めた頃は、其処まで奇病の被害も少なかった為に、何が原因かと言う事さえも解らないままだったと書いてあった。それが、もしかすると今回の魔王復活とこの公国の王室に関係があるのやも知れん。
ガゾロは、ザックに赤い布に包まれていた物を渡した。
それを受け取ったザックは、大きな体を震わせると泣いていた。
ザックの大きな掌に大事に握られているのは、愛娘アンナと婿のトミーの魔導師の礼服に入っている刻印と、２人の写真だった。　２人の写真の裏には、娘アンナの字で来年の夏には、親になれると書

いてあった。その礼服は、シャロンの礼服の下に庇われる様に重なっていた物だった。
ザックは、太いゴツゴツとした指で、写真の中の我が子と婿の笑顔を撫でていた。

店に中は、静まったまま、ザックの嗚咽が店内に響き渡った。
マリンは、前掛けで、目頭を押さえると慌てて、地下室のワイン蔵へと駆け下りると、其処で声を押し殺して泣いていた。ガゾロもアクアもただ、2人の気が済むまで泣かせる事にした。
店の中に居た客達は、皆ザックに声をかけると、其々の家へと帰って行った。

すっかり日も暮れ、夜の帳が降りる頃、店内には涙も枯れ果てたザックと妻のマリン、そしてガゾロにアクアの四人だけとなった。

「何から話せばいいんだろうな・・・」

泣き腫らした目が、まだ兎の目の様に赤いザックが、鼻を啜りながらポツリポツリと話し始めた。

「あれは、半年じゃねーな。一年位まえだったな。珍しい旅の芸人がこの西の国ドルバーに来たんだよ」

「珍しい旅の芸人？」

ガゾロの額にシワが寄る。アクアも怪訝そうに、ザックの話に身を乗り出して聞いている。普通　旅芸人と言えば、子供達を集めて昔話を聞かせる者、曲芸をやるもの、歌を歌う物、際どい服を身に纏い踊りを披露するものくらいだ。なのに、ザックは珍しい旅の芸人と言って来た。　一体その芸人は、何をやって居たのだろうか？

「ああ。薄気味悪い人形を持って居たのさ」

「人形？」

「ああ。大きなズタ袋から見えたんだよ。その男が持っている物が！　ありゃー　大きな人形だったな。しかも、一体じゃねー、何体も持っていたみてーだ」

「どうして人形だと判ったんだ？　しかも、何体も持っている事とか、どうやって知ったんだ？」

「そりゃー、ガチャガチャ袋から音がするし、なんせ近所の悪ガキが、その芸人の袋をナイフで破っちまったのさ、その時に袋の中身が全て外に出ちまったってわけさ」

人形だと？

ガゾロは親指と人差し指で長いあご髭を撫でながら考えていた。

人形・・・・・まさかな・・。　ガゾロの頭に中に古代ラグーニで継承されていた魔術ー傀儡師（くぐつし）　を思い起こした。だが、あれは、フレデリック王が亡くなった後、二度と同じ様な事が怒らない為にもと言う事で、禁止の魔術となった筈だ。それにその人形使いに用いる魔術書は、とうの昔にワシが全て燃やした筈だ。

帰郷7　西の国の奇病　中編　（改）

「ああ。薄気味悪い人形を持って居たのさ」

ザックは、椅子を引いて少し乱暴にどさりと座ると、太い首を右に左に傾けて、ゴキゴキと首の骨を鳴らした。

「人形？」

ガゾロの凛々しい眉が、ピクリと動いた。隣に座っていたアクアは、人形と言う言葉を聞いて、ガタンと椅子を倒すと立ち上がった。そんなアクアを宥める様に、彼女の腕を優しくポンポンと叩いたガゾロ。　アクアは、ガゾロの方を向いて、軽くため息をつくと倒した椅子を起こして座り直した。

「スマンな。ザック　続けてくれ」

がゾロの言葉に頷いたザックは、無精ヒゲを触りながら、話し出した。

「ああ。大きなズタ袋から見えたんだよ。その男が持っている物が！　ありゃー　大きな人形だったな。しかも、一体じゃねー、何体も持っていたみてーだ」

「どうして人形だと判ったんだ？　しかも、何体も持っている事とか、どうやって知ったんだ？」

「そりゃー、ガチャガチャ袋から音がするし、なんせ近所の悪ガキが、その芸人の袋をナイフで破っちまったのさ、その時に袋の中身

が全て外に出ちまったってわけさ」

人形だと？

ガゾロは親指と人差し指で長いあご髭を撫でながら考えていた。

人形・・・・・まさかな・・。　ガゾロの頭に中に古代ラグーニで継承されていた魔術ー傀儡師（くぐつし）　を思い起こした。だが、あれは、フレデリック王が亡くなった後、二度と同じ様な事が怒らない為にもと言う事で、禁止の魔術となった筈だ。それにその人形使いに用いる魔術書は、とうの昔にワシが全て燃やした筈だ。

ガゾロは、ウム～とうなりながら、目を瞑るとさっきザックが言っていた言葉を思い出していた。

そして、ドルバーの都に昼間っから、人っ子一人居なかった事とこのザックが言っていた旅の芸人が何らかの関係があるのではと考え始めた。

暖炉に置いてあった笛吹きケトルが、怒った様にピーピーと鳴り出した。

ザックが、暖炉のケトルから４つのカップにオレンジティーをカップに注ぐとガゾロ達の前に置いた。カップの中から、仄かなオレンジの香りと甘い蜂蜜の匂いが漂って来た。カップを両手で包む様に持ったザックは、自分の顔を映し出す紅茶をじっと見つめていた。

潤んでいるのか、彼の涙が顎を伝ってカップの中に落ちると、波紋を作った。

「オイラ・・・・・そんな気がしてならねんだ・・・・・。この国がおかしくなっちまったのも、全てあの旅の芸人から、始まったんじゃねーのかって」

片目を開けたガゾロはザックの話に耳を傾けた。

ザックが言うには、その旅の芸人は何をするでもなく、ただ　この

ドルバーの都を歩き回っていたと言っていた。普通、旅芸人と言うのは、子供達を集めて昔話を聞かせる者、歌を歌う者や、夜な夜な男どもを集めて薄い布地を身に纏い踊りを披露するものくらいだ。だが、その旅芸人は、何もせずに何日もこの国の中を歩き回っていただけなのだ。初めは、珍しがって男に纏わり付くように一緒に歩いていた子供達も日が経つにつれ、１人２人と減って行った。最後に残ったのが悪戯坊主のサムだった。

何も芸も見せない男の態度に、痺れを切らせたサムは、持っていた果物用の小型の石のナイフで、男の大きなズタ袋の底を切り裂くと、地面に崩れる様にして落ちた中身を見て震えながら、走り去って行った。

その後、サムはどれだけ探しても見つからなかった。

男は、地面に落ちた何体もの人形を一体一体大事そうに抱えると、自分が着ていたマントを地面に起き、その上に人形を置き始めた。

その時、サムが落として行った石のナイフもその人形の山に乗せると、風呂敷を使う様に四方の端を縛ると、其れを抱えて、この宿屋へ泊まりに来たのだった。

その男が翌日の昼間に宿屋を後にした頃、サムが発見された。

サムの体には、奇妙な湿疹が出来ており、日を追うごとにその湿疹から、芽が出るとサムの生気を吸い尽くすかの様に、育って行った。黄色い大きな花を咲かせると、サムは息を引き取った。

その花は、美しく見る者全てを虜にした。

初めは、サムを心配してやって来た友達や近所の者達は、サムの体の変化に驚いていたが、やがて彼等の体にも、サムと同じ様な症状がで始めた。

この半年で都に住むものが激減してしまったのだ。

今では、公国のジョアン姫迄も、奇病を患っていると噂で聞いているが、本当の所は、誰も判っちゃ居ないのさ。　あの事依頼、誰もあの城にも、都にでさえも、近付きたがらねえんだ。

「ザック・・・・つかぬ事を聞くが、そのサムは、普通の子供だったのか？」

ザックは首を振ると、カップを木のテーブルにおいた。木目が見えるテーブルは、悪戯坊主のサムが仲間達と一緒になって、木を切り出す所から、やって作ってくれたのだと言った。

「いいや。サムは、王様が娼婦に産ませた庶子だって言う、専らの噂さ。王様は、大の女好きだったからな～あのサム以外にも、他にも庶子は、居るって言われているくらいだ。　この事は、秘密にしておくれよ。アンナもガンマ様に魔導師の素質があると見込まれなかったら、王様に連れられて行っていたかも知れねーんだ。だから、おいらは今でもガンマ様を尊敬してんだ」

「サムは、最後にどんな状態だったのだ？」

「蔓漆の樹が、突然　サムの家の床から生えると、それに巻きつかれる様になって鮮やかな黄色い大きな花を咲かせて死んだと聞いている」

ドルバー公国の王であるグランマニエ王は、昔は側室さえも作らずに、正室であるシャギー様一筋だったはずなのだが、一体この国で何があったんだろうか・・・・？

ガゾロは、ザックにグランマニエ王は、何かを集めていたりしなかったかと訪ねた。

ザックは、うーんと唸って居ると、隣にいた妻のマリンが、思い出した様に膝を軽く叩いた。

「あ、あんた　あれなんじゃないのかい？」

「あれって？」

「ほら、１５年くらい前に、この国が水不足になった事があったじゃないのさ、あの井戸の事じゃないのかい？」

「井戸？」

ガゾロが、怪訝そうに聞いて来ると、マリンは、周りをみると、立ち上がって窓の扉と言う扉を全て閉めた。

「ここの国は元々幻の泉にいらっしゃる女神様に、祈って湧いて出て来たと言われる由緒正しい井戸が、王宮にあったんだよ。だけど、グランマニエ王が、即位された時の夜会で、あの王様は腐った葡萄酒をその井戸に投げ込んだ事から、女神様の怒りに触れたのだと、言われて居るよ」

「あれから、あんなに仲が良かったお妃様には見向きもしないで、毎日夜遊びしてさ、あれじゃあサシュルートから嫁いで来られたシャギー様がお可哀想で、あたしゃ涙が出て来るよ」

マリンは、前かけで自分の涙をそっと拭った。

シャギー様は、レゼンド王の姉君である。

１５年前から？もしかすると、もっと前からこの国に何かが起こっていたのかも知れないとガゾロは、そんな気がして来てならなかった。

帰郷８　西の国の奇病　後編　上

本文

ガゾロは、兎に角この国にあると言われる井戸を見つける事にした。ここドルバーには、大小合わせて、８０もの井戸が存在している。

今は一刻も早くこの国に蔓延（はびこ）る奇病の正体を暴かねば・・・・。

アクアは、奇病にかかって死んだ者達の家の調査に向かう事にした。１番最初に犠牲者となったサムの生家へと向かった。例え、命を落としていても、生家には、その人の生きた証となる残像と言う意識が残って居るからだ。　それに、アクアは、人間ではないから奇病に感染する事もない。

アクアは、ガゾロに「一々、こちらに戻る事は在りませんので、何か在りましたら、水晶玉でお知らせいたします。恐らく、その方がこの者達にも都合がよろしいでしょう」そう言うと、宿屋の戸を開けると外から雪崩れ込む様に部屋の中に入って来た大勢の男達は、昼間この宿屋の一階で食事をして居た男達だった。

彼等は、自分達も何か役に立てる事があれば、言ってくれと言い出した。

普通の人間で魔力も何もない彼等に調査に協力させる事は出来ないが、ここの国に伝わる伝説を兎に角集めてくれとがゾロが彼等に頼むと、心なしかザックやマリン達の顔にも安堵の表情が見られた。

ガゾロとアクアは、その日の夜に二手に分かれると其々の目的地へと向かった。

「アクアどの、呉々もお気を付けなされ」

そうガゾロが言うと、彼は黒いフードをすっぽりと頭から被ると暗闇の中に溶け込んで行った。　アクアは、ガゾロに「私の事は心配なさるな。私は、人の様に見えて人ではないのだから。寧ろ、其方

に気を付ける様に言いたいのだがな・・・・・。と言っても、聞いてはいない様だがな・・・・」

アクアは、長い黒髪を１つに束ねると、魔法で黒いフード付きのマントを取り出して、其れを身に纏うとガゾロが歩いて行った方向とは、真逆の方へと歩いて行った。公国の都にもまだ人は疎らではあるが住んで居ると言うのに、都の家々には、灯りが１つもない。

「私の半身は、無事に成人の儀式を逃げたりなんぞしてはないだろうか・・・・・」

不安が募るが、今は目の前の事を片付けなければならない。アクアは、サムの生家に入ると、後ろ手で戸を閉めた。

その頃ガゾロは、ザックから貰ったこのドルバー公国の地図を持って、移動魔法で井戸の場所へと虱潰しに一つ一つ移動しながら、目的の井戸を探し回っていた。

流石に宮廷魔術師長であるガゾロにも、この国にある８０もの井戸全部を一晩で見回るのには無理があった。其処で、一晩で１０個づつ見て回る事にした。

井戸は、井戸でも水が湧き出しているのだから、地下で必ず８０もの井戸全てが繋がっているのだ。水と井戸周りの土を採取して、宿屋のザックの所を借りて、魔術を使って分析をすると言う地道な作業から始めないと、埒がない。

まるで、暗闇の中を蝋燭の灯火無しで歩いている様なものだな・・・・。

ガゾロは、この日採取して来た井戸水と土に、ラベルを貼りながら、１０個のＸマークを地図上に付けて行った。

魔術で今日採取して来た物を調べると、薄いが魔術の反応があった。

先ほど付けたＸマークの所に青で小さく丸を描いた。

ドルバーは、元々砂漠地帯の所に、伝説の悲劇の姫君が、砂漠に倒れていた民を見て涙を流したものが、水となりオアシスとなって、今のドルバー公国の発端となると言われている。
本来ならば草木も生えない所は、流刑の地と言われていたのだが、其れを変えさせたのがラベンダー姫と呼ばれる方の慈悲なる魔力なのだろう。

気がつけば、もうこの井戸水の水質検査を始めてから、既に一週間が過ぎた。昨夜は、問題のお城にある井戸も調べたが、そこから出たのは、他の所と変わりが無いくらいの、微量の魔術の量だった。
この事に、ガゾロも心の中で亡き親友であるガンマに、「お前は、いつも厄介な事ばかり持ち込んで来る」そう文句を言っていた。

漸く本日最後の一つとなる井戸を見つけた時には、東の空から白くたなびいている雲が薄っすらと明るくなって来ていた。後ニ刻もすれば、日も上がって来るだろう。誰かに見つかる前に早く後の１０の井戸の調査を急がない事には・・・・。

帰郷９　西の国の奇病　後編　中（前書き）

残酷な表現があります。

帰郷9　西の国の奇病　後編　中

アクアは、サムや他の被害者達の家々を回ると、そこで奇妙な共通点を見つけた。
彼等の家には、きちんと何もかも整理されている。全ての棚を見ても、感染する様な物は見当たらなかった。
見当たらない？
もしや、彼等にとって生活の一部となっている物では無いのか・・・？

アクアは、もう一度原点に戻って見つめ直す事にした。
この西の国　ドルバーは、水が綺麗な事でも有名な国だったはず。
ならば、その水を水路にして、各家庭に備えついているポンプに水が送られて来る筈なのだが・・・。
アクアが手押しポンプに手で触れようとすると、自分の中から蒼い光が出て来た。どうやら、彼等の病気の原因の1つには、ポンプの水ではなく、ポンプのようだ。
これは、何処から出土された物なのだろうか？
アクアは、水晶玉でガゾロにこの国で使われているポンプは、何処で製造されているのか知りたいので、ザックに聞いて欲しいと言った。アクアの水晶玉に映し出されたザックは、頭を掻きながら言いにくそうに、チラリとガゾロを見ていた。

「お城の中で、作られているんですが、誰もポンプに使われている材料なんて知らないんすよ」

「では、其方の所にもポンプはあるのか？」

慌てたようにザックに聞きだしたアクアの声は、鋭く響いた。
ザックはブンブンと首を振った。

「あんな高い物を買う事は、無理っすよ。　それに、ここには、昔から湧き出ているトロルの湧き水があるから、ポンプなんて必要無いんすよ」

「分かった。これから私は、問題のポンプ製作所がある城に潜入しますので、失礼する」

水晶玉を手でかざすと、水晶玉はシャボン玉のように弾けて消えた。
アクアは、フードを深く被るとボソボソと小声で呪文を唱え始めた。
アクアの姿が、ブルージェイに変幻すると、ドルバーの城を目指して空高く飛んで行った。
城の門の前には、衛兵が2人立っていた。その門の上で羽を休めていたブルージェイは、目の前の城を見ていた。（テーブルをひっくり返した様な、形の城だわね・・・）　城の門の中にも、数人の衛兵が立っていた。
要所要所に、４人以上の衛兵達が立っている。一体、彼等は何を隠しているのだ？
城には、４つ本の塔が東西南北に別れて建てられていた。ブルージェイとなったアクアは、城の周りを弧を描く様に飛ぶと、まず初めは北の塔にある、小さな窓から中へ侵入した。
この塔の中には、以前誰かが此処に閉じ込められていたようだ。
壁には、五本を一纏めにした模様が、沢山刻んであった。アクアは、鳥の姿から人の姿に戻ると、床にある奇妙な感触に気がつくと、床に敷いてあった敷物を剥がすと、其処には魔方陣が描かれていた。
しかも、
この魔方陣は、普通の魔方陣ではなく、魔力の無い者を他の者に変花させる為に使われていた物だった。
その時、この部屋の扉の外で衛兵達が騒いでいた。
直ぐにアクアは、敷物を元通りに戻すと、鳥の姿になって、部屋の

天井部分にある梁にのると、其処から部屋の中を見下ろしていた。
時の魔法を使えば、此処で何が行われていたのかと言う事が、簡単に分かる。衛兵が通り過ぎるのを待って居たが、無常にも衛兵達はこの部屋に袋に入った物を置くと、部屋の床に敷いてあった敷物をどかした。
「ジョアン様。用意が出来ました」

ジョアン？　この国の王女の名前も確か・・・・ジョアンだった筈だが・・・。
部屋の中に入って来たジョアン王女は、頭からスッポリとフードをかぶっていた。だが、手だけは隠す事が出来なかったのだろう。皺くちゃで骨と皮だけの手が見えた。
確かまだ１４歳だと聞いたのに、何故？

魔方陣の中央に放り出されるように、袋から出されたのは、身体中発疹だらけの少年だった。
年の頃は、９歳にも見たないだろうか。
その少年が、魔方陣から出ようとすると、下から緑の蔓のような植物が生えて来ると子供の体をギリギリと縛り上げて、悲鳴を出させる。鼻や、口、耳に蔓が押しいるように入って行くと、心臓の位置の所から、大きな黄色い花が咲き始めた。
その花から、透明なキラキラとした汁のような物が垂れて来る。それを衛兵達は、カップに並々になるまで入れると、ジョアン王女にカップを手渡した。
それを嬉しそうに受け取った王女は、ゴクゴクと喉を鳴らして、カップの中身を飲み干した。
すると、王女はフードを外すと、白髪の髪が美しい黒髪へと変わって行った。彼女の手が１４歳の少女らしい白い柔らかそうな手になると、鏡に映った王女の顔にはシミさえも消え、真っ白い肌になっていた。

「これで後、二ヶ月くらい持つわね。でも、早くジャンヌ様に会いたいわ。あの銀の双眸を持つお方から出て来る命の水は、どんな味かしらね・・フフフフ・・・・」

魔方陣の上に残された干からびたミイラの様な少年の遺体は、ジョアン王女が部屋から満足した表情で、出て行くと、衛兵達が少年の遺体を袋にいれて、魔方陣の中心に置くと、袋の中身から黒い煙が上がる。衛兵達は、それが合図なのか、袋の中身を取り出すと、中からコロンとポンプが出て来た。

ーな、なんて事なのかしら!?　自分の国の民を使うなどと・・・・

・　なんて愚かな・・・!

衛兵達が部屋を出て行くと、ブルージェイは窓から飛び立つと、ガゾロ達が居るであろうザックの店へと向かった。

その頃ガゾロは、井戸８０個目の井戸水と井戸の周りの土を採取していた。その井戸は、お城の真後ろにある森の中に作られていた井戸だった。

かなり古い井戸で、周りの石に崩壊防止の魔法がかけられていたほどだった。

井戸の水は、既に枯れてはいたが、井戸の奥底が見えず、ガゾロが水の精霊を召喚して井戸の底を見てもらった。　水の精霊は井戸の中に入って行った。

暫くして井戸から出てきた水の精霊は、ガゾロを恨めしそうな目で見ると、腰に手を当てると怒って言って来た。

「何なの!　この井戸は!　幻の泉の女神から貰った井戸なのに、机やら、額縁に、椅子とかいろんな物が中に投げ込まれているのよ?　信じらんないわよ!　もー!」

キーっと怒り狂っている水の精霊は、井戸の中からポンポンと粗大ごみを出し始めた。
その数、何と８０個。　よくもまあ、此処まで物を捨てれた物だ。
そのゴミの中に、ジョアン王女が誕生した時に描かれた肖像画も入っていたのだ。
その肖像画に描かれているジョアン王女の顔には、泣き黒子があった。　そして、その隅には享年１２歳と１１ヶ月と書かれてあった。
その肖像画を額縁から外すと、丸めて亜空間の中へと放り込んだ。
国王一家の肖像画も見つけると、それも亜空間の中へと入れた。
どうやら、此処までも魔王の手先が何時の間にやら入っていたみたいだな・・・・。
袋の中に水の精霊に頼んで少しだけ汲んで貰った井戸水と周りの土を採取すると、ガゾロは移動魔術を使って、ザック達が待っている店へと戻って行った。

ザックの店では、アクアが帰って来ていた。
アクアは、元々人間ではないから、其処まで普段は感情が顔にも言葉にも現れないのだが、今日に限って真っ青な顔をしていた。　彼女を心配していたザックとマリンは、席にアクアを座らせると、温かい紅茶を出してくれていた。
するとアクアは、ガゾロの気配を感じると、ビクンと肩を震わせた。

「アクアどの。何か掴まれたのですね」

「ガ、ガゾロ様。ジャンヌ様に早く成人の儀式を受けて貰って、一日も早く魔剣を探す旅に出てもらわなくては・・・・」

「何があったのだ？」

アクアは、ゆっくりだが自分がサムの生家で感じ取った事と、城の

塔で見てしまった事を話し始めた。全ての自分が見て来た事を水晶玉に映し出すと、ザック達もその光景を見て、言葉を失った。
今度は、ガゾロが亜空間からジョアン王女の肖像画とドルバー公国の国王一家の肖像画だった。
その場に居た人間達は、お互いに顔を見合わせた。

「なら、今　お城にいる国王一家は、何者なんだ!?」

ザックの言葉に、答えるようにガゾロとアクアが答えた。

「「魔王の使いだよ」」

帰郷１０　西の国の奇病　後編　下　（改）

「「魔王の使いだよ」」

アクアとガゾロが声を揃えて言った。

「人の命がポンプに変えられているなんて・・・・そんな無茶苦茶な事があってたまるか！」

ザックが拳を作って、テーブルを叩いた。

ドンという音が店内に響くと、ザックは小刻みに肩を震わせながら、涙を流していた。

「サムや、アラン、ウェイに、フィンチ・・　あ、あいつらは、ポンプにされるために生まれて来た訳じゃねーんだ！！　彼奴らは、王の庶子だったけど、悪戯ばっかりしていたが、本当は良い子達だったんだ・・・」

ガゾロが井戸から持って帰って来た王女と国王一家の肖像画を見たアクアは、王女の目の下にあったはずの泣き黒子が無いのを見て、青くなった。

どうしてあの黒子を見た時に気がつかなかったんだろうか・・・。

まさか、彼奴まで蘇っているとは・・・。

アクアが綺麗な柳眉を顰めて、親指の爪を噛んでいた。

それを見たガゾロは、アクアに、「知り合いだったのか？」　低く鋭い声で聞いて来た。

「ええ。随分昔に、ジャンヌ様と一緒になって奴を倒したんですよ。

ポーンと言う影使いです。誰かが、蘇らせたに違いない」

影使いの話を聞いて、ザックは　思い出したかの様に、きょねんの暮れの事を話し始めた。

「影使い？　んー何だか知らんが、去年あたりにでっかい烏が城に飛んで来て、ちょっとした騒ぎになったんだ。そん時は、姫様も元気してらしたんだが、その後から、風邪で寝込まれたって、聞いたな」

「烏は１００年生きると魔力を持つと言われるからのう」

そう言うと、長くて白いあご髭を撫でていた。

どうやら、魔力を持った烏が、影使いのポーンを蘇らせたんだろう。

ガゾロがそう考えて居ると、アクアは、魔術で弓矢を出した。

「ガゾロ様。どうやら今の国王一家は、全て烏が成り代わっているようですね。サッサと終わらせて、サシュルートのレゼンド王に知らせないと・・・このままでは、ジャンヌ様の身にも何かが起きるのは、時間の問題ですぞ！」

立ち上がったアクアの袖を引っ張り、席に座らせたガゾロは、アクアに落ち着く様にと言い聞かせた。

確かに今のジャンヌ様のお力では魔王退治どころか、魔王の使いでさえも倒す事など出来そうもない。あのお方は、優しいお方だから、戦う事を拒否して仕舞われるだろう。

ガゾロは、直ぐに自分の魔法で水晶玉を出した。アクアと顔を見合わせると、頷いたガゾロはレゼンド王の水晶玉にアクセスした。

水晶玉の中にレゼンド王が見えてくると、王はガゾロの隣に立って

いる黒髪の美女を見て、微笑んでいた。
徐に、頭の上の冠をかぶり直すとエホン！オホン！と咳払いをして見せた。
恐らく、周りに誰かお付きの者でも居るのだろう。
そんな事を考えていたガゾロ達は、王にジャンヌの成人の儀式を早める様にと伝えた。

それを聞いたレゼンド王と隣にいたのであろう。王妃様の甲高い声が水晶玉を通して、店内響いて居る。
王妃は、ガゾロに、何があったのかを尋ねた。
ガゾロは、眉を顰めると息を整えた。

「王様、王妃様。北の果ての国ラグーニは、滅亡しました。ガンマも、シャロンも、アリーシャも皆、虫鯨の襲来により国は跡形もなく・・・・・・」

言葉を詰まらせたガゾロは、目を瞑ると口元を押さえた。そうでもしないと、嗚咽が出て来る。
そんなガゾロの背中をそっとさすっていたのは、アクアだった。アクアは、ガゾロに後は自分が話すから落ち着く様にと諭した。

「お初にお目にかかります。レゼンド王、並びに王妃様。　私の名は、アクアと申します。私の目を見ればお分かりの様に、人間ではございません。　蒼の魔石です。実は、ラグーニそして、トロルの森の異変を感じた我々は、此処ドルバー公国に来ました。此処でも、魔王の復活を示唆する事が出て来ました」

それは、なんだ？」

レゼンド王は、青い顔をして聞いて来た。

「良い話と悪い話が有りますが、お二方はどちらからお聞きになりたいですか？」

王妃と王は顔を見合わせると、「悪い話を先にしてくれるか？・・・・「いや、やはり　良い話から聞こう！」王妃が悪い話からと言い出したのに、
王が突然変えてしまった。

「良い話は、此処の国は滅びていません。そして、今回この国を騒がせて居る問題に、魔王でも、虫鯨でも有りません。魔王の使いのものと言う事が判明しました」

ホッとした王達は、胸を撫で下ろした。

「それで悪い話と言うのは、グランマニエ王とシャギー様との間にお生まれになったジョアン王女が、魔王の使いと入れ替わっております。　恐らく、国王一家の安否が確認出来ておりませぬ・・・・」

それを聞いたレゼンド王は、悲しみのあまり王妃の胸にすがって、泣き出した。
王妃は、気然とした態度でガゾロとアクアに、これからの事を相談し始めた。
魔王の使いをドルバー公国に呼んだ者を探し出し、処分すること。
そして、国王一家の安否の確認。
それらが終わり次第、南の国へと旅立つ事を言われた。

アクアは、王妃に一礼すると、ガゾロの水晶玉をシャボン玉に変えて弾かせた。

二人は、手分けして作業を進めた。水の精霊の話によれば、ポンプに変幻させられた、グランマニエ王の庶子達は、まだ生きて居るとのことだった。変幻の魔法を解く為には、井戸の底にある幻の泉から引いた水をポンプにかければ、元の人間達に戻れるとのことだった。それは、ザックが自分の胸を拳で強く叩くと、「おいら達にやらせておくれ！　なぁ！　野郎どもやるぞ！　俺達の国は俺達の力で守らないとな！」

そう言うと厳つい男達は、頷いていた。彼らは、水の精霊と一緒に城の裏手にある井戸へと向かった。

ザックは、精霊に言われたとおりに、清めの酒と月桂樹の葉、それから塩湖の塩を大事そうに持って、井戸の場所へと着いた。

井戸の中に捨てられていた物は、ガゾロが魔法で全て除去したので、井戸を清め始めた。

井戸の周りは草一本も生えてこない荒地の様な所だった。ザック達が酒や月桂樹そして、塩を井戸に入れると、井戸の底からゴゴゴゴゴゴ～！！！

地鳴りの様な音がしたかと思うと、水が独りでに湧いて来た。

その水を山羊の胃袋を加工した水筒に、次々入れ始めたザック達は、全ての家々に有るポンプと言うポンプに、水筒の中の　水をかけた。ポンプへと変えられて居た人達は、元の人間に戻るとお互いに抱き合った。

アクアとガゾロは、城へと鳥の姿となって飛んで行った。

二人は、都の様子が以前のようにあるべき姿に変わって行く様子を見ると、城にある北の塔の窓から中へと入った。

そして、城から誰一人出る事が出来ない様に、魔術で銀と金の幕を作ると城を覆った。

こうすれば、どんな魔力を持った者でもこの城から一歩たりとも、

外へ出る事は出来ない。
ガゾロとアクアは、塔の中は、以前と同じ様に床の上には敷物が敷き詰められて居た。
その敷物を取り除くと、其処には昨日とは違った魔方陣が描いてあった。
（これは、国外への移動魔方陣！！　私達をドルバー国外へと飛ばす気なのか！　邪魔者は、取り除けとは・・・）
それに気づいたアクアは、ガゾロを魔方陣の外へ押しやった。
魔方陣がアクアの体に反応すると、赤い光を放った。あまりの眩しさに目を瞑ると、アクアの姿が消えて行った。
ガゾロは、顔の前に人差し指と中指を立てて、十文字を切ると煙の様に姿を隠した。

ガチャっと音がして扉が開くと、ジョアン王女が衛兵達１０人を引き連れて部屋に入ってきた。

「フフフ。小癪なネズミが引っかかった様だわね」

そう勝ち誇った様に高笑いした時、独りでに部屋の扉が閉まると、部屋全体が蒼く光った。その眩い閃光に包まれた姫と１０人の衛兵達は断末魔と共に塵となって消えると、城を包んでいた怪しい気配も彼らと一緒に忽然と消えた。
部屋の壁からゴツゴツと言う音が聞こえて来る。
不審に思ったガゾロが、杖をコツコツと壁に当てると、それまであった壁が消え、部屋が現れた。
その部屋の中に、国王一家と、衛兵達そしてこの国の大臣達が閉じ込められていた。
その中には、この国の宰相の姿は、無かった。

漸く自由の身になった彼らは、安堵の表情を浮かべると、部屋の外

に出てきた。

「ファントムが、いきなり魔物を連れて来ると、私達を此処に閉じ込めたのです。此処から、彼らが、王の庶子や民の若さを奪う所をまざまざと見せられ、ガンマ様が「助けを必ず呼ぶと言う言葉を信じてきました。ガゾロ様、ガンマ様はどうされたのですか？」

ガゾロは、ふらついて倒れそうになったシャギー王妃の手を取ると、ゆっくりと立ち上がらせた。

「ガンマは、虫鯨の襲来によりラグーニと共に、土に返りました」

ガゾロの言葉を聞いた王妃は、両手で口を抑えると、目を見開き青い大きな瞳から大粒の涙をポロポロと流した。

衛兵達は、立ち上がると、駆け足で部屋を出て行った。数刻後、衛兵達に両腕を掴まれたファントムが引きずられる様に連行されてきた。

ファントムの首に銀の首輪を取り付けると、ファントムは、狂った様にケタケタと笑い出した。

彼の魂迄も魔王に捧げた様だった。ファントムの体から瘴気が出て来ると、ドス黒い煙が穴と言う穴から、毒を吐き出す様に出て来ると、彼の体は見る見る内に溶けてなくなって行った。

「戯け者めが！　骨の髄まで、魔物に取り憑かれよって　」

骨さえも残さず溶けて無くなった宰相の後を見て、グランマニエ王が苦々しい表情で呟いた。

成人の儀。

王宮の大広間にて行われる成人の儀。
本来ならば、後三ヶ月後に行われる筈だったジャンヌの成人の儀式は、西の国に居るガゾロが水晶玉を使ってレゼンド王にジャンヌの成人の儀式を一刻も早く行う様に進言したのだ。
其れを聞いたジャンヌは、王の前にも関わらず、チッと軽く舌打ちをした。
余計な事を・・・・・・。
そのジャンヌの呟きを耳にした父親のベンジャミンは、額から滝の様に流れる汗と背骨を伝う涙に様な冷や汗を感じた。
王の前ではあるが、ベンジャミンは王にジャンヌと少し話をさせて欲しいと申し立てた。
王も、ベンジャミンの言おうとせん事くらい判っておると言わんばかりに、「うむ。一刻だけじゃぞ」そう言った。
ベンジャミンは、お辞儀をするとジャンヌを連れて、謁見の間の隣にある小部屋にジャンヌを連れて入って行った。

「痛い！」

ジャンヌは膨れっ面で、腕を胸の前に組むと、ベンジャミンの顔を見ずに明後日の方向を見ていた。
ベンジャミンは、はあ～と大きく溜息をつくと、ジャンヌの目の前に毒蛇の干物を出した。　其れを見たジャンヌは、目を輝かせてベンジャミンに抱き着いた。
「コレよ！　この鎖蛇の干物！　なかなか手に入らなかったのよね～。　お父様！　ありがとうございます！　コレで色々な薬が作れるわ。そうすれば我が男爵家の家計の足しにもなりましょう！」

ジャンヌが干物をベンジャミンの手から奪い取ろうとした時に、ベンジャミンはにっこり微笑むとソレを山羊の皮袋の中に仕舞い込んだ。

「ジャンヌ。交換条件だ。　この鎖蛇の干物が欲しいならば、今週末にも成人の儀式を受けなさい。お前が成人の儀式を受けない場合は、この鎖蛇の干物は、焼却してしまうが、良いか？」

「く・・・・・・」

銀色の双眸に薄っすらと涙を浮かべるとジャンヌは、下を向いて悔しそうに唇を噛み締める。ジャンヌの白い両手は、指先が真っ白になる程、キツク拳を作ると肩をワナワナと震わせていた。

どうしても、手に入れたい鎖蛇の干物！　鎖蛇は、もう数が数える程しか生息して居ないし、その干物を手に入れるのだって困難を要する事くらい、ジャンヌでも知っている。

普段　父ベンジャミンは、こんな姑息な手を使う人では無い。そんな心優しい父に、こんな事をさせて居るのは自分なのだと、今更ながらにジャンヌは自分の魔力のせいで、家族にまでこんな嫌な思いをさせてしまって居る事に気が付いた。

毒蛇の干物と父親の苦虫を噛み潰したような顔を交互に見ると、ジャンヌは大きく溜息をつくと肩を竦めた。

「分かりました。お父様の仰る通りにします」

「ジャンヌ！漸く判ってくれたのか？」

「ええ。お父様にこんな事をさせてしまって居るのは、全て私の我儘のせいですから・・・・でも、干物は、キチンと頂きますからね

！」

「分かっているよ。ジャンヌ。なら、お前の気が変わらない内に！
これで、よろしですね？　レゼンド王？」

父ベンジャミンの言葉と共に、謁見の間に続く扉が開かれると、其処には、満面の笑みをたたえたレゼンド王と王妃、そして2人の王子達が立っていた。

ジャンヌは、頬を紅葉したもみじのように真っ赤にさせると、レゼンド王を見て「図りましたね」そう悔しそうに一言呟いた。
レゼンド王は、微笑みながらもベンジャミンの肩を叩くと、何事も人生経験じゃと言って笑っていた。
其れから直ぐに、ジャンヌは王妃に拐われる様に王妃の部屋に連れて行かれると、部屋には既にお針子達と仕立て屋が、ずらりと並んで待っていた。
ジャンヌの淡い紫色のドレスを脱がせると、ピンクや青、銀色、赤のドレスをどんどん着せて行く。
着せ替え人形の様だとジャンヌは苦笑しながらも、王妃の指示で素早く動くお針子達に驚きを隠せなかった。

「あ、あの・・・・王妃様・・・？　何故、この様に何着ものドレスを作らねばならないのでしょうか？」

王妃は、にっこり微笑むとジャンヌの肩に手を置いて、諭す様な優しい口調でジャンヌに取って最も避けたいくらいに、恐ろしい事を言って来た。

「あら？　今回のあなたの成人の儀式は、三日間にかけて行われるのですよ」

「3日？　な、何ですと～！」

チラリとジャンヌは、縋る様な瞳で（嘘だと言ってくれ～！）と言わんばかりに、お針子達や王妃様お付きの侍女達、そしてジャンヌの礼儀作法の先生でもあるヘザーの方を見た。　彼等は、ただ王妃の言葉に頷くだけだった。
がっくりとうな垂れる様に立っているジャンヌを慰める様に声をかけて来たのはヘザーだった。

「未来のお妃様の成人の儀式は、前夜祭そして成人の儀式、後夜祭を執り行うのがサシュルート王国ましてや、この世界の仕来りなのですよ。サシュルート前夜祭には間に合うかどうか知れませんが、ガゾロ様も出席されますよ。それに、東西南北の其々の大陸にある我が国の属国から、其々の王族方が、見えられます」

「いま、ガゾロ様は、何処にいらっしゃるのですか？」

「南の国グラージクォン王国だとお聞きいたしました」

「行って見たいものだわ。そのグラージクォン王国に。どんな所なのかしら？」

「一年中雪と氷に閉ざされた白銀の国だとお聞きしてますが。ジャンヌ様は、お寒いのは大丈夫なのでしょうか？」

「ええ。大丈夫よ。実家の男爵家は、それ程裕福ではなかったので、冬になると薪も節約していたの。だから少々の寒さなら平気よ」

コルセットをギュウギュウにキツク絞められると、ジャンヌは、溜

息さえも出すのが苦しくなって来た。
ジャンヌはそっちのけで、ドレスをどんどん決めて行く王妃様は、本当に嬉しそうだった。
前夜祭に着て行くドレスは東の国にあるカシス湖と言われる湖をイメージして織られた、コバルトブルーのドレスに銀のベールを頭からかぶる事になった。

成人の儀式様のドレスは、ピンクのバラの様なドレスで、ウエストから切り返しがある。

頭の上に白いマリアレースを神官に被らせてもらい、その時に変化する服の色魔力が決まる。
儀式の後は、後見人とのダンスを一曲。そして父親とダンスを一曲、王子達と一曲ずつ踊る。
王宮にあるガーデンには、イバラの他に、柑橘系の樹木が植えてある。
其処から王宮の大広間で行われている成人の儀を見ている者がいた。
不気味に笑いながら、金の巻き髪をした娘を舐める様に見ている。
長い爪を使ってその娘の影を少しだけ持ちさると「ククククク」肩を揺らしながら笑っている。
「貰う物は貰ったよ。魔剣の姫君」
声の主は、大きく腕を広げると大きな黒い翼を広げた黒龍となると、大空に飛んで行った。

盗まれた影１（前書き）

成人の儀式が行われる一週間前に時間が戻ります。

盗まれた影１

ジャンヌが嫌がって居た成人の儀式まで、後２日となった。　こんな堅苦しい儀式が三日も続くのか。この一週間ずっと連日の様に、念入りにリハーサルをやらせられて居たジャンヌは、逃げ出そうと何度も試みた。
だが、その度に父親のベンジャミンとの約束もあるし、何しろ　あの貴重な鎖蛇の干物が手に入るのだ。

「どうすれば良いのよ・・」

　ジャンヌの頭の中では、大きな天秤に、鎖蛇の干物が入った皿ともう一つの皿には、成人の儀式と言う重い枷＋（ぷらす）　双子の王子の内、１人を伴侶として選ばなければならない。
こんな物は、頭の中の天秤で計らないくても、どっちが重いかなんて直ぐに分かる。
成人の儀式が重いに決まっている。それに、いくら自分が言い出した事とは言え、結婚相手をあの２人の王子達の内の１人を伴侶として選ぶと言ってしまった。
ベッドに全身でダイブしたジャンヌは、はぁーと大きく溜め息を着いた。
　マーサには、まるで親の敵を取るみたいに、嫌と言う程コルセットを締められ、内臓が出てしまうかもと思った。　それにコルセットの締めすぎで、今日一日中　何にも食べれなかったし、お腹は鳴り響くし。　まさに踏んだり蹴ったりだわ。
　リハーサルの最中に何度もＭｒｓ．ヘザーから注意を受けるし。
先週までは『ジャンヌ様は、飲み込みが早くて、私とても助かりますわ。オホホホホホ～』　なんて言って、扇子で口元を隠して、笑みまで浮かべて居たくせに？

今週になってから、コロっと掌を換えした様な態度を取るなんて！！

「鎖蛇の干物が二匹じゃあ、安過ぎるわ！　どうせなら、生きた鎖蛇の方が欲しかったわ」

思わず出てしまった本音だった。そんな生きた鎖蛇に触れるのは、自分とガゾロ様以外居ないだろう。特に、父親のベンジャミンは、大の蛇嫌いだからな・・・・。

ジャンヌは、ムックリと起き上がると、忌々しい表情で、手元にあった本を手に取ると、枕元に向かって投げつけた。

　マーサには、まるで親の敵を取るみたいに、嫌と言う程コルセットを締められ、内臓が出てしまうかもと思った。　それにコルセットの締めすぎで、今日一日中　何にも食べれなかったし、お腹は鳴り響くし。　まさに踏んだり蹴ったりだわ。

　リハーサルの最中に何度もＭｒｓ．ヘザーから注意を受けるし。先週までは『ジャンヌ様は、飲み込みが早くて、私とても助かりますわ。オホホホホホ～』　なんて言って、扇子で口元を隠して、笑みまで浮かべて居たくせに？

今週になってから、コロっと掌を換えした様な態度を取るなんて！！それもこれも全て、ガゾロ先生が余計な事をレゼンド王に進言しちゃった事から、始まったのよ。

頭の中に来週の本番のおさらいをし始めた。

「えーっと、第一日目は、歌姫と舞姫達が、私の成人の儀式を祝う舞と歌を見せてくれるのよね。　そしてー、その後は2人の王子達による剣舞があるんだわ。ったく、そんなん私が見なくても大丈夫でしょ！」

唇を尖らかせて、文句を言って居るジャンヌは、手足をベッドの上でバタつかせた。

「あー！　嫌だ嫌だ！！！　もう、成人の儀式なんて、もう嫌だ！」

そう叫んでいた。

枕元に置いてある古代史の本に、ジャンヌの手が当たると、ジャンヌは古代史の本を睨んでいた。

「全ての元凶は、元はと言えば、クリシャーナ王女。あんた　なんだからね！！！」

八つ当たりにも取れるこの言い方。

ムクっと起き上がったジャンヌは、バックレることにした。　蒼い魔石の力をつかって、扉の向こうを透かして見ると、廊下にはアウグスト王子が立っていた。

ジャンヌが、抜け出そうとしていたら、捕まえる為に居るんだろう。

「ケッ！なんて奴だ！」

なら、此処の扉を開けれない様に、扉に停止魔法を掛けてっと・・・。　これでもう、アウグスト王子は、この部屋には入れない。

ジャンヌは、窓を開けると、テラスから魔方陣無しで転移魔法を使うと、王宮から抜け出すのに成功した。王都に転移魔法で現れたジャンヌは、両手を広げると「あー自由って、嬉しい！」　そう言うと嬉しそうに伸びをした。

廊下では、アウグストに粉したアルフレッドが、ジャンヌの部屋に前で、見張っていた。

王都は、未来のお妃となるジャンヌの事を祝って、都あげてのお祭りムードだった。

初めてのお忍びに、嬉しさと珍しさもあって、キョロキョロと人で賑わう場所を歩き回った。

自分の絵姿が売られて居るのを見て、（何コレ？　私の瞳の色が金色になってる！？　ま、って事は、魔法で瞳の色を変え無くても、誰にもわかりゃしないって、事よね）
そう思ったジャンヌは、人の居ない路地に入ると、魔法で髪の色を茶色く変えた。
パン屋のおばさんが、赤ちゃんをあやしながら店番をしていた。店が急に混んで来て、赤ちゃんは、籠の中で寝かされるとぐずり出した。
ジャンヌが、パン屋に入ると可愛い赤ちゃんの声が聞こえて来る。
赤ちゃんは、ジャンヌの顔を見て、一度はピタリと泣き止むとせがむ様に両手を差し出した。

「まあ、なんて可愛い赤ちゃんなのかしら。　抱っこしてもいい？」

ジャンヌが、パン屋の女将にそう聞くと、女将は「あやしてくれると助かるよ。さっきから泣いてばかりで困っていたところさ」

ジャンヌが、そっと赤ん坊を抱き上げると赤ちゃんは、ジャンヌの長い髪をクイクイと引っ張った。
それは、まるで赤ん坊が、ジャンヌに歌を歌ってくれとせがんで居る様だった。
微笑んだジャンヌは、赤ちゃんを見て、歌を歌い始めた。
不思議と泣いていた赤ちゃんは、泣き止むと、にっこり微笑んでいた。

ジャンヌの歌を聞いていた人達は、歌い終わったジャンヌに拍手をおくった。

「お姉さんのお陰で、ウチの坊やもこんなに機嫌良くなっているし。これは、ほんのお礼だよ。こんなんしかないけどさ、食べて見な」

ジャンヌは、パン屋の女将さんから、お礼にと美味しそうなパンを貰うと、その場で食むっと食べた。

「美味しい！」

「そうでしょ？　ジャンヌ様もこのパンを召し上がって下さると良いんだけどね。あんた、名前なんて言うんだい？　あたしゃ、マリアだよ。そしてこの子は、ディート。ディートリッヒ王子の様に、賢くなって欲しくてね。王子様の名前を頂いたのさ」

「ジャン・・・ジャンヌ」

「へー。ジャンヌ様と同じ名前なんだね」

「ええ。偶然にも・・・」

「ふーん。でも、髪の色はちがうんだね。ジャンヌ様は、金髪で、金眼だもんね」

「そ、そうですね」

思わず顔が引きつったジャンヌは、誤魔化す為に咄嗟に笑顔を作った。

パン屋を出たジャンヌは、誰かにいきなり腕を引っ張られると路地に引き込まれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6437v/

魔剣の君

2011年10月19日07時06分発行